

---

# 宇宙狂時代

万墨人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宇宙狂時代

### 【Nコード】

N6260C

### 【作者名】

万墨人

### 【あらすじ】

はるか未来、宇宙船メーカー「ペガサス」のわずか十八才の社長でもあり、美少女でもあるミリイは、前代未聞の宇宙船によるレースを計画する。ライバル社の「クロノス」に打ち勝つため、なんともみずから宇宙船を操縦しようと言うのだ。彼女は勝利をつかむことができるだろうか？

## ペガサス（前書き）

1950～60年代の少年向けSFを意識した作品です。ですから科学考証はめちやくちやです。ちよつとバカなSFを読みたいと言  
う人はぜひどうぞ！

## ペガサス

1

「みなさん、今期のペガサス・コーポレーションの決算によると、受注数は前年比において三パーセントの減。生産高はさらにしたまわり五パーセントの減少が見込まれております。さらに株価も評価額がさがりつつありましてこのままではいずれストップ安をつけるおそれもあります……」

銀河帝国の首都、地球の洛陽シティにある太陽系最大の個人宇宙船メーカー「ペガサス・コーポレーション」本社の会議室では重苦しい空気のなか、重役以上の役員をあつめた決算報告をうけていた。手元の資料に目を落としたまたたんと報告書を読み上げているのは筆頭重役である遠山専務である。ひよろりとした長身の遠山は、じみなスーツに身を包み、この時代にしてはアナクロともいえるふとい黒縁の眼鏡をかけている。ときおりその眼鏡を神経質になおしているのが癖で、報告するその禿げ上がったひたいにはてらてらと汗がうかんでいた。いま報告しつつあるのは、ペガサス社が未曾有の危機的状況にあるという見通しであり来月にせまった株主総会にむけての対策会議もかねていた。

時刻は午後十一時をまわりつつあり、ひろい会議室のまんなかにしつらえた巨大な長テーブルにはペガサス社の重役たちが全員顔をそろえていた。みなこの会社の草創期からいる古株である。

本来ならこのような会議にすべての重役が直接顔をあわせる必要はない。ホロ・スクリーンによる通信会議でじゅうぶんまにあうのだが、今回だけは社の意向で全員が本社の会議室に集まるよう厳命をうけていた。

この会議室は本社ビルの高層階にあり、不透明の状態にされてい

る窓を透明にすれば、銀河帝国の首都洛陽シティの豪勢な夜景が一望のもとに見渡せる。が、いまは窓はすべて不透明に偏光されなにも見えないでいる。

さまざまな数値をあげ現状を報告しおわった専務の遠山は、手元の水差しからコップに水をそそぎ、ごくりとひとくち水をのみほして口をしめらせた。

「というわけでありまして、現在の危機的状況はみなさんおわかりになったかと存じます。それでこんかいの会議の目的は、この状況をいかに克服するか、その手段をみなさまのお知恵を拝借しまして来月の株主総会へむけての対策したいと思います。みなさまの活発なご意見をたまわりたいと思います」

そう言って全員の口の開くのを待った。しかしいならぶ重訳たちはこそそそとおたがいの顔を盗み見ているだけで、だれひとり口火をきろうつとする者はいない。

「みなさん、なにかご意見は？」

たまりかねて声をはりあげた遠山にこたえ、ようやくひとりの重役が口を開いた。

「えー、つまり問題はわが社の主力商品である個人用宇宙ヨットの売り上げが落ちているということにあるんだよな。つまり宇宙ヨットの売り上げが上向けばいいんだ」

「そうだ、モデルチェンジの時期を前倒ししよう！ それと宣伝だ！ もっと有名なタレントを起用すれば……」

ようやく会議は活発になりつつあった。遠山は重役たちの意見を几帳面に手元の入力装置にメモしていた。

会議はつづき重役たちの意見が出し尽くしたころいっぽうのドアが開かれた。

その方向を見た重役たちのあいだに緊張がはしった。社長が登場したのである。

ペガサス社の社長は、芳紀十八才になる美少女だった。

ミリィ川村。先代のペガサス社のひとり娘である。先代の創業社

長が事故により死亡したことにより自動的に社長に就任した。

燃えるような赤い髪にぬけるような白い肌をしている。おおきな瞳はあたたかな茶色で、きりつとした顎のラインにうすい唇がどことなく意志のつよさを物語っている。小柄で、一見すると十五、六才にしか見えない。しかしプロポーションは抜群で、よく発達したバストときゅつとしまったウエスト、そしてなだらかにふくらむヒップへとつづく。その肢体を髪の毛の色にあわせたまっかな宇宙パイロットの上下つながったスーツに包んでいる。足元もまた真っ赤なブーツでかため、まるで生きている炎のような印象だ。

ミリイはその情熱的な瞳でじろりと会議室に顔をそろえている重役たちを見渡した。

彼女の視線があたりそうになる重役たちはみな顔をそむけるか、視線をはずすかでまともに目を合わせようとしない。みな、恐怖の表情をうつすらうかべている。

彼女が社長に就任した当初、創業時からかわっている重役たちはまるで本気で彼女が社長をつとめるものと思っていた。なにしろ見ての通りの美少女であり未成年でもあった。

しかしミリイが就任してすぐ、かれらは彼女のおそるべき手腕をまのあたりにする。

彼女の最初に手懸けた仕事はその重役の大量解雇だった。いまいる重役たちの二倍の人数を彼女はあれこれと本人の能力のなさを証明し、つぎつぎと解雇していったのである。その証明はすべて事実であり、言い逃れることができないことであり、彼女の意向に逆らえるものはだれもいなかった。いま会議室に顔をそろえている重役の半数は解雇された重役にかわり彼女の手によって引き上げられた者たちばかりである。その結果、ペガサス社の売り上げはのびミリイは自分の手腕を重役たちに見せ付けることになる。彼女が十五才のことだった。わずか十五才で経験豊富な重役たちをもものともしいミリイの手腕にはわけがある。もともと父親のもとの経営について薫陶をつけたこと。そして法律などの知識を記憶RNAの投与に

よる手段でわずかな時間で身に付けられたことなどである。この時代、どんな職業につくのにも年令制限というものはなくなっている。そして義務教育というものも撤廃された。生活に必要な基本的な知識は大量の記憶RNA投与によって身に付けられるからだ。もつとも法律などの高度に専門的な知識を身につけるための記憶RNA投与は大金がかかり、ミリイのような立場の者でなくてはできなかったが。

そして三年、重役たちは全員彼女の言いなりといってよかった。もともとの才能もあるのだろうが、ミリイは生れながらの専制君主であった。命令することになれば、ひとを動かすすべてを彼女は生れながらに知っていたのである。

その三年のあいだ、新興の宇宙船メーカーがペガサス社のシェアを意外な方法で侵蝕してきた。

クロノス、というのがその新興の宇宙船メーカーである。

クロノスはペガサスがやらなかった軍用宇宙船受注という分野に目をつけ、大量の宇宙戦艦の発注を帝国宇宙軍からうけた。その結果豊富な資金力を身につけ、その資金力を背景にいままでペガサスの独断場であった個人用宇宙ヨットのシェアを食い荒らしつつあった。その結果、ペガサスは創業以来の危機にたたされたというわけである。

かつかつかつ……、とブーツの靴音をひびかせ、ミリイは自分のための社長の椅子にどっかりと腰をおろした。その間、ひとことも口を開かない。

そのままひとりひとりの重役の顔をじっと見つめている。

そんなミリイを専務の遠山ははらしながら見守ってきた。

かれはミリイをその生誕から知っている。彼女が生まれてから、筆頭重役の責任として養育係りを自任してきたくらいである。それは封建領主のお姫さまを見守る忠実な家老といった役割であろうか。

「あんたたちの改革案、部屋で聞かせてもらったわ」

彼女の言葉は会議室の空気をびしりと切り裂いた。その口調に全

員がうなだれた。ミリーの怒りはまるで手が触れそうなくらいで、だれも言い返すことはできない。

「なんなのあれは？ あれがあんたたち精一杯の提案ってわけ？ まったくあきれたわ。これじゃクロノスに追い付かれるわけね」

クロノス、という言葉がミリーのくちから出ると重役たちの顔がいつせいに渋面にゆがんだ。この会議で当然議題にのぼらなければならぬクロノス社との競争にどう打ち勝つか、という議案はどうとう出なかったのである。みな、その社名を口にだすことさえ避けていた。

ミリーは部屋を横切ると、窓を操作するパネルを開きスイッチに手を触れた。さっと会議室の一方の窓ガラスが透明になり、洛陽シティの夜景があらわになった。重役たちはその夜景を目にすると目を逸らした。

「みんな、目を逸らさないで！ あれを見るのよ！」

ミリーがゆびさす方向に「クロノス」のロゴが夜景に煌々と輝いていた。ペガサス社の鼻先にクロノス社の本社ビルがそびえている。クロノス社はわざわざペガサス社の目の前の土地を買収して、そこに本社ビルを建設したのである。あてつけ、といていい。

「みんな、この窓を不透明にしてあのビルがないふりをしているけど、そんなことをしても無駄よ。あれが目障りなら、うちが頑張らなければだめなの」

とうとうたまりかねてひとりの重役が口を開いた。このなかでもっとも年令のわかい、木村という名前の重役だった。のつぺりとした顔つきの、甲高い声の持ち主である。

「しかしどうすればいいと言つのです。社長になにかアイディアがあるとおっしゃるのですか？」

木村の発言にミリーはにやりと淒味のある笑いをうかべた。

「アイディアがあるか、って？ もちろんあるわよ。起死回生のね」  
「聞かせてもらいましょるか」

木村は憤然となってそう言い放った。



「それじゃ聞くけど、どうしてうちの主力である個人用宇宙ヨットの売り上げが落ちてきたと思ってるの？」

「そ、それは……」

「比較の対象がないからよ。いくら優秀な性能でも、それがはつきり目に見えるかたちで消費者にわからなければ意味がないわ。クロノスはおなじクラスの宇宙ヨットをうちより五パーセント値引きして売っているけど、性能に注目すればかならずうちのほうが優秀であることはわかるはずよ」

「しかし各販売店にはうちの宇宙ヨットの性能についてはじゅうぶんレクチャーしておりますし……」

「それじゃだめなのよ。数字だけの話しじゃない。もっとはっきり、だれが見てもペガサス社の宇宙船が優秀だということがわからなければね」

「どういうことです」

木村は憮然となった。かれの娘ほどの年令のミリーのまえで、かれはまったく手も足もでない格好だ。

「あんなたち、二十世紀の地球の歴史というものを学んだことがあるかしら？」

なにを言い出すのか、と重役たちは顔を見合わせた。二十世紀といえば、銀河帝国以前の時代であり、人類はまだ恒星間宇宙船も持たない未開の時代であった。なにしろ火星や金星などの内惑星に人類の植民地すらもないころの話である。

「そのころさかんにおこなわれていたものに、自動車レースというのがあったのよ。自動車というのはそのころ主力の交通手段で、四つの車輪で地面を走る乗り物のことなの。その自動車のメーカーはさかにレースに参加して、自社の技術水準を宣伝する手段にしていたわ。どう、おもしろいでしょ」

「はあ……」

ミリーの話題がどこにむかうのかさっぱりわからず木村は生返事をかえした。

「レースをするのよ！ 宇宙船のレースを！ 太陽系を一周する、宇宙船同士のレースをこのペガサス社が主催するの。このレースは太陽系にすむすべての視聴者が注目するはずよ。そしてペガサス社の宇宙船が出場して、優勝を勝ち取ってごらんなさい。どれほどの宣伝となるか！」

ミリイのほほは紅潮し、目はきらきらと輝いた。彼女の口調には熱がこもっている。ミリイはいつしか立ち上がり両手を動かして情熱的な身振りをおこなった。

重役たちはあっけにとられていた。こうなったらミリイはだれにも止められなかった。しばしばミリイはこういう状態になって重役にじぶんの意見を通すことがある。こうなるとミリイはどんな困難があっても自分の意志をつらぬいてしまう。

「みんな、これを見て」

そう言うつとミリイは会議室のスクリーンをゆびさした。みなが目すると、そこには太陽系の概念図が描かれた映像があらわれていた。

「このレースは地球を出発して火星へむかい、アステロイド・ベルトを横断して土星のタインタン基地へ一気にむかうの。そしてタイタンから太陽を一周するコースをとってふたたび地球へと帰還するという手筈よ。この時期、各惑星は合の位置にあつて、ほぼ直列するからこれがいちばん効率的なコースになるわね」

「ずいぶん、手回しがいいですね。この会議をはじめかなり前からずつと計画をすすめていたのですな」

木村のことはにミリイはうん、とうなずいた。重役たちはざわざわと私語をかわしあっている。

「レースだつて？」

「馬鹿なことを……」

「わが社の名前が汚されるのでは？」

「もし負けたらどうなさる」

くちぐちに騒ぐ重役たちをミリイはひややかにながめている。し

だいにそんなミリーの様子を見て、重役たちはだんだん口数がすくなくなっていた。

しん、となつた会議室で木村がふたたび口火をきつた。

「わたしは反対です！ みなさん、わたしはこの場で社長の解任動議を提出します。遠山専務この発言を記録してください」

ミリーの目はほそくなつた。

「解任動議ですって？ 理由はなに」

「社をあやうくさせる無謀な計画をしたということではじゅうぶんでしよう。レースなど馬鹿馬鹿しい」

「なぜ、宇宙船のレースが馬鹿馬鹿しいといえるの？」

「あたりまえじゃないですか。レースとなるとわが社以外の宇宙船も出場することになるのでしょうな？ たとえば……」

「たとえばクロノス？ そうよ、これは公のレースにするつもりよ。クロノスが出場するならもっけのさいわいよ。クロノスをたたきつぶすいい機会じゃない。なにが問題なのよ？」

「もしペガサスの宇宙船がクロノスの宇宙船の後塵を拝することになったらどうなるのです。その危険はないとはいえませんが」

「そうね、でもリスクは負わないと。そうでなくてはこの危機は回避できないでしょう。でも、あんたがそんなことを言い出すとは意外だわ」

「どういうことですか？」

木村はきつとなつた。

「この会議室からずっと亜空間通信装置の反応がでていたのよ。あんたがこの部屋へ足を踏み入れてからずっとね」

木村ののっぺりとした顔は蒼白となつた。

「あんたが重役になってからうちの新型宇宙船のデザインや、設計図が外部に漏れていた証拠があるのよ。あんたが重役になってね！ そう、あんたはたしか設計部門の責任者だったわね」

ミリーは顎をしゃくつた。

と、木村の両側にすわっていたふたりの男がたちあがり、その腕

をがっちりと掴んだ。あつという間に木村の上着のポケットからいいさな通信装置が探り出された。木村はそのときになってじぶんの両側にすわっていた男の顔を見たことのない者であることを気付いた。

「そのふたりはペガサスの防犯部の人間よ。こんどのために特別に配置させていたの。木村、あきらめなさい。あんたのことはすっかり調べてあるわ。あんたの口座には、クロノスから大金が支払われているわね」

木村は齒を食いしばっていた。顔色は蒼白からまっかになっていった。

遠山はおろおろと声をかけた。

「お嬢様、それではいままでの会議の内容はクロノスにつつぬけになつていたということになりませんか」

「遠山、お嬢様はやめて、と言ったじゃない！　とにかく会議の内容がつつぬけになるうとたいしたことはないわ。それよりなぜ木村がスパイのようなまねをしたということが問題よ。ねえ、あんたどうしてこんなことしたの。なにが不満なのよ」

木村は肩をすくめた。冷笑が口の端にうかぶ。

「あんたのような小娘が、ペガサスの社長におさまるのが気に入らねえっていうんだよ！　けっ、お嬢様だかなんだか知らねえが、世間知らずのお姫さまが、社長でございとおさまりかえる。あんたのしたでこれからずっと働くことを思うとぞっとすらあ！」

ミリイの顔色がすうつ、としろくなつた。唇がこまかくふるえた。「出ていきなさい。すぐ、ここから出て行って！」

木村はぺつと床に唾を吐くと、ゆっくりと背中を見せて会議室から出ていった。

ドアの前にたつと、くるりと回れ右をして会議室の重役たちをにらむ。

「おい、おまえら！　いつまでこんな小娘のもとにいるつもりだ。男なら、さっさとこんな会社やめちまえ！　おれがクロノスに紹介

状を書いてやる。いいか、ペガサスにいるかぎりおまえたちの未来はないぞ！ いずれここはクロノスに吸収合併されるんだ。そうになったら、おまえたちの居場所はなくなると思うんだな」

重役たちは木村の言葉にいつせいに動揺した。ミリイは保安部のふたりに叫んだ。

「あいつをここから叩き出さない！」

つかつかと靴音をたて近付く保安部の人間をまたずに木村はにやりと不適な笑みをうかべるとドアをあけて出ていった。

ふうっ、とため息をつくミリイはどずんと音をたてて椅子に腰掛けた。おろおろとしている遠山に命じる。

「遠山。クロノスのシルバーに映話をかけなさい」

「なんですと？」

「おなじこと二度言わせないで。シルバーと話をしたいのよ。はやく！」

ミリイの命令に遠山はぴょん、とちいさく飛び上がるようにして室内の映話装置のもとにかけよった。震える手でスイッチを操作すると、天井の一部がひらき、なかから映話装置の受像機があらわれた。受像機があかるくなつて、そこにひとりの男がすがたをあらわした。

ひろい両肩にがっしりとしたいかつい顔がつている。頭はつるつるに禿げ上がり、ぎよろりとした目をした五十代はじめころの男がミリイをみつめている。眉はほそく、ほとんど見えない。鼻もちも巨大で、全体に蛙のような顔つきの男である。かれはくちもとにふとい葉巻をくわえていた。その葉巻をひとくち吸い付け、紫煙をはきだすと男はにやりと笑いかけて口をひらいた。

「やあ、ミリイさん。今晚は」

「シルバー、ひさしぶりね」

クロノス社の社長、シルバーである。もともとペガサス社の社員だったが、いつの間にか独立してクロノス社を立ち上げ、いまは古巣のペガサス社を追い越さん勢いだ。

「こんなよふけに、いったいなにごとですか。あなたのような美人は、あまりよふかししないほうがよろしい。美容によくありませんぞ」

「くだらないこと言わないで。あたしが映話をした理由はわかってるんじゃないの？ さつきまで、ここで話していた内容は聞いていたはずよ」

シルバーは肩をすくめてみせた。

「ふむ、それについてはノーコメントとしましょう」

ふたりは映話装置の受像機をはさんでしばらくにらみあった。やがてミリイは首をふると口を開いた。

「まあいいわ。あたしは今度、わが社主催で宇宙船同士のレースをやるうと思っているのよ。もちろん、参加する宇宙船のメーカーはペガサスだけでなく、あなたのクロノスにもよびかけるつもりなの。どう思うかしら」

「結構ですな。そういうことはほとんどんやったらよろしい。宇宙船の技術発展にもよい結果になるでしょう」

「それでクロノス社にもぜひ、このレースに一枚噛んでもらいたいのよ。なにしろ、業界二位のクロノスが出場してくれば、このレースも盛り上がりますからね」

「ははあ、業界二位……ですか」

シルバーはミリイの言い方にひっかかったようだった。

「よろしい。ぜひそのレースにはうちからも宇宙船と、パイロットを用意いたしましょう」

「それでね、もうひとつあるの。このレースにはペガサスの参加ももちろんだけど、そのパイロットにはあたしになるつもりよ」

「お嬢様！」

遠山は悲鳴をあげた。黙ってろ、というようにミリイは遠山をにらんだ。

「ほほお、ミリイさんがみずから操縦桿をにぎるのですか」

シルバーの両目がほそくなった。

「どう、面白いでしょう？」

シルバーは笑い声をあげた。

顔に似合わず、けたたましい甲高い笑い声である。かれは笑いすぎたのか、くわえていた葉巻にむせ、しばらくけほけほと咳き込んでいた。ようやく咳き込みをおさえ、涙ににじんだ顔をあげ受像機のスクリーンからミリイをのぞきこむ。

「面白い。ペガサス社がレースを主催し、しかもその社長がみずから操縦桿をにぎるとはマスコミがとびつくでしょう」

「ひとつ賭けをしない？」

「賭け？」

「そうよ、賭けよ。このレースの勝敗を賭けにするのよ」

「どういう賭けです」

「あんたの手元にある、ペガサス社の株よ」

「ミリイさん……」

シルバーの顔がふいに真剣なものになった。さきほどまでのやや滑稽味をおびた表情はぬぐったように消し去っていた。かれの本性が闇の中からぬつと現れたようだった。

「シルバー。あんたがうちの株をひそかに買い漁っているのは知っているのよ。あたしの計算では、あんたはうちの株を二十パーセント取得しているわね。代表質問権を獲得するにはじゅうぶんな数よ。来月の株主総会にあんたが顔をだすつもりでしょう」

シルバーの顔色はあおくなったり、あかくなったりみるまに変わった。ざわざわと会議室の重役たちは私語をかわしあった。

「ねえ、このレースでうちが勝てばあんたの手元にある株をこつちで引き取るわ。そちらが勝てば、あたしが持っている株をあんたに売ってあげる」

「何パーセント売ってくれるのです」

「三十一パーセント。過半数をこえるにはそれだけ必要でしょう」

重役たちはいっせいに立ち上がり抗議をした。

「なんということを！」

「自殺行為ですぞ！」

「遠山！　いまの発言を記録から削除したまえ！」

「削除の必要はないわ！　シルバーどうなの？　この賭けにのって  
みない」

シルバーはぐつと唇をひきしめた。びくびくとこめかみに浮いた  
血管が脈動している。うつすらと汗をかいていた。

「よろしいのですかな。その条件で」

ミリイは昂然と顎をあげ胸をはった。

「あたしはいいわ。あんたが尻込みするのならそれでもいいけど」

「そんなことはしない。よろしい、その賭けにのりましょう。ミリ  
イさんがこのレースでうちのクロノスに勝てばわたしの持っている  
ペガサスの株をすべて差し出します。しかしうちが勝てば、過半数  
をこえる株式をうちがもてるようにする。それでいいのですな」

「決まりね！」

ミリイはにつこりと笑った。

シルバーはにやりと笑い返し、接続をきった。してやったりとい  
う表情が浮かんでいる。念願の、ペガサス乗っ取りが目の前にぶら  
さがっていると確信している表情である。

ふうつ、とミリイは息を吐き出し、重役たちを見回した。

「今日の会議はこれでおわります。みんな、このレースの実現に動  
いてもらうわ。いいわね」

あつけにとられている重役をしりめに、ミリイはさっさと立ち上  
がり会議室を出ていった。あとにのこされた重役たちはひそひそと  
言葉をかわしている。

遠山はおろおろとしていたが、やがて決意の表情をうかべミリイ  
のあとを追った。

「お嬢様！　おまちを！」

「なによ、遠山」

廊下で遠山はミリイに追い付き、声をかけた。はあはあとあらい



息をついている。

「おやめください。あのような賭けなど」

「なぜ？」

「危険すぎます。ペガサス社を賭けものにするのもそうですが、レースにお嬢様がみずから参加なさるなどと……。シルバーがどのような男か、知らぬわけではないでしょう」

「そうよ、どういうやつかあたしが知っているからあんな賭けを申し出たの。いまごろシルバーはしてやったりとほくそ笑んでいるでしょう。そこがつけめなの」

「しかし……」

「あのね、これはペガサスとクロノスの生き残りを賭けた勝負なのよ。それに重役たちのこともあるわ」

「かれらがなにを？」

「シルバーがどうやってうちの株式を取得したと思っているの？」

遠山はあつという顔になった。

「そうよ、うちの役員がシルバーにうちの株を横流ししているにきまつてるわ。いまごろあいつら、うちを見限ってクロノスに頭をさげにいかうか考えているわよ」

遠山はぼうぜんとなっていた。

ミリイとの会話がおわり、クロノスの本社ビルにあるシルバーの私室では、シルバーが高笑いをたてていた。

「わはははは……あの小娘、とうとう血迷ってあんな賭けを申し出てきたわい！ これでうちの勝ちだ！」

笑いがこみあげる。

机の引き出しを開け、あたらしい葉巻を取り出すと専用の鉢で吸い口を切る。口に咥え、火をつけおおきく吸い込んだ。

その姿勢のままぱんぱんと自分の膝をうち、シルバーは天井にむけて葉巻のけむりをふきあげた。

その目はきらめきをたたえ、これからのあれこれについて物思い

をしているようだ。

ふいに真顔になるとシルバーはデスクのスイッチをいれた。

「はい、御用ですか？」

即座にスクリーンに秘書ロボットの顔が浮かんた。

「おい、宇宙船のパイロットに募集をかける。優秀なやつをさがすんだ」

「パイロット、ですか？ それならうちの組合に何人でもおりますが」

「そんなやつはいらん。おれは優秀なやつがほしいんだ。そう、たとえば宇宙軍のトップクラスとかな」

「はあ、わかりました。でも、どういうことですか」

「レースがあるんだよ。宇宙船のレースがな！」

「レースですか？」

ロボットは無表情な顔をつなずかせた。レースというシルバーの言葉に、驚いた様子はない。

「そうさ、ペガサスを打ち負かすために、どうしても優秀なパイロットが必要なのだ。たのむぞ、すぐ募集をかける」

「わかりました」

スイッチをきり、シルバーはにやにや笑いをうかべていた。ぴしやりと音をたててじぶんの禿頭を手のひらでうつ。

ミリーの自室はペガサス社の本社ビルの最上階にあった。彼女は裸になって浴室にはいり、湯槽に湯をためるとゆつくりと肩までつかった。

ふと思いついたことがあるのか、浴室の通話装置をいれる。もちろん音声のみで、映像は切つてある。

「遠山、おきている」

「はい。なにかございますか？」

「あたしのユニコーン号の整備をたのむわ。優秀な整備工場をさがしておいて」

「はい、もちろんでございます」

「それじゃ頼むわね」

通話装置をきるとミリイはふたたび湯槽にふかぶかと身をしずめた。放心したように天井を見つめる。

と、その目尻にひかるものがあつた。

声をしのでミリイは嗚咽をもらしはじめる。

泣いている。

ミリイは泣いているのだ。

彼女は木村の罵言に傷ついていた。いままで十八年の人生で、あれほどの悪意に直面したことはなかったのだ。いみじくも木村がいいはなったようにお姫さまとしてきままにペガサス社に君臨してきた。それが手痛いしつぺ返しをうけたのだ。

ミリイは泣き続けた。

## バック（前書き）

もうひとりの主人公、バックの登場！  
ミリイの計画した太陽系一周レースのことを耳にしたバックはなんと自分も参加しようとするが……。

## バック

2

洛陽シティは銀河帝国最大の都市であり、太陽系の中心である。

人口は数億にのぼり、地下数キロから成層圏までたつする巨大な複合構造体がまるで山脈のようにそびえたっている。

が、そんなきらびやかな印象とはべつにシティにも低所得者がすむ下町といていい区画がある。ふるい建物が身を寄せ合うようにたちならび、巨大な山脈のようなシティの構造体を見上げる場所にあった。まるで無計画に立ち並んだビルはふかい谷間をかたちづくり、迷路のような露地はでたらめな方向に四通八通している。その一角に、ちいさな宇宙船の整備工場があった。

あちこちつぎはぎされたその工場は、いまにもたおれそうな風情でぜんたいにうつすらとほこりと錆で汚れ切っている。工場の建物には「バック宇宙船整備」と手描きの看板が墨痕もあざやかに掲げられていた。そんな一画にも朝日は平等にふりそそぐ。

この一帯は東南にそびえる細長いビルの影になり一日のほとんどの時間は日陰にあるが、朝早いこの時間のみわずかに朝日がさしこむのだ。ビルのすきまからなげかけられたほそい光束はまともに工場の建物を輝かせた。

工場の二階部分は住居になっており、ななめになつた屋根は切り込みがいれられて窓ガラスになっている。その窓ガラスからなかを覗くとベッドがひとつ。そこにはひとりの少年がいびきをかいて寝ている。

RRRRR……。

少年のまくらもとには目覚ましがおかれ、するどい金属音をたて執拗に目をさまそうとしている。少年はうーん、とひとつうなると

片手をのばして目覚ましをさぐった。指先が目覚ましにふれる。しかし目覚ましをとめるスイッチにはとどかない。少年はうん、と身体をのばし目覚ましをつかんだ。

どた、という鈍い音をたて少年はベッドからころげおちた。がちゃん、と目覚ましは床にころがった。ようやく音がとまる。

少年は床に毛布を身体にまきつけたまますやすやと寝息をたてている。いったいなにを夢見ているのか。

ほたほたほた……、というやわらかな足音がドアの方向から聞こえてくる。

きい……という音をたてドアが開いた。

すきまから黄色いまるい顔がのぞく。

クリーム色のまんまるな顔には巨大な両目がくっついていて。そのしたには顔いっぱいひろがった口がある。鼻や耳はない。顔の天辺にはほそいホイップ・アンテナがふらふらとゆれていて、その先端にはちいさな球体がくっついていて。その妙な顔からは二本の自在関節の両足がいきりと生えていた。両足のさきには三本の指がついている。ロボットである。しかしロボットにしては奇妙なデザインである。

じつをいうとこのロボットはへろへろといって、この部屋のあるじの少年のつくったものだった。少年は工場の看板にあるようにパツクといい、この下町で整備工場を営んでいる。

パツクは工場をやっているうち手が足りなくなってロボットを自作することを思いついた。それでぽつぽつとロボットの部品を集めてこつこつ組み上げていたのだったが、手足を制御する回路の設計がどうしてもうまくいかなかった。ロボットの設計、組み立てには高度な専門的知識が必要なのだが、それに必要な記憶RNA投与をうけることが予算的にできなくてパツクは独学でロボット工学をまなんでいた。そのため手足を制御する回路設計について手を抜いてしまい、両方の制御信号をひとつにまとめてしまったのである。その結果、顔から二本の足兼用両手という構成になってしまったという

わけである。

へろへろは部屋のなかを覗いて渋い表情になった。へろへろの顔はやわらかなポリマーできていて、表情をかなり豊富につけることができる。もともとへろへろは家庭用汎用ロボットであったため、人間とつきあうためさまざまな表情と人間並の感情をもっていた。ぺたぺたぺたと顔とおなじようなやわらかな足裏で木製の床をあるき、へろへろはベッドから転げ落ちているパツクのそばに近寄った。

「まったく、また目覚ましを止めてるよ。これじゃ意味ないじゃないか」

ぶつぶつ言いながらへろへろはパツクの身体にまきついていて毛布のはしを片方の足指でつかんだ。

「起きろよパツク！ いつまで寝ているんだ？」

うん、とへろへろは勢いをつけてパツクの毛布を引いた。まきついた毛布からパツクの身体が転がり出る。ころころとパツクは寝たまま床を転がった。まだ寝息はたてたままだ。

「まったく毎朝これだものな」

へろへろはパツクの片手をつかんだ。器用に片足で立ったままへろへろはパツクの手をひっぱる。ようやくパツクの上半身がおきあがった。背中側にまわるとへろへろはパツクをむりやり立たせた。

パツクはなんとか立ち上がった。ふらふらと上体がゆれている。

へろへろはパツクの尻を蹴りあげた。パツクはその勢いでぐらぐらしながらもゆっくりと部屋をでた。

「はやく目をさましてくれよなあ」

へろへろはパツクの手をひき、廊下を洗面所へ誘導していく。洗面所につくとへろへろはパツクの背中をおして強引にそのなかに閉じこめた。ばたん、とドアを閉じると外から鍵をかけた。にたり、と不可解な笑みをうかべたへろへろは洗面所のスイッチをいれた。

じゃあーっ、という水音が聞こえ洗面所のなかからパツクの悲鳴がひびいた。

洗面所のなかではパックが数十本のマジック・ハンドにがつちりと掴まれていた。天井からは身もこおるばかりの冷水がいきおいよく降り注いでいる。マジック・ハンドはパックの身体を掴んで、パジャマを脱がしはじめていた。パックは悲鳴をあげてそのマジック・ハンドからのがれようとしていたが、機械の手は容赦なくパックの着ているパジャマを脱がしている。

ついにパックは素裸にされて冷水をまんべんなく注がれている。ついで壁から石けんの泡がふきだし、マジック・ハンドにはブラシが持たれていた。ブラシは猛烈ないきおいでパックの身体をくまなくごしごしと洗い上げる。これはパックが発明した自動全身洗濯装置である。

プログラムはすすみ、今度は洗顔だ。ごしごしとパックの顔がみがかれ、ハンドはその口をむりやりこじ開けた。なかに歯ブラシがつつこまれ、歯磨きを開始する。うがいのための水が噴き出し、パックの全身はようやく磨きたてられた。

ぶおーっ、と音をたて熱風が洗面所のなかをあたたためる。乾燥がはじまったのだ。パックの全身から水気がきられた。しかしこれでおわりではない。

ハンドの手には櫛と整髪料がある。パックの頭をつかむとハンドは髪の毛を梳りはじめた。さっさと器用な手つきでマジック・ハンドはパックの髪の毛を七、三に分けはじめた。

ようやくすべてがおわり、壁からはあたらしい下着とシャツ、ズボンが出てくる。マジック・ハンドはまたたくまにパックの身体に服を着せはじめた。

やっと終わった。

洗面所の鏡にはきちんとシャツのボタンを胸元までしめた少年がいた。

パックは鏡の自分を見て顔をしかめた。

きちんと分けられた髪の毛に指をつつこむとがしがしと分け目をほぐす。ようやくもとのざんばら髪になって満足した。目はすっか



り覚めている。くびもとがきつちりしているのが気に食わなくてパツクはシャツのボタンをゆるめた。

洗面所から出るとヘロヘロが待っていた。

「ヘロヘロ、いつも言うけどなんで水の温度設定あんなに冷たくするんだよ」

「だってそうしなくちゃ目が覚めないじゃないか。ぼくがどんなに苦勞してパツクの目を覚まさせてやっているか知らないのかい」

これにはパツクはぐうの音もなかった。しょっぱい顔になってパツクは首をすくめた。

ヘロヘロをしたがえ、パツクは廊下を歩いていった。つきあたりが階段で、ぎしぎしと音をたててきしむ階段をおりていく。踊り場から工場の全景がまのあたりに広がる。

工場を見下ろし、パツクのくちもとが自然にゆるんでくる。ヘヘへ……、と自画自賛の笑みがこぼれた。

天井からの明かりとりの窓明かりに照らされ、スマートな船形の宇宙船がその姿をあらわしていた。最新鋭の宇宙船であることはすぐにわかる。船殻は肋材のないシェル構造で、まっしろな塗装をほどこされている。船首はするどくとがり、ふつくらとした胴回りにつながっていた。船腹からはみじかい大気圏飛行のための主翼がつきだし、垂直につきだした船尾の翼は放熱板になっている。全体にいかにも船脚がはやそうで、おそらくその目方とおなじプラチナとおなじ値段がするのではないかと思われた。それはちよつと船内に足を踏み入れてみればすぐわかった。船内は個人用宇宙船に似合わずきわめて広々としている。それは最新技術の重力制御装置や、核融合炉を船殻にうめこむ設計をされているためである。ふつつ機関部は船体の四十パーセント以上の空間をとるのだが、この船にあつてはわずか十パーセントしか必要としない。主要な機関は船殻のうすい部分にすべて押しこめられており、そのためゆつたりとした船室を実現できたのだ。船室もまた贅をこらしたもので、ふんだんにつかわれた金、銀、プラチナなどの貴金属重合素材が目もくらむば

かりの輝きをはなっている。重合金属は、金属原子を特殊な方法でポリマーにしたもので、ほんらい貴金属がもつ性質を変えている。たとえば融点だが、この貴金属重合金属のもつ融点は八千度以上にものぼり、ほとんど太陽表面の熱にもたえる。重合金属をつくる技術は高価で、ふつうもつとありふれた金属原子を重合させる場合に使われるが、この船ではわざわざ貴金属を使用しているのが贅沢のきわみである。船室にはそのほかに数か月分の食料供給装置があつて、この供給装置からは古今東西あらゆる美食が自動調理されて出てくるようになっていた。こんな個人用宇宙ヨットはパックは見たことも聞いたこともなかった。まるで王族か、けたはずれの大金持ちのために設計された特別あつらえの宇宙ヨットである。

その宇宙ヨットが昨日、パックの工場に運びこまれたのである。いきなり持ち込まれてパックは仰天したが、信じられないほどの高額な前払い金を支払われたのでなにも文句はなかった。持ち込んだ係員によると、ちかぢか長期の旅行を計画しているので点検整備をたのむ、ということだった。

前払い金もちろんだったが、このような最新鋭の宇宙ヨットの点検整備を依頼されパックは有頂天になった。整備の仕事をはじめてから数か月、いままで手懸けた仕事といえは近所のこわれた炊飯器とか、洗濯槽の掃除とか宇宙船とはまるで関係のないものばかりだったので、初の宇宙船整備がまいこんでパックはこれでじぶんの腕の見せ所とはりきっていた。

「パック、なににやにやしてんだい」

へろへろに声をかけられ、パックはわれにかえった。

「だってよう、こんなすげえ宇宙ヨットの整備がうちにきたんだぜ。すこしはおまえも嬉しいがれよ」

へろへろは首をふった。

「パック。これはきつとなにかの間違いだよ。こんなすごい宇宙船の整備をまかせるなんて、常識じゃ考えられないだろ。あとできつとあれは間違いでした、って映話がかかってきてもしらないぞ」

へろへろのしごく真つ当な意見にパツクは頬をふくらませた。

「なんだと、そんな馬鹿なことがあるかよ！ きつとおれの腕のたしかさをどこかで聞き付けた金持ちが依頼してきたにちがいないさ！ 見てろよ、こいつの船首から船尾まですみからすみまで点検整備をきちんとやって認めさせてやる！」

大声で叫び、パツクは両手をふりまわしながら階段を降りはじめた。へろへろはあつと口を開いた。

あぶない……！ と言いつけるのも間に合わず、パツクは足を階段から踏み外し、どどどど……と音をたてて転げ落ちた。

「パツク、だいじょうぶか！」

へろへろは叫んだ。

見ると階段を工場の床まで転げ落ちたパツクは、大の字になっている。

と、その目がぱちりと開いた。  
にやりと笑う。

よかった、命に別状はない。へろへろはほつとなった。とんとんとん、と階段を駆けおりパツクのそばに立つとくう……、という音が聞こえてくる。

「パツク？」

「腹が減った……」

へろへろとパツクは顔を見合わせ、笑いだした。

炊飯器からしろい蒸気が噴き出し、スイッチが保温になった。へろへろが釜の蓋をひらくとほわんと炊きたての米の匂いがあたりにひろがる。杓文字をにぎってへろへろはパツクと自分のどんぶりに飯をよそった。

朝食は炊きたての飯に若布と豆腐のおみおつけ。こんがりと焼けた目がついた鮭の切り身に大根の浅漬。それに昨夜の残りの昆布の煮付けなどである。

「いったただきまーす！」

ふたりは声をあわせて叫ぶと、箸を握って飯を食いはじめた。

人間のパックがこのような食事をするのはあたりまえだが、へ口へ口もまたパックにまけずにしろい飯をくちに運んでいる。

もともと家庭用に設計されたへ口へ口の体内にはあらゆる物質を分解し、エネルギーにしてしまう物質変換炉が備えられている。そのためほんらいなら、そこらの石や砂を食べてもエネルギーに変換できるのだが、やっかいなことにへ口へ口の口の中には人間と同じ味覚感覚回路があるのだ。したがって食物の味も判別でき、土や泥を食べるのは相当に心理的抵抗を覚えるのである。

一杯、また一杯とふたりとも飯をおかわりしていく。炊飯器のなかみはたちまち残り少なくなっていく。

「おかわり！」

ふたりは同時に叫んだ。

どんぶりを卓袱台のうえにつきだしたふたりははつしと睨み合った。

「ぼくがさきだ！」

「おれだつて！」

へ口へ口とパックは言い合った。

むっ、とふたりのあいだに火花がちった。

わつとばかりにふたりはもつれあうようにして炊飯器に飛び付いた。へ口へ口がさきに杓文字を手にとった。遮二無二釜のなかの白飯をじぶんのどんぶりによそう。しかしパックも負けてはいない。

へ口へ口のどんぶりを奪い取りなかみを口のなかに掻き込んだ。

「あつ、きたねえぞパック」

「ひゃひにふったひょうはちは！」

さきに食ったほうが勝ち、と言っているようだ。口のなかに白飯をいっぱいにしてもぐもぐして勝ち誇ったようににやりと笑った。

「かえせ！」

へ口へ口はパックからじぶんのどんぶりを奪いかえそうとせまった。パックはどんぶりをかかえたまま走りだした。

ふたりは工場のなかを追いかけっこしはじめた。パックは追い付かれる前にすこしでも飯を掻き込もうと手掴みで食べている。

と、ふいに頭上から聞こえてきた金属音にふたりはたちどまった。きーん……。

甲高い音が近付き、工場の窓ガラスがごまかく振動している。さつと明かりとりの窓に影が横切った。

「なんだろう……」

パックはつぶやいた。

音は頭上から工場の入り口あたりに移動している。

パックとヘロヘロは出入口に駆け寄った。

「あつ、あれ！」

ヘロヘロは片足をのばして空を指差した。

めずらしいほど晴れ上がった青空にぽつん、とひとつ飛行モービルが浮かんでいる。モービルには四基の斥力プレートが下向けについており、青白い光をばなっていた。

飛行モービルはゆっくりと下降しはじめてきた。どうやらパックの工場の前庭に着陸するつもりらしい。

モービルは真っ赤な塗装で、金色のほそいラインが横腹にひかれている。モービルが地上にちかづくのと四基の斥力プレートがまきおこす反重力効果で空気が舞い上がり、ほこりがもうもうとうきあがった。

ほこりがおさまるのを待ってモービルのガル・ウイングのキャノピーがはねあがった。なかから全身真っ赤なつなぎの少女が地面に足をおろす。

赤い髪の毛、茶色の瞳。しろい肌におもわず見惚れてしまうほどのプロポーション。

ミリイだった。

彼女はゆっくりと地面に降り立つと、ぶらぶらとあたりを見回しながら工場に近付いていった。ぼうぜんと立ち尽くしたままのパックとヘロヘロには目にもくれない。あとからひよろりとした瘦身の

五十代の男がしたがってくる。遠山専務だった。

ミリイはパックとへ口へ口を無視したまま工場のなかにはいつていった。

内部にはいるとまっしろな輝きをはなつ宇宙ヨットを見上げた。

「きたない工場ねえ。こんなところにあたしのユニコーン号を運んだの？ 手違いにしてもひどすぎるわ」

「はあ、まったくの手違いでして。恐縮至極です」

遠山専務はふきだす冷汗をあとからあとからちいさなハンケチでふいていた。神経質に眼鏡をとるとレンズを磨きはじめる。

「まったくなんでこのような手違いが生じたのかさっぱりわかりません」

「責任者を追及して！ これはサボタージュといっていいわ」

「はあ、善処します」

「そんな返事じゃだめよ。いいわね、あとで報告書を提出してよ」

「わかりました」

遠山はがつくりと肩をおとした。

「こんな不潔な工場に一晚も置かれたなんて、とても耐えられないわ。ねえ、ペガサスの指定工場にもどしたら絶対、全船体を殺菌消毒してよ。それまでとてもじゃないけど、手を触れる気もしないから」

ふたりの会話を聞いてパックはむらむらと怒りがこみあげてきた。どうやら昨日運びこんだ依頼主らしいが、あまりの言いようである。

怒鳴ろつと息を吸い込んだパックはそのとき発したミリイの言葉にその息を呑み込んでしまった。

「レースまで時間がないんだから」

「レースだって？ あんた、いまそう言ったな」

ふいに割り込んできたパックにミリイは驚いた。いままでこの少年がものを言うとは思ってもいなかったのである。

「なによ、あんた？」

「この整備工場の工場長さ！」

「ああ、あそこにパックって書いてあるあれね」

「それよりさっきのレースってどういうことだい」

「知らないの？ 映話二コースで昨夜から何度もやっているでしょう。このユニコーン号は太陽系を一周するレースに出場するのよ。そしてあたしはこの宇宙船のパイロットというわけ。もつともこんな下町でほそぼそとやっていちゃ、二コースなんて見る余裕はないわね」

ミリイのそんな悪態もいまのパックには聞こえていなかった。夢中になってミリイの顔を見つめている。

「そ、そのレースにはどうやってたら出場できるんだい？ なあ、教えてくれよ」

いまにもつかみかからんばかりに迫られ、ミリイは後退りをした。「ちよつと、そのきたない手をつけないでよ！ いい、レースに出場するにはペガサス社に出場する宇宙船の設計図を提出すればいいのよ。設計図で安全基準がみたされていると判断されれば、登録できるから」

「そうか……、レースがあるのか。太陽系一周レースかあ……」

ぶつぶつとパックは口のなかでつぶやきぼんやりと夢見ているような目付きになる。

くうーっ、とパックは全身にちからをためて、ぱつと顔をあげた。目がきらきらとしている。

「やったぞーっ！」

叫ぶといきなりミリイをだきしめた。驚いているミリイの頬にキスをするとその両手をむりやり掴んでふりまわした。

「いやあー、すげえよ！ レースだってな。宇宙船のレースかあ！」  
あはははと顔を口にして笑うと走りだした。あつという間に工場の裏口へ駆けていくとその姿を消した。

ミリイと遠山、へ口へ口はあつけにとられたままである。

「あの、いったいあのかたはどうなさったのです？」

おそるおそる、といった調子で遠山がへ口へ口に話し掛けた。

「さあ、ときどきああなるんです。気になさらないでください」

「変わったかたですな……」

「あの、それよりあの宇宙ヨットののですが、やっぱり手違いで搬入されてしまったんですね」

「おそれいます。まったくの手違いでございまして。前払い金はもちろんのこと、ペナルティ代もお支払いさせていただく所存です。ですからこのことは内密に……」

「え、ほんとうですか」

金をかえせ、と言われるのではないかと思っていたのでへ口へ口はほつとなつた。ふと見るとミリイがぼうぜんとなっている。パツクにキスされたほほをぼんやりとさすっていた。

「ええと、そのお嬢さん……」

え、とミリイはへ口へ口を見た。

「あの、ぼくへ口へ口つていいいます。パツクの手伝いをしているロボットです。その……パツクのしでかしたことです。が気になさらないでください。あいつなにかに夢中になるとじぶんがわからなくなるんです」

「気にするですって！」

ミリイはきつとなつた。

「いいこと、あたしはあんな馬鹿な子供のしたことなんかこれっばかりに気にしていないから安心なさい。だれがあんな……」

ミリイのほほが紅潮した。

くるりと背をむけると遠山専務に声をかける。

「いきましよう。帰るわよ」

「は、はいっ！」

あたふたと遠山はミリイのあとを追って走りだした。

飛行モービルに乗り込もうとしてふたりは思わず立ち尽くした。

なんとモービルの表面は目茶苦茶に悪戯がきをされている。つややかな車体はめいっばいいろいろな塗料で汚され、キャノピーにも下品な言葉が書き連ねられていた。



「やーい！」

見るとこのあたりの子供だろうか、うすよくれた格好をした十才前後の子供たちが手に手にマジックやクレヨンをもってばたばたと逃げ散っていくところだった。

ミリイは黙ってモービルに乗り込んだ。遠山はあたふたと運転席へもぐりこんだ。

「あ、あのお嬢様。いかがいたしますか？　このような悪戯をされて、被害届けをお出しになりますか？」

運転席から身をねじってミリイを見つめて遠山は話しかけた。ミリイはじろりと遠山を見上げると首をふった。

「よいいなことしなくてもいいわよ。被害届けなんか出したら、警察やなんらやで面倒臭いことになるにきまつてるわよ。あたしはいま、大事な時期なんだから。いいからほっときなさい」

「は、はい。承知いたしました」

遠山は首をすくめると運転席のマイクにむかってペガサス社にもどるよう指示をした。モービルは斥力プレートを輝かせて空中へ舞い上がった。

「おーい、パック！」

工場でヘロヘロはうろつろつとパックをさがして歩き回っていた。たしか裏口にむかって走っていったと思ったのだが、パックはどこにもいない。

ヘロヘロは途方に暮れていた。

いったいパックはどうしてしまったのだろう。だいたいなにかに夢中になるとまるつきり前後の状況が見えなくなるのがパックのわるい癖である。その癖がいま出てしまったのだろうか、あの少女の言った話のどこにかれをそんなに夢中にさせるものがあつたのだろうか。

「おいヘロヘロ」

ふいにパックの言葉が聞こえ、ヘロヘロはほっとなった。きよろ

きよろとあたりを見回すがどこにも姿はない。

「どこだよパック」

「こつちだよ、こつち！」

声は足元から聞こえてくる。

視線をおとしたへ口へ口はぎよつとなつた。

なんとパックが地面から首だけだしてにたにた笑いかけていた。

「パ、パック？」

「なにびっくりした顔してるんだ」

「え？」

よく見ればパックは地面にあいた四角い穴から顔をのぞかせていたのだった。それが地面にパックの生首が転がっているように見えただのである。

「あー、びっくりした。寿命がちぢまつたよ」

「おまえロボットだろう。寿命があるのかよ」

軽口をたたいてパックはよいしょ、と穴から上半身をのりだした。

「さつき、やたら外がうるさかったけど、どうかしたのか？」

「それがねえ……」

へ口へ口はミリの飛行モータービルに悪戯をされたいきさつを話した。

「へえ、そんなことあったのか」

「だいじょうぶかなあ、あんなことあってミリィさん泣いてないかなあ」

「ミリィさん？」

「あ、あの女の子の名前だよ。あとでおつきの遠山さんってひとから教えてもらったんだ」

「おつきのひと、ね。お嬢様なんだ。あの女」

いまいましてにパックはつぶやいた。いまごろになってミリィが吐いた悪態が腹立たしくなってきたらしい。

「それよりパック。そんな穴のなかでなにやってたんだい」

へっへっへ……、とパックは奇妙な笑い声をあげた。ちらちらと

妙な目付きでヘロヘロを見上げる。ヘロヘロはなんだか背筋がさむくなった。パックがこんな目付きのときはなにか災厄の前兆にきまつてる！

「レースだよ、レース！」

「え？」

「さっきあの女が言っていたらう。宇宙船のレースがあるって」

「それがどうしたんだい」

「わかんねえかなあ。おれ、そのレースに出場するつもりなんだ」

「ええっ、でもどうやって出場するつもりなんだい。宇宙船なんて、パック持ってやしないだろう……まさか？」

「なにがまさか、なんだ」

「宇宙船の窃盗は犯罪だぞ！ 重窃盗で十五年の禁固刑……」

「馬鹿。なに言っているんだ。宇宙船ならちゃんとあるんだよ。こっちについてきな」

そう言うパックはふたたび穴のなかに潜った。なんだろうとヘロヘロはついていく。穴のさきは階段になっている。降りきったところがシャッターになっていて、パックはそれを開けてなかにはいった。ヘロヘロがそれにつづくとパックはなかのスイッチを操作した。がくん、という下降する感覚があつてヘロヘロはそれがエレベーターであることを知った。

「おい、パック……」

「しっ、だまつてる。いまにわかる」

エレベーターはぐんぐん下降してついに降りきった。明かりはまるでなく、あたりは真っ暗闇だった。がしゃん、とシャッターが開く音がして、ごそごそとなにかパックがあたりを動き回っている気配がする。ヘロヘロがじぶんの視覚を暗視モードにしようとする。パックが声をかけた。ヘロヘロの視覚装置は赤外線から紫外線、またはミリ波まで見える。

「おい暗視モードにするなよ。びっくりさせたいから」

その言葉がおわらないうちにぱつと照明がともった。だしぬけの

ことでヘロヘロの視覚は開放側のままだったので目が眩んだ。

「わあ！」

ヘロヘロはたじたとした。

見上げると、そこには一隻の宇宙船がそびえていた。

地下室いっぱい鎮座している宇宙船はあちこちつぎはぎだらけで、船首と船尾のデザインはあきらかに違和感があった。さらに右舷と左舷もちがう部品で大気圏飛行用の主翼さえも左右ちがうものでできている。

「い、いったいこれはなんだい！」

「見てわからねえか。宇宙船だよ」

パックは宇宙船の着陸ギアのそばで誇らしげに立っている。

「で、でもこの地下室は……？」

「ああ、ここはおれが見付けたんだ」

「見付けた？」

「そうさ、ここで整備工場をやるときに地下のケーブルとかパイプがないかと音波探査をかけたんだ。そしたら工場の地下にこういう空間があったのを見付けた。どうやら帝国樹立以前の洛陽シティの一部らしいな。ふるすぎて、記録さえ残っちゃいない。ここが下町だってことで、区画整理すらいってないから残されただろう」

「そ、それでこの宇宙船はどうしたんだい」

「サルベージさ。宇宙軍の放出品とか、航宙会社の耐用年限をすぎた宇宙船の部品をやすく引き取って運んで組み上げたんだ。いやあ苦労したなあ。なにしろ部品ひとつひとつの規格がちがすぎるから、繋ぐためにはいろんな手をつかったよ」

ヘロヘロはぼうぜんとした。なんとパックの言うことを信用すると、かれは宇宙船をいちからひとり組み上げたのだという。

おそろおそろヘロヘロは口を開いた。

「そ、それでこの宇宙船どうするつもりなんだい」

「きまつてるさ。これでレースに出場するんだ。そう言わなかったか？」

「ああ、そうかい。ふーん」

じとつ、とへロへロのクリーム色の顔に汗がうかんだ。半笑いの顔で一步、一步と後退りする。

「そうかあ、パックはこの宇宙船で空へ飛び出すんだね。ざ、残念だなあ。ぼく、乗りたいかったんだけどね。で、でも工場があるだろう。あとの仕事はぼくにまかせてくれよ。それじゃ……」

へロへロはくるっ、と回れ右をしてエレベーターに走った。

「待てへロへロ！」

パックの鋭い命令がとぶ。

その声にへロへロはたたらを踏んで立ち止まった。これがへロへロの弱点だった。ロボットであるへロへロの人工頭脳には人間のつよい命令に服従するプログラムが書き込まれており、たとえへロへロが内心服従したくない命令でも、はつきりと強制的に発せられた命令にはしたがうよう設計されている。

「こつちへくるんだへロへロ」

パックは声の調子をさらに強めて命令した。ぎくしゃくした動きで、へロへロは操り人形のようにパックのそばに立った。うらめしげにパックを見上げる。

「なあへロへロ。おれはこの宇宙船でレースに出場したいんだ。いつまでもこんな下町で、整備工場を続ける気はないんだ。それにはこのレースが絶好のチャンスなんだよ。もしこのレースでいい結果が出れば、おれの腕が認められることになる。そうなれば、きつと大企業から声がかけられることになる。出世のチャンスなんだ！」

「なあ、おまえもそう思うだろう。おれといっしょに夢をつかもうぜ」  
「でも、なんでぼくもいっしょについていかなければならないんだい。そんなにレースに出場したければ、パックひとりで出ればいいじゃないか」

「それがそういかなえんだよ。ついてこい。コックピットを見せてやる」

パックは宇宙船の搭乗口にへロへロをつれていった。搭乗口から

は急傾斜の階段になっていて、ひとひとりやつと通れるくらいの通路になっている。

梯子とっていいほどの急角度の階段をえっちらおっちら登ると、そこがコックピットだった。

「せまいなあ」

へろへろはおもわず感想をもらした。それくらいコックピットはせまくるしく、座席がふたつならんでふたりがすわるともういっぱいいっぱいだ。ミリーのユニコーン号に比べると天国と地獄である。

「こつちが主操縦席。おまえのすわるのが副操縦席だ」

「おいおい、勝手にきめないでくれよ」

へろへろは口をとがらせた。

「つべこべ言わずにさっさと座れ」

パックはそう言うのとへろへろの身体をかかえて無理矢理座席にすわらせた。

へろへろは座席にちよん、と座ってそのコンソールをながめた。かくん、と口が開きばなしになる。

「なあんだいこりゃ。ずいぶんふるい形式のコンソールだなあ」

「そうさ。なにしろ部品とりのため、サルベージしたのは半世紀はまえの宇宙船のコックピットだ。航路計算も手動だ」

「手動だつて？」

へろへろはあきれた。

「だからおまえが必要なんだよ。おれひとりじゃ航路計算は無理だからな」

「ええつ、それをぼくにやらせるつもりなのかい」

「おまえはロボットだろう。計算はおてのものじゃないか。おまえの電子頭脳に航路計算のためのプログラムを書き込めばいいだけのことだ」

「おい、気楽に言うけど、そのプログラムを組むのはだれなんだい」  
「おれさ。もう、アセンブルもすませている。ちよつとおまえの外

部入力端子を貸してくれ。ちょいちょいって書き込むからさ」

「冗談じゃないよ。もしそのプログラムにバグがあったらどうするつもりなんだ。書き込むのはばくの電子頭脳なんだぜ」

「心配するな。おれがデバッグもすませているから。動くんじゃない！」

強い調子で命じられ、へろへろの身体は硬直した。パックは鼻歌まじりにへろへろのあたまから突き出しているアンテナの先端部分にケーブルを接続した。

データが雪崩込む感覚にへろへろは歯をくいしばった。

「よし、入力はおわったぞ」

パックの言葉にへろへろは自己診断プログラムを起動した。ファイルを点検すると、あらたな項目がふえている。ファイルを開き走らせてみる。たちまち太陽系すべての惑星、小惑星、衛星、そしてオールト雲の彗星などの軌道がへろへろの脳裏にうかぶ。しばしへろへろはその感覚に陶然となった。

「どうだ、なんかへんな感じはするか」

気が付くとパックがへろへろの顔をのぞきこんでいた。その表情をひとめ見てへろへろは叫ぶ。

「あ、やっぱり自信なかったんだな！　もしかしたらバグがあると思っていたろう」

「へ、ばれたか」

「やめてくれよ、本当にもう……。もしバグがあつたらばくが困るんだぞ」

「なあ、いまのプログラムでこの船の軌道計算はできるだろ」

へろへろはパックの言葉で脳裏に太陽系の縮図を思い浮べた。たちまちデータの奔流にくらくらとなる。そのデータの海のなかで、パックが組み立てた宇宙船が自由にへろへろの想像上の宇宙空間をさまざまな軌道を描いて突進していく。

「ああ、なんとかね。でもこの計算を実際の操縦にいかすには、コンソールにはひとりじゃたりない……。あつ、ということはそう

いうことか！　ぼくを軌道計算専用の計算器にするつもりだったんだ」

「そうさ。なんしろ複雑な計算だからな。おまえが航法装置を受け持ってくれば、おれは操縦に専念できるからな」

「ちえ、ロボットをなんだと思っているんだい」

「そう怒るなよ。ほら、これを買ってきたから」

ふいにへろへろの臭覚器官にいい匂いがただよって、へろへろの口中に唾がたまってきた。

「バナナだ！」

へろへろは歓声をあげた。

どういうわけか、へろへろはこのバナナという果物が好物なのである。バナナさえあれば、前後をわすれるくらい夢中になる。

パックはコックピットのなかにかくしていたアイスボックスのなかから、黄色いバナナをひとつさとりだしへろへろの目の前にぶらさげた。

「なあへろへろ。協力してくれるよな」

へろへろの両目はすっかり目の前のバナナに奪われている。パックはゆつくりとバナナのふさを左右にゆらしている。それにつれてへろへろの両目も左右にゆれる。やがて身体全体がゆらゆら左右にゆれはじめた。

「返事は？」

うん、とへろへろはうなずいた。

「それ、食べ！」

ぽん、とへろへろの座席にバナナが置かれた。へろへろはバナナのふさに飛び付いた。

「バナナでつるなんて、ひどいよ」

すっかりパックの術中にはまったかつこうのへろへろは、われにかえって文句をいった。

「なに言ってたんだ。ぜんぶ食べちゃったくせに」



「それ言われるとつらい」

へ口へ口はしゅん、となった。

「それよりあのミリイって女。映話ニュースでレースのことやって  
いるって、言っていたよな」

「そうだった」

「そうだよ。ちゃんと聞いたんだから。ちょっと映話をつけて見よ  
う」

パックはそう言うと、コンソールの映話装置の電源をいれた。メ  
ニューを呼び出し、そこからニュースの項目をえらび、マイクにむ  
かって命令する。

「太陽系レースに関するニュースをたのむ」

映話サービスはパックの命令を受け取り、さっそく検索を開始し  
た。すぐさま太陽系レースに関するニュースが選り出される。

「どのような情報が必要でしょうか」

映話サービスのロゴがモニターにうかびあがり、二十歳前後の若  
い魅力的な美人がにっこりと微笑んでいた。映話サービスの送り出  
している画像で、もちろんこの女性は現実には存在しない。

「レース出場に関するものを」

パックのこたえに女性はうなずいた。彼女の映像が消えると、そ  
こにはペガサス社のロゴマークと、本社ビルを映し出す映像にきり  
かわる。

「ここは洛陽シティにあるペガサス社の本社ビルです。この一階に  
おいて、出場希望者は乗り込む宇宙船の形式、およびその設計図を  
提出しなくてはなりません。設計図審査などにより安全にレースを  
進行できることが証明されますと、出場希望者には即時レース会場  
へのパスが支給されます」

「ふうん、つまりその審査にうからないといけないってわけか……」  
「そうです。設計図の規格はとくに決められていませんが、確実な  
ものをと求められています」

へ口へ口が口をはさんだ。

「なぜ情報ネットで設計図のデータを送らないんだい。わざわざ本社ビルまで出向く必要があるのかい」

「それについてはペガサス社は説明の要を認めていません。ただ推測するに、情報の安全性を求めているのかもしれませんが。セキュリティ・チェックが完璧といっても、どこかで情報のリークはありますし、それに出場するのはペガサス社の宇宙船ばかりでもありませんからね」

パックがうなずいた。

「そうか、ペガサス社以外の宇宙船メーカーがそれを望んだってこともありうるね」

パックはペガサス本社ビルの地図のハードコピーを要求すると映画のスイッチをきった。

「よし、あしたは出場権をとりにペガサス社にいくぞ！」

## タイガー（前書き）

バックはペガサス社主催のレース出場をめざす。

いっぽう、クロノス社のシルバーはタイガーと言う評判の良くないパイロットを雇うことに。

このタイガー、一癖ありそうであるが……。

## タイガー

### 3

ペガサスの本社ビルと向かい合わせにあるクロノス社のビルは、全体が黒で統一されている。デザインとしてインカ帝国の階段ピラミッドをモチーフとしている。黒々としたガラスにはまわりの景色が映し出されていた。

そのクロノス社のビルを見上げる男がひとりいた。

二メートルちかい身長に、体重は百キロをかるくこえる。しかし肥満体という体付きではなく、全身筋肉のかたまりといった体格である。ふとい首筋には束のように盛り上がる筋肉がうかび、そのうえに載る顔はまるで岩石を鑿一本で彫りあげたようなごつごつとした印象だった。たくましい顎には不精髭がうかび、頭にぴったりとはりついたようなヘルメットを被っている。

男の手には酒壺が握られていた。壺のそこにはわずかに酒がのこり、ちやぶちやぶと音をたてている。男はその酒壺をぐい、とあおり残った酒を一気にのみほした。唇に残った酒滴をぐつと片手の甲でぬぐうと、手の壺をひよいと投げ捨てた。がしゃん、と壺のわれる音を背後に、男はゆらゆらと歩きだした。

酔っている。

男の息は熟した柿のようにくさく、目はとろんと濁っていた。ぐらり、ぐらりと上体をゆらしながら男はクロノス社の受け付けに入っていた。

受け付けにはアンドロイドの女性が応対をしている。男は受け付けカウンターに肘をつくとなりと歯をむきだして笑った。

一週間は歯をみがいていないのではないかと思われる黄色い前歯を見せて男はにたと笑いかけた。

「はい、なんでしょうか？」

アンドロイドはそんな薄汚い男にたじろぐことなく、ほがらかな笑みをうかべた。

「姉ちゃん、ここで宇宙船のパイロットを募集しているって聞いたんだけど、ほんとうけえ？」

「ええ、その通りですわ。募集に応募なさりにきたのですか？」

「そおさ、おれさまはタイガーってんだ。優秀なパイロットをさがしているんだらう。だったらおれはぴったりだ」

タイガーと名乗った男はふたたび笑った。

クロノス社の最上階にあるシルバーの私室では、クロノス社最高責任者シルバーが窓から見えるペガサス社の本社ビルをながめていた。その両目はらんらんと野心に輝いている。

「レースか……。ミリーのやつ、なにを考えておる……」

最初ミリーから取引の話聞いたとき、これでペガサス社をとつとるチャンスが転げ込んできたと思った。しかしだんだん考えているうちに、むしろ彼女にうまうまと乗せられてしまったのではないかという疑念が黒雲のようにわいてきたのである。疑念は確信に変わりいまや焦りになった。

そのとき部下から宇宙船パイロットのオーディションがあるという報告があった。

そうだ、パイロットを募集していたんだ……。シルバーは大股东であるくと、会場に予定されている階へ急ぐためエレベーターに乗った。

会場のある階でエレベーターの扉が開くと、いきなり大声の怒鳴り声がした。

「うるせえ！ てめえなんか、用はねえんだ。さっさとうせやがれ！」

いったいなにがあった……。シルバーは硬直していた。どすん、ばたん、という人があらそう音がして数人の悲鳴があがった。

エレベーターの扉からおそろおそろ顔を半分だけ出して外をのぞきこむ。

「だだだだだ！ と数人の男たちがもつれあつて転げ込んできた。わ！」

シルバーはその数人ともつれあい、床にころんだ。あわてて立ち上がると、床には数人の男がうめきながら横たわっている。みな顔や手足に打ち身をつくっていた。

「な、なんだ……こりゃ？」

ぱんぱんぱん、と両手を打合せる音にその方向を見やると、そこには床によこたわった男たちを見下ろして、上機嫌の大男がいた。

「やあ、あんたがシルバーか。おれはタイガー。よろしくな！」

「だれだ、おまえは？ いったいここでなにをしている！」

「おいおい。あんた、優秀なパイロットを募集していたんだろう。だからおれさまが来てやつたんじゃないか」

「パイロット……、募集？」

あまりに強烈な無礼さに、シルバーはうろがきていた。馬鹿のようにタイガーの言葉を鸚鵡返しにする。

「そうさ、ここにいるガラクタどもが何人いたって、レースには……いやペガサスには勝てねえぜ」

そう言うタイガーはにたりと笑いかけ、その顔をシルバーに近付けた。息の臭さにシルバーが思わず顔をそむけるとタイガーはシルバーの胸ぐらをつかみささやいた。

「知っているんだぜ。ミリイちゃんとの賭け……」

シルバーはぎよつとなった。タイガーはまたにたりと笑いかけた。「おれはそこらにいるパイロットとちがって、どんな手を使っても勝つてやる。いいか、どんな手をつかってもだ。この意味がわかるよな」

シルバーの視線がするどくなった。

「タイガーとかいったな。ふむ、だんだん思い出してきたぞ。たしか数年前、帝国宇宙軍のなかで不名誉な罪で軍法会議にかけられた

将校がいたな。なんでも戦友を……」

シルバーが言い掛けるとタイガーはそれをさえぎった。

「おっと、それまでだ。どうだい、おれと手をくまねえか。あんたはこのレースで勝利がほしい。おれは金がほしい。それとレースで使用する宇宙船を、おれに無料供与ってことでどうだい」

「なぜだ。無料供与ということは、つまり宇宙船をただでくれ、ということだぞ」

「じぶんの宇宙船を持たないパイロットがどんなにみじめなものか、あんたは知らねえんだ。おれは宇宙船がほしい。なんとしてもな……」

シルバーの脳裏で複雑な計算がはじまっていた。損得をはかりおわり、シルバーは口を開いた。

「よし、おまえにいいものを見せてやる。いっしょにきてくれ」

シルバーはタイガーをひきつれエレベーターへもどった。タイガーはにたにたと笑いながらそれにつづいた。エレベータの操作盤にむかい、そこにのぞいているちいさなレンズにじぶんの瞳をちかづけた。

「網膜照合か」

タイガーの質問にシルバーはかるくうなずいた。

「ここから行くところは、クロノスの社員すら知らない。いわばうちのトップ・シークレットというわけだ。もちろん、網膜照合だけではないよ。この瞬間にも、このエレベーターのなかでは、おれたちの体組織のあらゆる特徴を透視している走査措置が動いているんだ。おまえにも、守秘義務をおってもらうぞ」

「怖いなあ……」

ちつとも恐怖の色を見せず、タイガーはにたと笑っていた。

エレベーターは下降しはじめた。最新の重力制御技術をつかつているので動いている感覚はない。しばらくエレベーターは下降していったが、やがてとまった。

「ここは地下十キロにあたる」

シルバーの言葉にタイガーは驚いた。エレベーターにはほんのすこししかいなかったからだ。

「ずいぶんふかいな。地上からの探査をふせぐためにか」

「まあ、そうだ。ここは絶対秘密にしておかなければならんだ」

エレベーターをでると、そこは通路になっている。幅十メートル、たかさ五メートルほどの蒲鉾型にほりぬいた通路で、ちいさなランプが点々と天井にとり奥へと消えている。そうとう距離が長そうだ。エレベーターのそばにはゴルフのカートに似た車があった。シルバーはタイガーをうながしてそれに乗り込んだ。みずからハンドルをとり、動きだす。

電動のカートはかるいモーター音をたて、まっすぐにほりぬいた通路を走っていく。

「クロノスのようなおおきな企業になると、いろいろ世間に知られたくない秘密が生まれてくる。なかには永久に封印せざるをえないものもでてくる」

シルバーはつぶやくように語りはじめた。タイガーはうなずいた。「まあな、人間だってだれしも触れられたくない、脛に傷ってやつがあるさ」

カートは一時間ほど走ったろうか。ようやく通路の行き止まりに達した。巨大な扉が行く手をふさいでいる。

シルバーはその扉に手をおしあてた。

ただそれだけで扉は動きだした。ゆっくりと観音開きに開いていくと、地下室があらわれた。

照明がともり、タイガーはぼうぜんとしてつぶやいた。

「こいつはすげえ……」

そこにはまがましいスタイルの宇宙船があった。

ぜんたいに角張り、直線がおおい。おおきさは個人用の宇宙ヨットほどだが、その船体のいたるところにレーザー銃座やミサイルのランチャー。機銃などがつきだしている。どう見ても戦闘宇宙船だった。船体は迷彩色に塗装され、軍の記号があちこちに印されていた。



る。

「聞いたことがあるぜ。なんでも帝国宇宙軍のだれかが奇襲用の長距離宇宙艇を提案したってことだ。しかし予算がつかなくて、数隻試験機がつくられたただけでおわったということだったが、こいつがそうか……」

「おまえはべらべら喋りすぎる。いろいろ鼻をつつこんでいるらしいが、そう口がかかるくちは長生きできんぞ」

「なあに、こうして話せるのもあんなただだよ。その気になれば、貝のようにとじているさ。こいつをおれにくれるっていうのか？」

タイガーはよだれをたらさんばかりだった。

「ああ、だがこいつを乗りこなすのは難しいぞ。速度、航続距離ともそこらの個人用ヨットとは桁違いだが、エンジンが敏感でいわば暴れ馬といっていい」

「楽しみだ。そうでなくちゃ、勝てねえよ。しかし氣にくわねえところかひとつだけあるな」

「なんだ、そりゃ」

「塗装だよ。こいつはおれの好きなように塗り替えてくれ」

「ほら、行くぜ」

ヘロヘロが声をかけ、パックは一步足をふみだした。しかしその歩みはぎくしゃくとしていて、右足がでると右手がでて、左足がでると左手が前へでる。

不安になったヘロヘロがパックの顔を見上げると蒼白である。

「だいじょうぶかい」

「あ、あたりまえだろ。へ、平気だよ。なんでえ、受け付けくらい」  
そう言いながらパックの膝はかくかくと震えていた。

パックはペガサス社の前にきていた。

それまで洛陽シティのこんな中心部に足を踏み入れたことはなく、天にまで届きそうな巨大なビル群に圧倒されていたのである。地上数キロにもたつする摩天楼の頂上ちかくは空にとけこみ、見上げる

だけで押しつぶされそうな気分になる。

ペガサス社のビルはそのなかでも図抜けてひろい敷地をもっていた。一階部分の前には自然がたくみにとりこまれ、公園のようになっている。ああおとした芝生にはベンチや四阿が点在し、池には噴水がせいだいに水を吹き上げている。

そのなかを歩き回る人々はみな最新のファッションに身をつつみ、忙しそうな早足で行き交っている。それを見るだけでパックはおじ氣付いていた。

「さあ、行こうよ」

ヘロヘロはうながした。

パックはぼうぜんと立ち尽くしていたが、ヘロヘロに言われてわれにかえったようだった。

うん、とひとつうなずくと歩きだす。

ペガサスの本社ビル一階にある太陽系レース出場審査受け付けにはおおぜいの人々でごったがえしていた。レース出場を申請するパイロットとその関係者もちろんだが、それ以上に報道陣があつまっている。なにしろレースに出場しようとする人間はたいてい有名なパイロットばかりで、大金持ちがおおい。自前の宇宙船を持ち込んで出場するには、財力が必要なのだ。そのなかでおおくの報道陣をあつめているのはマローン少佐だった。

かれは宇宙軍の退役将校で、いくたの冒険で知られている。

数度の大戦に参加し、また帝国アカデミーの深宇宙探査に出掛けしている。そのため何度も生命の危機におちいり、その身体の間とどの部分は人工の臓器におきかえられたサイボーグになっていた。灰色のプラスチックの皮膚におおわれたマローン少佐は一見すると旧式のアンドロイドのように見える。いまなら完全に違和感のない人工皮膚が開発されているから、その気になればふつうの人間そっくりの外観にとりかえることもできるが、かれはいつまでもこの見かけにこだわっていた。

そのほかにもペガサス社以外の宇宙船メーカーの参加パイロット

や、著名な資産家で趣味で宇宙船パイロットをしている有名人などが集まってきた。それらの人々に報道陣が同心円をえがいて取材をしていた。

それらがかもしだす喧騒にパックはたじろいだが、それでも目的を思い出してまっしぐらに申請受け付けカウンターへ急ぐ。

「あの、すいません。出場の申請をしたいんです」

パックはのびあがるようにして、受け付けのカウンターごしに話しかけた。受け付けの美人アンドロイドは顔をあげる。

カウンターが高く、奥行がありすぎるのと、パックがひといちばい背が低いため声だけが聞こえてパックの顔は見えない。

と、カウンターのむこうからパックの顔がひよい、とのぞいた。よじのぼるようにしてパックはカウンターに伸び上がった。足下にはヘロヘロが踏み台になっていて、パックが顔を出せるようがんばっていた。

「申請ですね。ありがとうございます。あなたの宇宙船の設計図を提出してくださいますか」

アンドロイドは感じのいいほほ笑みをうかべた。

パックは肩からななめにさげていたバッグの口をひらくと、なかから一枚の透明なプラスチック・カードをとりだした。かれの宇宙船の構造がファイルに書き込まれているデータ・クリスタルである。アンドロイドはカードをうけとると、手元の入力装置にさしこんだ。カードのデータがアンドロイドの内蔵している人工頭脳のなかへ装置を通じて転送される。ファイルの中身を開いて、アンドロイドはくびをかしげた。

これはほんとうに宇宙船の内部構造なのだろうか？

いままでかなりの量の宇宙船の申請ファイルを受け取ってきたが、これほど全体がこんがらかった宇宙船の構造は見たことがなかった。ファイルで見られる構造のなかにはあまりに古すぎて、その機能を推測することすらできないものもある。レースへの安全基準をまもる、というのが彼女に課せられた使命である。だが、これではこの

宇宙船が安全か、そうでないかを審査することはできない。

「申し訳ありません。これではレースに出場するのは無理かと存じます」

「なんでだろう！」

パックは大声をあげた。

「あの、この設計図ではこの宇宙船が安全にレースをすることができかどうか判断できません。わたしどもは安全にレースをするよう義務付けられております。このような構造の宇宙船が安全に宇宙で航行できるかどうか……」

「なんだと、おれの宇宙船が飛ぶことができねえと言うのか！」

パックはかつとなつてカウンターをどん、と叩いた。その音にまわりの人々がえっ、というような顔になつて注目した。

パックはどんどん、とカウンターをこぶしで叩き続けて喚いた。

「この宇宙船はおれがじぶんで組み上げたんだ！ 安全かどうかはおれがいちばんよく知っている。それともなにか、けちつけるつてのか！」

「お、お客さま……」

アンドロイドはパックの怒りにおろおろとなつてしまった。なにしろ人間がこのように怒りをあらわにするのを見るのははじめての経験である。どうしていいかわからない。

「どうしたんだ」

やわらかなふとい男の声に、パックはアンドロイドをにらんだまま答えた。

「このアンドロイドがおれの宇宙船にけちつけやがったんだ。おれの宇宙船だぞ！ 安全に宇宙を航行できるかどうかからねえ、なんて言いやがる。けっ、なに言つてやがる。危険な宇宙船を、このおれさまが作るわけないだろう」

「ほう、その宇宙船はきみがじぶんで組み立てたのかね」

男の声は興味深げになった。

「そうさ、部品をひとつひとつサルベージして探して、使えないの

は修理して……どんなに苦労したか」

「それは面白いな」

「なにが……」

面白いんだよ、と言いかけうしろをふりかえったパックは絶句した。灰色の艶のない皮膚。ロボットのような外観。ふたつの視覚レンズが赤いひかりをはなっている。

「マ、マローン少佐！」

「わたしの名前を知っているのかね」

「は、はいっ！」

ほほを真つ赤にしてパックは直立不動になった。

「少佐の伝記を読みました。稲葉第四惑星での冒険とか、第三次銀河大戦での活躍とかみんな読みました！」

「そうか。それは嬉しいな。それで、どうしたのかね？」

おだやかな少佐の声にパックは説明した。

「ふむ、そうか。それではそのデータをわたしに見せてくれないか」  
「は、はい……」

パックはデータのはいったクリスタル・カードをマローン少佐にわたした。少佐はうけとったカードをじぶんの腰にある挿入口に差し込んだ。瞬時にデータが少佐の補助人工頭脳に転送される。少佐はそのデータを通信装置によって洛陽シティの中央情報管理センターへおくった。少佐はじぶんの管理優先権を利用して、そのデータの評価を要請する。中央情報管理センターでは、パックの作った宇宙船の設計図をもとにシミュレーションを開始する。

センターからの結論をうけとり、マローンはにつこりと笑った。

「ああ、いいようだ。この宇宙船ならじゅうぶんレースで戦える」  
「ほんとうですか」

「うん、だいじょうぶだよ。きみ、だいじょうぶ。この少年の宇宙船は、レースに出場していいよ」

アンドロイドはぼうぜんとなっていた。マローンと中央情報管理センターの電子のやりとりを傍受していたのだが、マローンのつか

った優先権はかなり高度なレベルのもので、それをこのサイボーグがなぜ使えるのかわからなかったのである。彼女にとって世界のすべてはこの受け付けカウンターのみで、それ以外のことは想像の外だった。

「マローンさん！」

女の子の声で、マローンはふりかえった。

「うへっ！」

パックは驚いた。あのミリイがいたのである。ミリイもまたパックに気が付いた。

「あんた、なぜここにいるのよ？」

詰問調の言葉にパックはかっとなった。

「レースの出場の申請にきたのさ」

ぶっきらぼうに答える。ミリイは目を丸くした。

「あんたが？」

「ミリイくん。この少年と知り合いなのか」

マローンに尋ねられ、ミリイはなぜかほほを赤くした。

「ええ、ちよっと……」

「あの、ぼくパックといいます」

「ぼくへロへロです！」

「おまえは黙ってるよ」

「なんでだよ」

パックとへロへロはマローンの前でにらみあった。

そのマローンにミリイが話しかける。

「マローンさん。レースに出場するんですか」

「うん、宇宙船のレースなんて面白そうじゃないか。ぜひ、参加したいものだ」

「マローンさんが参加してくればうれしいです」

ミリイの様子にパックはくびをかしげた。

「あの……ミリイさん？」

ミリイはパックのそんな態度に眉をあげた。

「あら、今日はずいぶん素直じゃない？」

「どうしてマローン少佐とそんなに親しいんだい？」

パックのひそひそ声にミリイはにっこりとなった。

「あら、だってマローンさんの乗る宇宙船はうちの設計による特別製品なのよ」

「うちの宇宙船……だって？」

マローンは笑いながら説明した。

「彼女はペガサス社の社長なんだよ。この太陽系一周レースのね」

「ええっ！」

パックは驚いた。まじまじとミリイを見つめる。

「きみが、社長？」

「そうよ。びっくりした？」

ミリイはくすくすと楽しそうに笑った。そんなミリイをマローンはにやにやしながら見つめている。マローンの視線に気付いたミリイはもの問いたげに見上げる。

「いや、きみがこんなに楽しそうな顔を見るのはひさしぶりだからね。このパックくんと、いい友達になりそうだな」

「そんな……」

ミリイは真っ赤になった。

「よおお、なにくっちゃべってんだあ？」

いきなりの胸間声にミリイはふりかえった。

大男がひとごみをかきわけ、パックたちのほうへやってくる。あしどりはもつれ、顔は真っ赤にほてっていた。

タイガーだった。

タイガーはふらふらとやってくると、ふーっと息を吐いた。むっとくる酒臭い息がかかり、ミリイは顔をしかめた。

「いよーう、こりや可愛い子ちゃんじゃねえか。どうやらペガサス社の社長さんのミリイちゃん、とお見掛けしますな」

そう言っただけでタイガーはにたにたと笑いながらミリイにしなだれかけた。

「いやあ！」

ミリイは悲鳴をあげた。マローンは片手をのばし、タイガーの肩をつかんだ。

「いてえ！」

マローンのサイボーグのちからで肩をつかまれ、タイガーは悲鳴をあげた。

「なにしゃがる……あつ、てめえは！」

タイガーはものすごい目付きになってマローンをにらんだ。

「きさま、マローンか」

「そうだ。タイガーひさしぶりだな。まだこんなことをやっているのか」

「うるせえ！」

タイガーはマローンの腕をふりはらった。

「お前もこのレースに出場するのか。え、どうなんだ」

「その口振りでは、きみも出場するらしいな」

「けっ、なにをえらそうに……ああ、そうだよ。おれさまもこのレースに出るんだ。へへへ、お前とはライバルってわけだな」

タイガーはふいににたにた笑いをしてマローンを見つめる。しかしそのまなざしは敵意にみちていた。

「タイガー。レースでは正々堂々と戦いたいものだな」

マローンは冷たい口調でタイガーの顔を見つめている。しばしタイガーとマローンのあいだに視線の火花がちった。さきにタイガーは目を逸らした。

「へっ、レースが楽しみになってきやがった」

肩をゆするとわざとゆっくりと歩きだす。立ち去る間際、ふいにふりかえるとマローンに捨て台詞をはいた。

「マローン。レースでは気をつけなよ。なにがおきるかわからないのがレースだからな」

「それはどういう意味だね。タイガー」

「さあな。とにかくレースが楽しみだぜ」



そう言うときタイガーは歩み去った。

ミリイは不安そうにマローンを見上げた。

「マローンさん。いまのタイガーとはどういうご関係なんですか？  
なんだか、マローンさんなんだかすごい敵意をもっていたようです  
けど」

「あのタイガーとはわたしと昔にちよつとしたことがあつてね……  
いや、これまでにしてくれたまえ」

きつぱりとした口調にミリイは口をつぐんだ。それほどマローンの  
口調は有無を言わせぬものだった。

「シルバーさん。ご存じのようにわたしはペガサスを辞めてきまし  
たよ。これでわたしは自由の身となりました。これからばりばりク  
ロノスのために働きますよ」

クロノス社の社長室で、シルバーとむきあっているのは木村だっ  
た。あぶらのういた顔に卑屈な笑みをうかべ、シルバーを見上げて  
いる。シルバーは露骨にいやな顔をした。

「それは知っている。しかしなぜわたしに会いにきたのかね」

シルバーの言葉に木村は愕然となった。

「シルバーさん、それはないでしょう。わたしはあなたのためにス  
パイのまねごとまでしたんです。これからわたしの身の振り方  
になんらかの責任を感じてもいいはずだ」

「思わんな、そんなことは。わたしは有能なスパイにはいくらでも  
金をだす。しかし無能な素人にはびた一文もだそうとは思わん」

「なんだと！」

木村はたちあがった。唇がわなわなと震えている。

「あんた、そんなこと言っているのか？ おれがあんたのためにど  
んなことをやってきたか、すべて明るみにだしたらクロノス社はど  
うなると思っている」

「どうなるというのかね？ たしかにきみはわがクロノスのために  
いろいろ動いてきたが、そのことを証明する証拠はなにひとつない。

いいとも、やりたまえ。暴露でもなんでもやるがいい。しかし覚えておいてほしいが、この洛陽シティのほとんどの報道機関にはクロノスの息がかかっている。どこの報道機関にもっていても、門前払いされるのがおちだ。それと、なんらかの方法できみがやったことをあかるみにだせたとしても、それでどうなる。きみのキャリアはもうおしまいだ。これからどこの企業もきみの再就職を受け入れるところはなくなるよ」

木村は絶句した。こぶしをかため立ち尽くしている。

「き、きさま……！」

「まあ落ち着け。いままできみに支払った金額はそうすくないものではないはずだ。その気になればあと数年はしずかに暮らしていけるだろう。いいかね、あまりうるちよろするんじゃない。わたしは温厚な人柄で通っているが、その気になればいろいろ考えるからね」最後のシルバーの口調はあきらかにどすをきかせたものだった。

木村は蒼白になった。しばらくふたりは睨み合っていたが、木村はがくりと肩をおとした。敗北を認めたのだ。

「わたしの言い付けをまもりたまえ。すべてのことにかたがつけば、わたしもきみの身の振り方を考えんでもない」

「わ、わかった……」

小声でつぶやくと木村はドアへむかった。ちからなくドアをあけ、外へ出る。扉がしまつて、ようやくシルバーはほっとため息をついた。デスクのしたにかくしていた右手をだすと、そこには銃がにぎられていた。

「ずいぶん用心深いじゃねえか。あいつがおまえに襲いかかるとでも思ったのかい？」

社長室のとなりの部屋からタイガーがあらわれた。にやにや笑いをしている。

シルバーは皮肉な笑みをうかべた。

「そうになったら、おれはあいつを見なおしたろうがね。どっちにする口だけの男だ」

シルバーは手ににぎった銃をデスクにもどした。

「話しとはなんだ？ なにか問題でもあるのか」

「うむ、すこし改造をくわえたい」

「改造？」

「いや、改造というよりは装備の変更かな。これを見てくれ」

そう言っただけで、シルバーの前に宇宙船の設計図をひろげた。あの地下にねむっていた戦闘機の設計図である。それをひとめ見たシルバーは顔をかえた。

「おい、これはどういうことだ。なぜ、こんな装備が必要なんだ」

「レースの出場者のなかに気になるやつがいるんだ。この装備はそれのための対策ってやつだ」

「しかしなぜこんな装備を……、まさかタイガーきさま」

タイガーはにやりと物凄い笑いをうかべた。

「そうさきまわりするな。おれはなんとしてもこのレースに勝ちたい。それだけさ」

押し黙ったままのシルバーの肩をどん、と叩いてタイガーはからからと笑った。

「どうしたシルバー。これくらいのことですらブルっちまうお前でもあ  
るまい？」

## 宇宙へ！（前書き）

いよいよバックは自分の手で作り上げた宇宙船でレースに参加する。  
最初の目的地は火星である。

バックは無事、到着できるのだろうか？

宇宙へ！

4

出場権をかちとったパックはじぶんの宇宙船を洛陽宇宙港へ運んだ。といっても運送の手間はすべてペガサス社がやってくれて、かれはなにひとつ働くことはなかった。

「なんだか、いたれりつくせりじゃないか」

ヘロヘロは洛陽宇宙港にあつまった、レースに出場する宇宙船のむれを眺めてつぶやいた。まったくそのとおりで、宇宙船の搬入から燃料の供給まで、ペガサス社のサービス態勢は万全の準備をしていた。

「レースを成功させるため必死なんだろう。パイロットからペガサス社が不公平なことをしていると言わせないためなんだろうな」

時刻は夕方ちかくで、夕陽が洛陽シティの市街構造体に没しかけている。オレンジ色の夕陽にたらされ、洛陽宇宙港の離着陸床に屹立した宇宙船の外板は金色のひかりをはなっている。

パックとヘロヘロのふたりはあすにせまった出発にそなえ、コックピットで最後の点検をいそいでいた。

「あ、パック。そろそろ時間だぜ」

ヘロヘロに言われ、うなずいたパックはコンソールの映話装置のスイッチを入れた。

ニュースのテロップがながれ、タイトルがうかんだ。

” 太陽系宇宙レース特番

ペガサス社代表に聞く”

と、あった。

派手なファンファーレとともに、ミリイが記者会見式場へ姿をあらわす。

「おい、あれがあのにミリイかい？」

へろへろが叫んだ。

この日のミリイはいつものスポーティな格好ではなく、たかく結いあげた髪の毛に入念な化粧をしている。あしもとまでかくれるドレスはスタジオの照明にあたるときらきらと輝いている。

「なんだか目一杯おしゃれしているなあ」

パツクはにやにやしながらこたえた。

ふたりが映話装置のスクリーンに注目しているうち、記者会見がはじまった。ミリイは記者の質問にこたえながらこのレースのコースを説明している。

そのうち、ひとりの記者が手をあげ発言をもとめた。

ミリイに指名され、記者はたちあがった。

「どうも、洛陽新報の高木といいます。このレースについて、少し疑問があるのですが……」

「どのようなことです」

ミリイはすましてこたえる。

高木と名乗った記者はあみだにかぶったソフト帽をちょっとさわると、手にもったメモに目をやりながら質問を開始した。

「このレースには太陽系の有力な宇宙船メーカーのほとんどが参加しているのですが、そのなかでクロノス社についてちょっとよからぬ噂を聞きました」

「噂？」

「はあ、おたくとクロノス社のあいだでレースの結果についてなんらかの賭けをしているというものです。このことについてなにかひとこと」

高木の爆弾発言で会場は騒然となった。

「賭けとはどういうことです？」

「ミリイさん、なにかひとこと」

「クロノス社のシルバーとはどういうご関係ですか？」

フラッシュがたかれ、マイクが何本もミリイの目の前につきださ

れる。

ミリイの顔色がじょじょに紅潮してきた。

「あんたたち……」

いきなりミリイは会見会場の目の前におかれたテーブルに駆けあがると、そのまま洛陽新報の高木へむけてつかみかかった。

「あたしがどんな思いでこのレースを準備したかわかってるの？

この、この！」

ミリイは高木の首をしめあげた。高木は目を白黒させてあえいだ。

”しばらくおまちください”

テロップがながれ、カメラは報道スタジオにもどされた。スタジオでこの様子を見守っていたキャスターはひきつった表情になっていた。

「ええ……、会場でたしょう混乱が生じたようです。ではおしらせを……」

あわただしくそう言うと、CMがはじまった。

「やっぱり変わっちゃいなかったな」

パックは大笑いしていた。前代未聞の珍事である。

日が落ち、夜になって洛陽宇宙港はひえこんできた。月はなく、夜空には無数の星々が燦然ときらめいている。パックは夜になってもまだ宇宙船の整備をつづけていた。

「パック、いつまでつづけるつもりだい」

手伝いを無理矢理やらされているへ口へ口は不平の声をあげた。パックはその声も聞こえない様子で、一心不乱に宇宙船の着陸ギアの調整をつづけている。

「ちゃんとやっとなないと、命にかかわるからな。宇宙に飛び出した方がいいが、そのまま帰ってこれなくなったらこまるだろ」

「そんな可能性があるのかい」

へ口へ口はぎよつとなつた。

「まさか。だから、ちゃんとやつところと言っているんだ」

「あーあ、これだからなあ。ねえ、本気で優勝をねらっているんか、もしかして」

「おい、文句を言うひまがあつたらちゃんと仕事しろよ！」

「へいへい……」

と、足音にへ口へ口は顔をあげた。

「おい、パック……」

「なんだよ」

「ちよつと……」

「だからなんだって！」

怒鳴ろうとしたパックはぎくりとなつた。

いつのまにかミリイが立っている。彼女の背後に宇宙港を照らすライトが逆光となつていてその表情は見えない。

「やあ、なんだい」

パックは立ち上がり、オイルに汚れた手をウェスでふきながら口を開いた。

「ちよつと、あんたの宇宙船を見学しようと思ってね。なにしろこの船がここに搬入されてからずっと気になっていたものだから」

パックは顔をほころばせた。

「へえ、そりや光栄だ。どうだい、格好いいだろう？ こう見えても、こいつの性能は最新式のものにひけはとらないぜ」

「誤解しないで。あたしが言いたいのは、こんながらくたがちゃんと飛ぶなんて思えないということなの！ このレースにはわがペガサス社の社運がかかっているんだから、あんたみたいなおつちこちよいにしゃしゃりでてほしくないのよ」

「な、な、な……なにい！」

パックは真っ赤になった。そんなパックをへ口へ口ははらはらしながら見上げている。

「なんでマローン少佐はあんたの宇宙船の出場権をとれるよう力を



貸したのかしらね。すくなくとも、この宇宙船を直接見れば、とてもレースに参加させる気にはなれないはずよ」

怒りをパックは必死になっておさえていた。拳をにぎりしめ、ぶるぶると全身がふるえている。

「ねえ、相談なんだけどあんたこのレースを辞退してくれないかしら。あたしはこのレースに死亡事故なんかで汚点を残したくはないのよ。あたしの提案をのんでくれば、それなりの報酬をはらう用意はあるわ。あんたのあのみじめな整備工場を、ちゃんとした最新式のものにするくらいは払えると思うの」

「ばあん、という音が響いた。」

「パック！」

ヘロヘロは叫んだ。

ミリイは頬をおさえている。信じられない、という驚愕の表情がうかぶ。そろそろとその手がさがった。おさえられた頬に、パックの手形があかく浮き上がった。

「あ、お、おれ……」

あわてたのはパックだった。おもわずミリイの頬を平手で打ってしまったのである。怒りにまかせたといえ、じぶんのしでかしたことにうろたえていた。

ミリイはパックをじっと見つめている。唇がこまかくふるえ、目がまっかだ。と、そのおおきな両目からぼろぼろと大粒の涙がこぼれおちた。

「ご、ごめんよ。おれ……ほんとにごめん」

必死になってパックはミリイに一步近付いた。

「近付かないで！」

ミリイは叫んだ。じりじりと後退ると、ぱつと身を翻して駆け出す。あとにはぼうぜんとなったパックとヘロヘロが残された。

「パック、どうすんだよ。あんなことして」

「知らねえよ、思わずやつちまったんだ」

はあーっ、とため息をついてパックはすわりこんだ。

「ああつ、どうしよう。あいつはペガサス社の社長だぜ。あんなこととして、絶対出場権を取り消されるよ」  
パックは頭を抱えた。

洛陽宇宙港にミリイの泣き声が響いている。

わあわあと大声で泣きながら、ミリイは歩いている。あたりの人目もかまわず、ミリイは泣いた。

「お嬢様！」

そのミリイの様子に驚いて遠山が飛び出してきた。

「ど、どうなさったのです？ なにかあったのですか」

ミリイは遠山を見た。きょんととして、まるで少女のような表情になっている。が、すぐに顔がくしゃくしゃになると、また大声をあげて泣きだした。

「お嬢様……！」

「こないでよ……」

ミリイは遠山を振り払って走りだした。遠山はとほづにくれていた。こんなミリイは初めて見る。

「そうだ、こんなときはあの人に……」

あわてて遠山はふところから携帯映話器をとりだした。

「ミリイくん。どうしたんだ」

わあわあと泣き続けて歩いていたミリイを呼び止めたのはマローン少佐だった。ミリイはマローンのすがたを認めると足をとめた。無表情なマローンの顔がいまは有り難かった。いかにも同情されているような表情は、いまのミリイにとって辛いだけだった。

「マローンさん……」

「遠山さんから連絡があつてね、さがしていたんだ」

ミリイはしゃくりあげた。

「まあ、わたしの船へいこう」

マローンはミリイをつながした。ミリイは従順にマローンにした

がった。

少佐の宇宙船はシリウス号といい、ペガサス社のものである。ミリーのユニコーン号にくらべ、一世代は前の設計だが、マローン少佐はそれにじぶんなりに改造をくわえていた。

ペガサス社独特の、すべての機関、航法装置を船殻にうめこむ方式をとっているので、船内はこのクラスの船にしてはひろびろとしている。船室はマローンの趣味で、ややクラシクな趣に統一されていた。床材はこまかな組み木となっていて、壁もまた黒光りする木材になっている。ちよつと見ただけでは、これが宇宙船の内部とは思えないくらいで、どちらかというところい帆船の内部といった趣だ。

「こんな身体になって、いまは普通の人間の食事はとれないが、嗜好品だけは味わえるのだよ。コーヒーはどうか」

「いただきます」

鼻をすすすんいわせながら、ミリーはこたえた。

「砂糖はいくつか。ふたつ、みつつ？」

「みつつを……」

シリウス号の船室に、香ばしいコーヒーの薫りがただよった。

「ミルクはいれるかね」

ミリーがうなずき、マローンはコーヒーにミルクを垂らした。トレイに乗せてミリーの目の前にはこぶ。

「まあ、飲んでみたまえ。それでもコーヒーを煎れるのは自身があるんだ」

ミリーは言われるままマローンの煎れたコーヒーを口にふくんだ。熱い液体が喉をとおし、胃に落ち着くとミリーの気持ちもおさまってきた。マローンが言ったとおり、そのコーヒーは旨かった。口に含むとコーヒーの薫りが馥郁とひろがり、その苦さのなかにほかに甘味を感じる。

ミリーの前にデスクをはさんですわったマローンはパイプをとりだし、煙草の葉をつめはじめた。火皿にパイプ用のライターで火を

つけ、口にはさむ。

しばらく無言の時間が船室をみたした。ミリイはゆっくりとコーヒーを飲み、マローンは黙って口に啣えたパイプを吸い付け、煙をはきだした。

一杯のコーヒーを飲みおわり、ミリイはほっとため息をついた。  
「で、どうなんだね」

マローンに尋ねられ、ミリイは頬をあかくした。その唇がふるえている。

マローンは待った。

「あたし、あんなことされたの初めてです」

「ふむ。だれにも初めてということはある」

マローンの眉がうごいた。

「あたし殴られたんです。このあたしが！」

ミリイは堰を切ったように話した。パックに叩かれたいきさつをすっかりぶちまけたのである。マローンはミリイの話の途中、注意深く質問をはさみこんだ。ようやくすべてを話し終わったミリイは肩で息をしている。激情が彼女の身体を震わせた。

「それで全部かね？」

マローンに言われ、ミリイは顔をあげた。

「え？」

「パックくんがきみを殴ったのはわかった。でも、どうしてそんなことをパックくんはしたのかな」

「そんな……、マローンさんはあいつの味方をするんですか」

「味方だの、敵だのそういうことじゃないよ。なぜ、あのパックくんがきみに手をあげたのかな、と思ってね。きみがそうしむけたのじゃないのかな」

ミリイは顔をふせた。凶星だったからである。

ぼつりぼつりとミリイは話した。パックに言った言葉をすべて話した。こんどはマローン少佐は黙ってミリイの話に耳をかたむけた。

「なるほど、それでいまはどう思うかな」

「どう思うつて……？」

「ミリイくん、きみはパックくんと言ったことを後悔しているんじゃないかな」

言われてつとミリイは胸をつかれた。

そうだ、たしかに彼女は後悔していた。なんであんなことを言ったのだろう。ミリイの顔をよんだマローンは身を乗り出した。

「どうだい、パックくんと仲直りをしてみないか」

「仲直り……」

ミリイはつぶやいた。

「パック、ご飯が炊けたよ」

へ口へ口は宇宙船のコックピットを見上げてさげんだ。おう、という声が聞こえてパックが昇降口からどたと降りてくる。朝になってへ口へ口は宇宙港の離着陸床にじかに七輪をおいて、金網をひいて魚を焼いていた。もうもうと煙が上がり、へ口へ口は顔をしかめながら団扇ではたばたと煙をあおいでいた。

「なにを焼いているんだ」

「鰯だよ」

「なんだよこれ、消し炭みたいになってるじゃないか」

パックはあきれた。金網に乗った鰯はまっくろになっていた。

「ぜいたく言うなよ。金がないから、こんなのしか手に入らなかったんだ」

「しょうがねえなあ」

パックは宇宙船のなかから卓袱台をかかえて地面においた。へ口へ口は焼いた鰯を皿において飯を茶わんによそった。ふたりは宇宙船のしたで朝食をはじめた。

「いい天気だなあ」

飯をかきこみながらへ口へ口はパックに話しかけた。しかしパックは沈んだ顔でいる。しかも手元の茶わんのご飯に手をつけていな

い。

「パツク、どうしたんだ。食欲がないのかい」

「え、ああ。そうか」

パツクはへろへろの言葉にわれにかえるともそもそと飯を口に運びはじめた。

「パツク、どうしたんだよ。食べたくないのか。それともなんか心配があるのか」

「いや、なんでもない」

「昨日のことを気にしているのかい？」

かちやりとパツクは茶わんと箸をおいた。どうやら図星だったようだ。

「なあ、へろへろ。おれ、あんなことしてもうレースに出られないだろうなあ」

「んー、どうかなあ」

へろへろは口籠もった。本音を言うとなんか出場したくはないのである。だがそんなことを言うと、パツクは怒りだすだろうと、へろへろは目を見開いた。パツクの背後を見つめている。パツクはへろへろの視線に気付いて背後を振り返った。

「……！」

パツクは目を丸くした。

なんとミリイが立っていた。となりにはマローン少佐がいる。

「やあ」

パツクはどう言っているかわからず、まぬけな声をあげた。

「おはよう」

おずおずとミリイは口を開いた。

「ああ、おはよう……」

ミリイの意図がわからず、パツクはあいまいな返事をした。「どうしたんだ、出場権の取り消しでも告げにきたのかい？」

パツクの言葉にミリイは顔をあかくした。

「そんなんじゃないわ」

ミリイはなぜかもじもじしている。マローンがミリイの肩に手を置いた。ミリイはマローンの顔を見上げた。マローンはうなずいた。

「あの、あたし。あんたに謝ろうとおもって……」

「え？」

「あたし、わるかったと思ってる。あんなこと言って……。あんたが怒るのも無理はないわ」

「……」

パックは立ち上がった。

マローンが口を開いた。

「パックくん、ミリイくんと仲直りしてやってくれないか」

「マローンさん……」

「ミリイくんは後悔しているそうだ。どうだい、ここで握手して仲直りしては？」

「じゃあ、おれレースに出場できるんですね？」

「そのとおりだ。ミリイくんと仲直りするかね」

「もちろん！」

パックははればれとした笑顔になった。ミリイに向き合い、右手をのばす。

「ミリイ……って、呼んでいいかな？」

「いいわ。あたしも、あんたをパックと呼ぶわ」

「よし、ミリイ。仲直りだ」

ミリイの右手がのばされ、パックの右手をつかんだ。ふたりはマローンの目の前で握手をかわした。

「これがおまえの趣味なのか」

宇宙港でシルバーはにがにがしげに宇宙船を見上げた。そばにはタイガーがいる。

「ああ、いいだろう」

タイガーは胸をはった。かれの目の前の宇宙船はクロームイエロ―と黒の縞模様に塗装されている。

「おれさまの名前がタイガーだからな、虎の模様を塗ったんだ。黒の塗装部分は熱の超導体になっているから、排熱対策もばっちりだ」

「なんという下品さだ。船名はつけたのか」

「フライング・タイガー号だ」

おう、とシルバーはうめいた。まるでチンドン屋である。クロノス社の技術陣が叡知を結集した最新の宇宙船がこのありさまである。たしかに宇宙軍への納入がなくなって、こういった機会にしか使えないのであるが、ほんらいならこのようなレースに参加させるべき機体ではないのだ。

「かならず優勝するのだろうな。おまえにこの機体を提供するからには、かならずミリイのユニコーン号に勝ってくれないとこまるぞ」

「あんな小娘！」

馬鹿にしたようにタイガーは鼻を鳴らした。

「おれのライバルはマローンだ」

「マローン？ ああ、伝説の人物だな。宇宙軍の英雄というやつだ」  
「そうさ、数度の深宇宙探査でおどろくべき成果をもちかえり、三十年前の恒星間戦争では帝国銀星章をうけている。お偉いやつさ」

タイガーはマローンの賛美をしているように見えて、そのくちぶりはいかにも苦々しげだった。その目はくらい情熱を燃やしていた。そんなタイガーを見てシルバーは口をひらいた。

「どうした、なんだかマローン少佐に恨みをもっているようだが…」

…」

「あんたには関係ねえ！ これは、おれとやつとの問題だ」

タイガーはひくくうなった。かれはマローンのことを考えただけで怒りがこみあげてくるようだった。そんなタイガーをシルバーは不安そうにみつめた。タイガーが提案したフライング・タイガー号の装備について、シルバーは喉元までこみあげてくるおそれを感じていた。シルバーはタイガーのこのみで虎の縞模様に塗装されたフライング・タイガー号を見上げた。宇宙船は朝の日差しにまがましいシルバーエットを見せている。



洛陽宇宙港にはシティのあらゆる報道メディアがつめかけ、3Dイメージカメラの砲列が離着陸床に蝟集する無数の宇宙船にむけられていた。この日のためにあつまった宇宙船のほとんどはペガサスか、クロノスの個人用宇宙ヨットでしめられている。この二社の宇宙船は、太陽系のほとんどの需要をまかなっていたのであるから、これは当然といえる。ペガサス社の宇宙船はどちらかというと優美なシルエットをもち、クロノス社のそれはややずんぐりとして見える。

そのなかでカメラが集中的に狙っていたのはミリーのユニコーン号と、マローン少佐のシリウス号であった。

下馬評によれば、この二機が今回のレースの話題をさらうかっこうになっていた。ミリーのユニコーン号は、彼女がこのレースの企画者であり、しかもスポンサーであることと、まだ十八才の美少女であるということで、マローン少佐のほうはかれが宇宙冒険物語の伝説的な英雄であるということ、経験豊富なパイロットであるということで優勝候補とみなされていたからである。

ふたりが洛陽宇宙港をあるくと、そろそろと報道陣がまとわりついていった。

「すごいねえ、ミリーちゃん。まるでスターだぜ」

ヘロヘロはパックの宇宙船のコックピットから宇宙港の離着陸床を見下ろして叫んだ。両目を望遠側に調節しているため、ふたつの目は顔からとびだしてまるで出目金のような顔になっている。

「そんなことはいいから、航路の数値を入力しておいてくれよ。ヘロヘロ」

ちえ、とヘロヘロは舌打ちをするとコンソールにむきなおった。両腕をめぐるしく動かして、コンソールのキーボードを叩く。

「手をつかって数値入力をやるとは思わなかったよ」

ヘロヘロはぶつぶついながら、レースの航路を入力した。なにしろ航路計算のためのプログラムはヘロヘロの頭のなかにあるのだから、その結果を入力するのはヘロヘロしかないのである。

最初のレースはこの洛陽宇宙港から出発して、火星のシチルス・シテイの宇宙港へ達するコースをとる。この時期、地球と火星は合の位置にあり、最接近していた。平均的な出力のエンジンを搭載した宇宙船なら一週間の距離だ。

ただしそれは経済的な放物線軌道をとった場合のことである。今回はレースということもあり、コースは最短距離をとることになる。予想される行程は三日である。

ヘロヘロがひっしになって航路を入力しているあいだ、レースの開催は迫っていた。

ぼつぼつ出場を申請したパイロットは自分の機体に取り込み、エンジンに点火をしはじめている。ひゅーん……という甲高いエンジンの始動音があちこちから聞こえはじめ、機体がこまかく振動しはじめる。

斥力プレートが青白くかがやきはじめ、反重力効果によって上昇気流が発生し、かげろうがたちのぼった。

「おい、いそげ！」

パックはヘロヘロを急かせた。ヘロヘロは黄色い顔にあぶらあせをうかせて夢中になって航路を入力している。パックはヘロヘロの入力をまたずにエンジンの始動スイッチをいれた。

けけけけ……！

けけけけけ……！

けけけけけ……ぷすん。

パックは始動キーを何度もひねったが、エンジンは後部で奇妙な音をたてるだけでいつこうに点火しない。

「入力おわりい！」

ようやくヘロヘロはすべての数値を入力しおわり、ほっとして叫んだ。ふと見ると、パックはコンソールで始動キーと格闘している。

「パック……？」

「くそお！」

ばん、とコンソールをひとつ叩くと、パックは操縦席から安全索をひきはがして立ち上がった。工具箱をひつつかむと、ただだつと後部機関室へ駆け込んだ。

「へロへロ！ おれがいいと言ったら、始動キーをいれる！」

パックの声がしたから聞こえてきた。

「えー？」

パックは機関室に駆け込むと、巨大な旧式のエンジンのしたにもぐりこんだ。カバーをひっぱがし複雑なパイプ類をむきだしにする。そのからみあつたパイプのなかに手をさしのべ、パックは調整をはじめた。

「パック！ レースがはじまっちゃうよ！」

心配になつたへロへロはたまらず機関室のパックの傍へやってきた。

「ひっこんでろ！ おまえはおれの合図でキーをいれるんだ」

パックにどなられ、へロへロは後ろ髪をひかれる思いで操縦席へもどつた。はらはらしながら機関室をふりむいている。

「全機、発進せよ！」

その指令がすべての出場宇宙船のコンソールに発せられ、洛陽宇宙港の宇宙船はいっせいに飛び上がった。

轟つ、という音とともに数十の宇宙船がブースターを噴射させる。爆音がびりびりとあたりの空気をふるわせた。

そのなかでミリイのユニコーン号、マローンのシリウス号、そしてタイガーのフライング・タイガー号がすばやく飛び出していく。みるみる高度をあげ、宇宙船のむれはたちまち成層圏を飛び出していく。

どおおおん……という衝撃波がおくれてやってきた。カメラの砲列はその宇宙船の群れを追っていった。あつという間に宇宙船は

ちいさくなり、視界から消えた。あとには水蒸気がしろい煙の塔のように残った。

「ああ、行ってしまったわれた……」

ミリイの宇宙船の出発を見送った遠山はつぶやいた。うすい髪の毛を気圧の変化により殺到した強風が乱していく。

くくくく……！

ふと奇妙な音に遠山はふりかえった。

「！」

遠山の太い黒縁眼鏡のおくの両目が見開かれる。

なんと、この期におよんでまだ出発していない宇宙船がある！

パックの宇宙船だった。

宇宙港の離着陸床にどっかりとすわりこんだパックの宇宙船はさきほどから奇妙なエンジン始動音をたててびくともしない。

くっ、けけけけ……けけ……ぐるるるるん……すぱん！

宇宙船は絞め殺されるような音をたて、身震いしている。しかしふつりあいに巨大なブースターに点火するようすは微塵もない。

遠山はひきよせられるようにふらふらとパックの宇宙船にちかづいた。

耳をちかづけるとパックの声が外殻を通して聞こえてくる。

「ちきしょう、動け！ このやろう！」

エンジンにもぐりこんだパックは汗みずくになっていた。必死になつてあちらの弁をひらき、こちらのパイプを締め付ける。両手は汗と、機械油でぬるぬるしている。

「パック……、もうあきらめたほうがいいよ」

操縦席でへろへろはふてくされていた。その声を耳にしてパックはかあーっとなった。

「えいくそ！ このくされエンジン！」

パックはたちあがると、旧式のエンジンをおもいきりけりあげた。ぐわあん！

パックの爪先がエンジンの外板をけりあげる。

「くうーっ！」

けりあげた痛みに、パックは爪先をかかえてびよんぴよんと飛びはねた。その痛みでさらに怒りがわきあがったパックは真っ赤になつて無茶苦茶にエンジンに八つ当りした。

「なんでだ、なんで動かない！ えい、動け、このやろっ！」

がながん、と響いてくる音に遠山は耳をぴたりと宇宙船の外殻におしあてた。

「なにやつとるんだ、このパイロットは……？」

ふとその音がぱたりと途絶えた。

「？」

ひゅーん……。

ふいにおきた甲高いエンジンの始動音に遠山はあわてた。

「わ、わ、わ！」

あたふたと宇宙船から逃げていく。宇宙船が始動するならぐずぐずできない。

ぼおーん！

猛烈な黒煙がパックの宇宙船のブースターから噴出した。その黒煙に遠山のひよるながい身体が見えなくなる。ついでそのブースターからオレンジ色のほのおがのぞく。

どどどどどどど……！

パックの宇宙船はようやく地上から離れはじめた。機首はふらふらしているが、確実に上昇していく。ブースターからは噴射剤の水蒸気が猛烈にふきだしている。パックの宇宙船は離昇していった！あとにのこったブースターの噴射煙のなかで、ごほごほという咳き込む声がした。

遠山だった。

「なんたることだ……」

遠山の全身はまっくろに煤けていた。もともと上等でないスーツ

は、宇宙船がのこした黒煙でまっくろになっている。遠山は顔にかけていた眼鏡をはずし、ポケットからとりだしたハンカチで神経質に拭きはじめる。その顔は、眼鏡のあとがしろくのこり、ほかはまっくろになっている。うすい髪の毛はべったりと顔にかかっていた。「これで全機ぶじに出発したというわけか」

ふいの声に遠山は全身を緊張させた。

シルバーだった。

かれはにやにやと笑いながら、遠山のみじめな格好を見つめている。遠山はそう背が低いほうではないが、それでもシルバーはあたまひとつ高い。

「シルバーさん。あなたもお見送りですか」

「まあな、おれもこのレースに宇宙船を出場させているからな」

「なにかご用ですか？」

遠山は上目遣いになって口をひらいた。シルバーは苦笑いした。

「まあそう、警戒することもないじゃないか。おれは、いつかきみとじっくり話し合いをしたいとおもってきたんだ。どうかな、こんど一席設けないかね？」

「なんのお話です」

遠山はきよろきよろとあたりを見回しながら、そつと囁いた。シルバーのくちもとにじんわりと笑みがうかんできた。こいつめ、保身にはしっておれのさそいに乗ろうとしているな……。

「おたがい、得になることだ。なあ、遠山くん。おれはきみの手腕をかつているんだよ。あの小娘を社長にいただいて、ペガサスが業績をあげておるのは、きみが筆頭重役としてうまくやっているからだと睨んでおるんだ。きみのような有能な人間はペガサス社にはもつたいない。なあ、うちにこないか。おれはきみのような部下がほしいんだ」

「ひきぬきのお話ですか？」

遠山の目はきよときよとしていた。

ちつ、とシルバーは胸のうちで舌打ちをした。こいつはたしかに

有能ではあるが小心でありすぎる。しかしこいつの頭のなかにはいっぱいにペガサス社の機密がつまっているにちがいない。なんとかして、こいつを味方につける必要があった。

「そうびくびくすることもないさ。ここは宇宙港だ。聞き耳をたてるやつはどこにもいない。おれはきみがうちにきてくれれば、クロノス社の株式を格安できみにゆずってもいいと思っておるのだ」

「そ、それは贈賄ですぞ！」

「おれときみのあいだだけの了解ってやつさ。そう神経質になることはない」

遠山の顔は蒼白になっていた。こめかみから汗がふきだし、わくわくと顎がふるえている。

「わ、わかりました。あとでご連絡をいたします」

シルバーの顔に会心の笑みがうかんだ。やった、落ちたぞ！

「うむ。待っているよ」

じゃ、と手をあげシルバーは歩み去った。

そのシルバーを、遠山は恐怖の表情で見送っていた。

「へろへろ、そっちのスイッチをたおせ！ そっちじゃない、右だよ！」

「ど、どっちのスイッチ？」

「ほら、その青いやつだ！ たおせつたら！」

がくんがくんとゆれるコックピットのなかで、へろへろは操縦席にしがみついて必死にパックに言われたスイッチをさがした。ゆれる視界のなかで、そのスイッチが目の前にとびこんでくる。無我夢中でへろへろはそのスイッチをいれた。

とたんにあたりがしずかになり、宇宙船は安定した。それまでは宇宙船は上下左右にはねまわり、へろへろは生きたここちもしくなっていた。ふう、とへろへろは顔にうかんだ汗を拭いた。

「いったいどうしたんだい、あれは？ やたら宇宙船はあっちこっちにはねまわっていたけど」

「噴射安定装置のスイッチがはいってなかったんだ」

パックもためいきをついてつぶやいた。えーっ、とヘロヘロはパックを見た。

「なんでそんな大事なスイッチをいれわすれていたんだ！ 死ぬかと思ったぞ」

「いいじゃねえか、ついすっかりしてたんだ」

「すっかりじゃないよ……」

はあ、とヘロヘロは操縦席にへたりこんだ。最初がこれではさきが思いやられる。

ふと見ると、パックは満面の笑みをうかべ操縦席にむかっている。

「たのしそうだね、パック」

「ああ？ うん、そうだな。なんしろ、ちゃんと宇宙へむかっているんだからな」

「宇宙へむかわない可能性もあったのかい？」

ヘロヘロはいまさらながらに恐怖の声をあげた。

へへへ……、とパックは笑った。

「なんしろ、手作りだからなあ。ちよっぴり不安はあったさ。でもなんとか出発できてよかったよ」

「信じられないよ」

ヘロヘロは首をふった。

操縦席の前面は窓になっている。その窓越しに、外は暗くなってくる。濃いマリンブルーからインディゴに。そして真っ黒になって、星が輝きだした。パックはコンソールの計器をよんであーあ、とのびをした。

「自動操縦にきりかえた。おい、ヘロヘロ。らくにしていーぞ」

「とてもそんな気になれないよ」

「なにくよくよ気に病んでいるんだよ。無事、出発できたんだぞ」

「ぼくは無事、地球へもどってきたいよ」

ちえ、とパックは舌打ちした。

ぐうーっ、とパックの腹がなる。



「そついや、腹が減ったなあ。おい、めしにしようぜ」

「ああ……」

ふたりは操縦席からはなれ、後部の船倉へむかった。

船倉の扉をいっばいにひらいたパックは目をまるくした。

「おい、へ口へ口。食料はどこだ？」

「え、それはパックが運びこんだんじゃないのか」

「なにい？」

パックとへ口へ口は顔を見合わせた。

「積みみをわすれたんだ！」

同時にさげふ。

へたへたとパックは床にすわりこんだ。

「どうすんだよ、火星までめしぬきだぞ」

「そんなあ……」

へ口へ口も泣き声をあげた。

ぬけるように青い空。そしてぽつかりとつかぶ白い雲。海原にはまんまんと水がたたえられ、海風にしろい波がちらほらと見えている。

火星の植民計画がはじまって数世紀がすぎ、いまや火星の表面はすっかり地球とおなじものとなっていた。火星表面の酸化鉄から遊離酸素を放出する藻類が遺伝子改造でうみだされ、長期の地球化計画のもと、火星の植民計画はおしすすめられた。すでに火星の大気は地球の五千メートルほどの高度の大気圧くらいはあり、宇宙服なしに人間が戸外で活動できるようになっている。

ここシチルス・シティは火星の植民都市のなかでもっとも歴史がふるく、また人口もおおい。火星の玄関口とも言えるこの都市ではほとんどの建物の内部は一気圧に与圧され地球からの来客に対応したものとなっている。

「こうしてみると、地球とまったくかわりないわね」

シチルス宇宙港のロビーにあるレストランで、ミリィは窓際に席

をとって外をながめながら口を開いた。彼女の目の前にはマローン少佐がすわっている。窓のそこには宇宙港の離着陸床がひろがり、レースの出場宇宙船がぞろりと整列している。宇宙港は火星にあらたに生まれたシチルス海につきだすように建設され、すぐそばは海となっている。

「こうなるまで三百年かかったよ」

ふふふ……、とミリイが笑う。問い掛けるようなマローンにミリイはこたえる。

「だってマローンさん。じぶんがこの景色をつくりだしたような言い方ですもん」

「いや、ある意味それはただしい。わたしはこの火星の地球化計画に初期のころからかわっているからね」

「ええっ、じゃマローンさん。いったいいくつになるんですか」

「三百才にあとすこしだ。わたしは若い頃にサイボーグとなつていてね。慎重に手入れをすれば、そのくらい生き延びられる。しかしサイボーグとなつてからは人間的なよろこびのおおくは失ってしまった」

「最新のサイボーグ手術を受けばいいじゃないですか。そうすれば外見はもとより感覚もおなじものが……」

「わたしはこのサイボーグ体に愛着があるのさ。なんしろ三百年もわたしを生かしてくれた身体だ。いまさら変わろうとは思わないよ」

そうつぶやくとマローンはパイプをとりだし、煙草の葉をつめはじめた。

「この火星も変わったものだ」

そう言うマローンはパイプに火を点けた。ひといき吸い付けるとあまいパイプ煙草の煙があたりにただよう。

と、アンドロイドのウェイトレスが近付いてきた。

「あのお客さま。ここは禁煙となっております」

ぶぜんとなつてマローンはパイプをふところにしまった。

「ほんとうに火星は変わったよ！」

ミリイは笑っていいものか、同情していいものか困ってしまい話題をかえた。

「そういえば、マローンさんがちからをかしたパックの船はまだ到着していないわ」

「うん、どうしたのかな」

「どうしてマローンさんはあのパックに肩入れをするんですか」

「ああ、かれはわたしの若い頃を思い出させるんだよ。わたしも若い頃、どうしても宇宙へ出たいと思って、手製で宇宙船を組み上げたんだ」

「そんなことがあったんですか」

ミリイはふたたび宇宙港に視線を漂わせた。と、その両目がおおきく見開かれる。

「あ、あれ！」

指差す方向をマローンが見ると、宇宙港の上空にきらりとひかるものがある。

「宇宙船だな……あれは……」

パックの宇宙船だった。

不恰好なごつごつとしたデザインの宇宙船がもつれつな勢いで宇宙港に降下してくる。宇宙船はあわや墜落という急角度で着陸すると、ぱくんとエア・ロックが開く。

「パックくんだな」

マローンの言葉通り、エア・ロックからパックとへろへろのふたりがこるげるように地面に降り立った。ふらふらとしながら宇宙港の建物へ近付いてくる。火星表面の重力は地球の二分の一であり、ふたりは一步あるくたびにふわふわとはねるように走った。

「どうしたのかしら、ふらふらしているじゃない……」

ふたりのすがたはミリイの視界から消えた。

ふりむくとふたりはエレベーターで昇ってくるところだった。

自動ドアが開き、ふたりはふらふらになってロビーにはいつてきた。

「どうしたの、ふたりとも」

ミリイが声をかけると、パックはがくりと膝をおった。  
「腹が減った…… なにか食わしてくれ！」

「三日も食べてなかったですってえ！」

ふらふらになっているふたりを自分のテーブルへつれていき、つぎからつぎへ出される食事をたいらげているパックにむかってミリイはあきれた声をだした。

「ん…… ひよひりようほ、ふみほむのほはふへは！」

食料を積み込むのをわすれた、と言いたいらしい。パックはくちいつぱいに食物をつめこんでいるからこうなる。会話もそこそこにパックとヘロヘロは目の前にだされた食事をあとからあとから口におしこんでいる。そんなふたりを見てマローンはウェイトレスを手招きした。やってきたアンドロイドのウェイトレスにマローンは小声で囁いた。

「とにかく、このふたりがいいというまで食事をだしてやってくれ。なに、品目はなんでもいいから……」

ウェイトレスは心得顔になってうなずいた。

それから見物だった。

どんどんとはこばれてくる食事を、ふたりはわきめもふらずに食べ続けた。

ミリイはそんなふたりの食欲に啞然となっている。

「まったく…… よく食べ続けられるわねえ！」

ミリイがあきれるのも道理で、すでにふたりの平らげた量は、ものすごいものになっていた。

そのころになるとロビーにいたほかの客も、このふたりの食欲に気が付いていた。ひとり、ふたりとミリイのテーブルに集まってパックとヘロヘロの饗宴に見入っている。

からになった皿や、井がうずたかく積みまれ、あとからあとから食事が運ばれた。

「ごちそうさま……」

ようやく満足した顔になって、パックは箸をおいた。ぱちぱちちとまわりに集まった見物客から拍手がまきおこる。パックはそれに気付いて照れた。

「よく食べたわねえ」

ミリーの言葉にパックは頭をかいた。

「まあね……ヘロヘロも……！」

隣に座っているヘロヘロを見やったパックはぎよっとなった。

「おい、どうしたヘロヘロ」

ヘロヘロはぐったりとなっている。顔色がいつものクリーム色からしろくなってヘロヘロの身体は風船のようにふくれあがっていた。

「うう、お腹が痛いよお……」

「しつかりしろよ。馬鹿だなあ」

パックがヘロヘロを抱えあげるとずっしりと重い。ヘロヘロはげふつ、とため息をついた。パックはやれやれとばかりに頭をふり、つぶやいた。

「こいつ、食い過ぎてやがる……」

ヘロヘロは宇宙港の医務室へ運びこまれた。ベッドでうんうんうなっているヘロヘロを診察したロボット医は首をふった。

「いったい、どのくらい食べたんです」

パックからヘロヘロが口にした量を聞いて、医者は呆れてしまった。

「そりや無茶ですよ。たしかにこのロボットには食べたものをエネルギーに変換する変換炉がありますが、それにも限度がある。あまりに詰め込めば、当然処理しきれなくなるのはあたりまえです。人間で言うと消化不良ですな」

ぶつぶついいながらロボット医はヘロヘロの口をおおきく開けさせ、なかになにかの薬を飲ませた。

「消化薬のようなものです」

薬をぐくんと飲み込んだへ口へ口は目をきよるきよるさせていた。と、へ口へ口はげふーっ、とげつぶをはいた。

風船の空気がぬけるようにへ口へ口の身体がもとに戻って、へ口へ口はすつきりとした顔色になった。まわりを見回して、へ口へ口はてへへとてれ笑いをした。

「あー、すつきりした！」

ぶっ、とミリイがふきだした。けけけ……とパックが笑い声をあげる。マローンも顔をほころばせている。

「とにかく、食べすぎにはご注意ください」

ロボット医はまじめくさってつけくわえた。

火星の大気は地球とおなじ酸素濃度になっているとしても、その大気圧はひくい。ちょうど五千メートルの高度とおなじほどの大気圧になっている。したがって地球からここにきた人間は、高山病に注意する必要がある。気圧もそうだが、気温もひくい。赤道上の年間平均気温は摂氏三度をわずかにうまわるくらいだ。

シチルス・シティの宇宙港に集まっているレース出場宇宙船のなかを、ミリイはゆっくりと歩いていた。その口元から息がしろくもれている。彼女は感慨にふけていた。このレースのアイディアがうかんだのが半年前のことで、それからというものの彼女は秘密裏にこのレースの実現のために奔走してきたのである。

ミリイはじぶんのユニコーン号の前で立ち止まった。

この宇宙船はそれじたい信じられないほどの資産価値がある。内部に使われている貴金属もそうだが、この船を建造するためにペガサス社の技術陣はありとあらゆる最新のテクノロジーをそそぎこんでいた。ミリイはそつとユニコーン号の船殻に手をそえた。船殻はひんやりとして、そのなかに詰め込まれている精緻な機関を彼女は感じていた。

「いい船だねえ。うらやましいや」

はつとミリイは声の方向を見た。

そこにはタイガーが立っている。かれは腕組みをして、口のはしに笑いを張りつかせていた。タイガーはゆつくりとミリイに近付いた。ミリイはそつと身をひいた。

「そう警戒しなくてもいいじゃねえか。おたがいレースのパイロット同士つてことで仲良くしようぜ」

のしかかるようにしてタイガーはミリイのそばの船殻に手をついた。ミリイが身をさけようとするともう片方の手をついて、ちょうど彼女を腕でかこむような格好にする。

「なんの用なの」

ミリイはタイガーを見上げた。唇をきゅつとかたくひきしめ、眉をよせる。

「それぞれ、その目がいいねえ」

タイガーは目尻をさげた。ミリイの鼻に、タイガーの口許から漂う酒のにおいがつきささる。彼女は顔をそむけた。

「あんた、酔っているでしょ。臭いわ」

「なにちよっぴりひっかけただけさ。ここは気圧がひくいから、ちよつと飲んだだけですぐまわっちまう。酒飲みはきらいかい？」

「あんたが嫌いなもの！ もういいでしょ、あたしいかなくちゃ」  
身を翻し、そこを去ろうとしたミリイの片腕をタイガーはつかんだ。

「なにするの！ 放しなさい」

「いいじゃねえか、仲良くしようぜ」

タイガーはつかんだ腕にちからをいれた。引き寄せられたミリイは悲鳴をあげた。

「なにしてんだ！」

鋭い声にタイガーが顔をあげると、そこにいたのはパックとへ口へ口だった。タイガーはじろりとふたりをにらんだ。

「ひっこんでな、小僧。おれの用がすんだら相手してやるよ」

「たすけて、パック！」

ミリイはタイガーから逃れようと身を振る。パックは決意の表情

をうかべた。

ひよい、となりのへ口へ口をかかえるとタイガーめがけて走りだす。

「お？」

タイガーは思わず手のちからをゆるめた。その瞬間、ミリイはその手をふりほどいて逃げ出した。

「あ、待て」

ミリイをふたたびつかまえようとしたタイガーにパックは腕にかかえていたへ口へ口を投げ付けた。

「わあ！」

ふいに顔にむけて投げ付けられたへ口へ口にタイガーはうろたえた。それが二本足の奇妙なたちのロボットだと知って、タイガーは怒りの表情をうかべた。

「野郎！」

太い腕をのばし、へ口へ口の顔をしめつけた。

「ぐえええ！」

へ口へ口はタイガーの腕にしめつけられ、目をしろくろさせる。

「死ね、こいつめ……」

タイガーは物凄い笑みを浮かべ、腕にちからをこめる。へ口へ口の顔色が見る見る変わっていく。その両目がかんぜんに白目になった。ぶくぶくとくちのはしから、泡がふきだしてくる。

「タイガー、手を離しなさい！ 死んでしまうわ」

ミリイはさげんだ。そのミリイを、パックはそつと止めた。

「だいじょうぶ。いまに見てな」

「え？」

ミリイはパックの顔を見つめた。パックはなぜか自信満々でいる。タイガーにしめつけられているへ口へ口はぶるぶると震えていた。と、頭のとっぺんについているアンテナの先端がちかちかと瞬きはじめた。タイガーはそれを見て、ふと不安げな表情になった。

「ぐああああっ！」



こんど悲鳴をあげたのはタイガーだった。

腕のちからがぬけ、ぼとりとへロへロをとりおとす。

ふらり、と足下がもつれ、タイガーはどた、と仰向けにたおれた。完全に気絶して、白目をむいている。

「ど、どうしたの？」

「へロへロの自己防衛システムが働いたんだ。非常のばあい、身体の表面に電流が発生する。まさかほんとうに役に立つとは思わなかったけど。タイガーは瞬間的に十万ボルトの電流にふれて、気絶したってわけさ」

「まあ……」

ミリイは言葉もなかった。

ユニコーン号にかけこんだミリイはそのすぐあとに船の映話装置でシルバーに連絡をとった。超空間通信装置は、光の速度で三分かかる地球と火星の距離を一瞬でつなぎ、かつての時差を解消している。

「シルバー、すぐタイガーをこのレースからはずしなさい」

「おやおや、いったいどうしたというんですかな？」

映話スクリーンのむこうで、シルバーはあきれていた。

「いま何時だと思っっているんです」

そう言うと、シルバーはわざとらしくあくびをもらした。今日のシルバーはいつものダブルのスーツではなく、チェックの柄のパジャマを着て、頭にはナイトキャップをかぶっている。いま洛陽シティは夜中の午前二時だった。

「あいつ、あたしに乱暴をしたのよ！ 色気違いだわ。あんなやつを、レーサーとして認めることはできないわ！」

「ふむ、そうですか」

シルバーは眉をひそめた。

「それはすまんことをしました。あとでタイガーにはわたしからよく言っておきますから、勘弁してもらえませんか。あいつはわが

クロノスのエース・パイロットでね」

「なに言っているの！ あいつは犯罪人よ。タイガーの罷免を要求するわ」

「なるほど。ミリイさんの言いたいことはわかりました。しかしタイガーをやめさせることはできませんな。だいいち、そんなことをすれば困るのはミリイさんですぞ」

「なんですって……？」

「よろしいか、あの賭けをわすれたわけではありませんまい」

「もちろんよ。このレースで勝ったほうはペガサス社の株を取得するという……」

「そこです。もし、いま、タイガーをこのレースからはずすというなら、あの賭けの内容をわたしは報道機関にながす。あの会話のすべては記録していますから、証拠がないなどとは言わせませんぞ！」

「あたしを脅迫するの？」

「なんと言おうとよろしい。もしタイガーをこのレースからはずすようなことがあればわたしはあの会話のすべてをあかるみにだします。世間はなんと言うでしょうかな。ミリイさんはこのレースに勝つためにわざとタイガーをこのレースから追い出した。そう噂するでしょうな。そうなったらペガサス社のイメージは地に落ちるでしょうな」

「なんて卑怯なの……！！」

ミリイは怒りに歯を食いしばった。

「おわかりかな。タイガーをこのレースから外すわけにはいかないということが。あいつのことはわたしからよく注意しておきましょう。今後、二度とこのようなことがないよう、厳重に言うておきます。それでいいですな」

「わかったわ……」

ミリイは歯のあいだからおしだすように答えた。くやしさがその表情にあらわれて、目には涙がたまっている。

映話装置を切り、ミリイはがっくりと首をたれた。

ぐつと顔をあげ決意の表情を浮かべる。

なんとしてもこのレースには勝利してやる！

ユニコーン号からでてきたミリィを、パックは待っていた。

「どうした」

ミリィの顔をひとめみてパックは声をかけた。

「なんでもない。心配しないで」

ミリィはかぶりをふった。微笑が浮かぶ。

「これからレースはアステロイド・ベルトよ。あんたこそだいじょうぶ？」

「もちろんだ。最初はおくれたけど、これでまきかえしてやるさ」  
ミリィがいがいに元気なのにはっとして、パックは胸をはってこたえた。

## アステロイド（前書き）

レースはアステロイド・ベルトへ！

マローンを敵視するタイガーの計略。

そしてペガサス社乗っ取りを計画するシルバーの陰謀。 波乱の展開  
！

## アステロイド

6

火星と木星のあいだに存在する微小天体を小惑星帯、またはアステロイド・ベルトとよぶ。ほとんどが小石ほどの岩くずで、小惑星とよぶにふさわしい直径一キロにたつする天体はすくない。それらの軌道はふるくから観測されすっかりわかつている。このアステロイド・ベルトに関してはつい宇宙空間にぎつしりとすきまもなく岩がうかぶ光景を想像してしまうが、実際には小惑星同士の距離は平均三キロあまりとすかすかで宇宙船がそこを通過しても衝突する可能性はほとんどないのが現実だ。

しかしラグランジュ・ポイントとよばれる重力の平衡点にはその小惑星が集中的にあつまっている地帯がある。その一帯には巨大な小惑星が数多く点在し、そのなかに含まれている鉱物資源を採掘するため採掘業者がおおくはいりこんでいた。採掘業者はそれらの小惑星を破砕して採掘業をしていた。さらに重力の平衡点であることから軌道が安定しているということとさまざまな場所から天体を移動させているため小惑星がびっしりと集中している。その一帯にはむかしから想像されていたすきまもなく小天体がならんでいる光景が現出している。この重力の平衡点は三つあり、レースのコースはこのなかでもっとも小天体があつまっている一帯を通過するよう設定されていた。

コースの設定には宇宙空間にブイをうかべている。そのブイから発信されたビーコンが三次元のコースを宇宙船に教えるのである。コースの距離は全長一万キロあまりで、直径十キロあまりの空間がトンネルのように設定されている。亜光速で飛行すれば一万キロは数秒で通過できる距離だが、途中に点在する小惑星のためとてもそ

ういった速度は出せない。ここを通過するにはむかしながらの噴射剤をつかった航法しかないのだ。

「うつひゃあー、すげえコースだなあ。こんななかを、どうやってぬけるっていうんだい？」

三次元レーダーをのぞきこんだへ口へ口は声をあげた。レーダーには設定されたコースと、そこに浮かんでいる障害物がいくつもの輝点となって映っている。赤い輝点は空間にうかんでいる微小天体で、グリーンの輝点はレースの出場宇宙船である。宇宙船をあらわす輝点ひとつひとつには、その宇宙船の所属をあらわす記号がついている。障害物をあらわす輝点はコースいっぱいにはまかれていた。その平均距離は百メートルをきり、うっかり飛行すれば衝突は必至である。

コンソールの映話スクリーンに通話要請があらわれ、パックは受信了解のサインをだした。映話スクリーンにうかんだのはミリイだった。

「パック、このコースは難しいわよ。わかってる？」

「わかってるさ、ミリイ。そっちこそ、その綺麗な船を傷つけるんじゃないぜ」

スクリーンのミリイはにっこりと笑った。

「あたしの腕を知らないのね。まあ、見てるがいいわ」

「よおよお、ふたりとも仲いいじゃねえか。やけるねえ！」

ふいにふたりの会話にタイガーがわりこんできた。ミリイが映し出されているスクリーンが分割され、タイガーの顔が挿入された。

「タイガー、あんたなんか話すことはないわ。すぐ接続を切ってちょうだい！」

「そんなに冷たくするなよ、ミリイちゃん」

タイガーは下品な笑い声をあげた。ミリイはすばやく映話装置に命令した。

「映話ネットよりタイガーの個人指標を削除！ 以後、タイガーの映話ネットの利用を禁止する」

「おい！ なにをしやが……」

タイガーの顔はスクリーンから消えてしまった。

「これでもう、タイガーはわりこめないわ。映話システムからしめだしたから」

ミリイはせいせいした、という表情になった。

「あれ、タイガーの船がレーダーから消えてしまったぜ」

パックは三次元レーダーを覗き込んで口をひらいた。その通りで、タイガーの船をしめす輝点が消え、かわりに障害物をしめす赤の輝点にかわっている。

「宇宙船の現在位置をしめす表示は、映話システムに依存しているからよ。でも、コンピューターが継続して現在位置を把握しているから、赤色の輝点になっただけでなにもかわらないわ。これで、あいつの顔を見なくてすむと思えばすつきりするわ。もっとはやくこうしておけばよかった」

「ふうん……」

全機が所定の位置につき、レースは再開された。宇宙空間にはホログラフィによってコースが表示されていた。このホログラフィによる表示から宇宙船がはみだすと、ポイントが減らされるのである。全機のブースターから水素核融合のほのおがひろがって、宇宙船は加速されていく。

「おい、へロへロ。力場スクリーンをはれ！」

パックの命令で、へロへロは宇宙船をつつむ力場スクリーンのスイッチをいれた。たちまちこまかな、数ミクロンというおおきさの宇宙塵がスクリーンと衝突してチェレンコフ放射のひかりをはなつ。「だいじょうぶかなあ、こんなスクリーンで隕石がふせげるのかなあ」

不安そうな声をあげるへロへロにパックは肩をすくめた。

「まあな、スクリーンの説明書には直径十センチまでの隕石の直撃まで耐えれますとあるけど、なるべくならそんな隕石にはぶつから

ないですませたいもんだ。おまえ、その目をひんむいて、レーダーを見てくれよ」

「うん、わかった……」

なさない声をあげ、ヘロヘロは三次元レーダーの監視にもどった。レーダーにはコースの進路に点在する隕石や、小惑星が宇宙船の進行につれつぎつぎと迫ってくる。ヘロヘロは大声をあげた。

「パック！ まんなかからおおきいのがきたよ！」

「よっしゃ！」

パックは操縦席でハンドルをにぎり、おおきく船体をかたむけた。ずしん、と船体がふるえ、スクリーン全体がおおきく波立った。

「いまのはどのくらいのおおきさだった？」

パックにたずねられ、ヘロヘロは両手でおおきさをしめした。

「こーんなだったぜ！」

「またそんなおおげさだぜ。せいぜい、このくらいだったぞ」

パックは片手でまるをつくってみせた。

「ヘロヘロ、音響効果解析装置をいれてくれ」

パックの命令でヘロヘロはコンソールのスイッチをいれた。

とたんに風きり音のような、ひゅうひゅうごうごうという音が聞こえてくる。ごおつ、という轟音がひびき、おおきめの小惑星が宇宙船のそばを通過した。スクリーンの近くを通過したためか、がりがりというこするような音が聞こえてくる。

もちろん、真空中の宇宙空間でこのような音がひびくことはありえない。宇宙船の外部センサーがとらえたありとあらゆる情報を、このような効果音をつけることによって直観的にわからせることがこの装置の目的なのである。

レーダーが接近してくる障害物をとらえると、接近警報のかわりにこのような風きり音や、ドップラー効果などの音によってそれが近い、遠いかわからせるのである。ひゅうひゅうという風きり音は、宇宙船が真空中をすすむと宇宙空間にみちている宇宙塵や、太陽風の影響をつけることをあらわしている。もちろん、近くを航



行するほかの宇宙船もそのエンジン音を効果音としてパイロットに教えるので、パイロットはほかの船がどのくらい自分の船に近付いているかわかるというわけである。

パックの宇宙船はコースの、もっとも小惑星がこみあつた地区を通過しつつある。

前方にある障害物をパックがよけるたびに、ひゅうつ、とか、ごおつ、とかいう音が立体音響をもつて遠ざかつていく。そのたびにへろへろは首をすくめていた。装置のつけた人工的な効果音とはわかつていても、その効果は絶大で、ほんとうにすぐちかくをうなりをあげて小惑星が通過していくような気になる。

「パック？」

ふとパックを見上げると、その顔にはびっしりと汗がういていた。

「くそ、やばいぜ！」

「ど、どうしたんだい？」

「ちくしょう、反応がにぶすぎる！ よけきれなくなるぞ」

パックは悪戦苦闘していた。ハンドルをひっしに捌いているのだが、なかなかおもった通りに宇宙船はむきをかえてくれない。どうしてもワンテンポずれるのだ。

「ごっん！ がりがりがり！」

またひとつ隕石が宇宙船の力場スクリーンをこすっていった。スクリーンがその質量をつけとめ、船体に直撃しないようにエネルギーに変換するのだが、そのさいスクリーンの表面に火花がちつていく。

「パック……！」

へろへろは恐怖のあまり、くちに指をくわえていた。

ミリイもまた悪戦苦闘をつづけていた。

といってもパックと違い、彼女のユニコーン号は最新の設備をほこり、彼女ひとりでどんな条件でも航行できるのでコースをずれたり、とか障害物にぶつかるとかそういうレベルのはなしではなかつ

た。彼女にはこのレースに自機で優勝をさらわなければならないというプレッシャーがかかっていたのである。つぎつぎとコース前方にあらわれる障害物を彼女はあざやかなハンドルさばきでよけていく。彼女の運転に、ユニコーン号は敏感に反応し、スクリーンにかすりもせずにかわしていった。

「やるな、ミリイくん。きみがこれほどの腕前とは、知らなかったぞ」

ミリイの映話装置にマローン少佐の声が聞こえてきた。ミリイはちらりと船窓をのぞいて、マローンの乗ったシリウス号の位置を確認しようとした。もちろん、各機は平均数キロという距離がはなれているため肉眼ではわからない。ミリイはさげんだ。

「全周展望モード！ 各宇宙船イメージ強調！」

ミリイの命令で彼女のすわっているコックピットが一瞬で宇宙空間にかわった。彼女の椅子は宇宙空間に浮かんでいるようなイメージになり、レーダーにとらえられているレース参加の宇宙船が3D映像となって空中にうかんだ。それらの宇宙船の位置は実際のそれとは違っていているが、彼女の宇宙船からのどのくらい距離があるか直観的に判断できるように調整されている。それによるとマローンのシリウス号はミリイのユニコーン号の右隣に位置し、わずかにミリイがせりかっているようだった。しかしその差はわずかで、ミリイが気を許せばすぐに逆転されるような距離だった。

しかしミリイはマローンにぴったりとよりそうようにタイガーの宇宙船を認めていた。意外とちかい。

「マローンさんもね！ 気をつけて。タイガーがあんなにちかく！」

「ああ、わかっている。あいつには気をつけているよ。それより前方を注意したまえ。小惑星の集団が近付いてきている」

マローンの言葉にミリイはあわてて前方を見つめた。

かれの言葉どおり、またひとつ小惑星の集団が近付いてくる。

「障害物、光量増感！ 陰影強調！」

ミリイの命令で、せまってくる小惑星のかたちがくつきりと光と

影のコントラストが強調された。ミリイはハンドルを握り締め、右に左に、上に下にとユニコーン号をあやつった。すでにその脳裏にはタイガーのことも、ペガサス社のこともなくなっていた。いま、ミリイは純粹に運転をたのしんでいた。

ふとマローンを見ると、かれのシリウス号もあざやかな動きをみせてせまってくる小惑星をぎりぎりのところでかわしている。

タイガーの宇宙船というと、これは二機がスクリーンになるべくダメージをあたえないよう障害物をさけているのにたいし、まるでさけようという気配はない。がつん、がつんとスクリーン前方に障害物が衝突してもまるでおかまいなしである。よほど力場スクリーンの強度に自身があるらしい。

そのときミリイは妙なものを見た。

タイガーの船にちかづいた小惑星が、その前方かなりの距離で破壊されたのである。まさか、レーザーをつかつているのだろうか？このレースで、障害物をさけるためとはいえ武器を使用するのは禁止されている。

「コンピューター！ タイガーはレーザーをつかつているの？」

ミリイの質問に船のコンピューターは即座にこたえた。

「そのような反応はありません。タイガーの船からはいかなる電磁波の放射も観測されておりません」

「そう、それならいいけど……」

ミリイは自分の見まちがいであろうと判断した。しかし彼女はここでもうすこしコンピューターに違った質問をすべきであった。それならコンピューターはタイガーが禁止されていた武器を使用していることを答えただろうから。彼女のあたまのなかには、武器といえばレーザーなどの放射装置しか思い浮かばなかったのである。

「こいつら、こいつら！ このこのこの！」

フライング・タイガー号のコックピットでタイガーはぶつぶつとつぶやきながら、スクリーンにあらわれた敵宇宙船をつぎつぎと撃

破していった。もちろん、敵宇宙船は小惑星などの障害物をコンピュータが変換して映し出した映像である。タイガーはコースの障害物に敵宇宙船のイメージをあたえ、それらを撃破することに酔っていた。かれの指が操縦桿の引き金にかかると、タイガーの宇宙船からは敵宇宙船に弾丸がとび当たると破壊される。つぎつぎに空中で破壊される敵宇宙船の映像に、タイガーはくちのはしによだれをためて狂ったように射ちつづけた。ミリイがタイガーの力場スクリーンと見たのは、かれがその手前で小惑星を破壊していたせいであった。もちろん、タイガーの機体にも力場スクリーンはそなえられていたが、タイガーが接近してくるほとんどの小惑星を射ちまくっていたため、いまは使われていないのとおなじである。

タイガーの船に備え付けられたのはあきらかに武器であつた。それも宇宙軍が極秘に開発した最新鋭のものである。

それは通常物質を、光速ちかくまで一瞬に加速する加速器であつた。それも電磁的な加速ではなく、重力勾配をつかった加速装置である。局所的な重力勾配をつくりだすトライダルタイプのトンネルに通常物質がおくりこまれると、それは重力制御をつかった加速装置で一瞬で光速ちかくまで加速される。重力レール・ガンといえるこの兵器は射出のさい電磁放射などの外部から観測される痕跡を残さないため、急襲作戦に最適な兵器だつた。しかしこの兵器にも致命的な欠点があつたのである。それは真空中でしか使用できないということである。なにしろ通常物質を光速ちかくに加速するのである。射出した瞬間、それは大気中の空気などの分子と衝突し、たちまちおそろしいほどの放射線をだして崩壊する。敵はおろか、射出した装置そのものすら破壊してしまうのである。したがってこの兵器を使用できるのは宇宙空間などの真空中にかぎられていた。タイガーはこの装置の存在を知り、じぶんのフライング・タイガー号にとりつけた。さらにこの装置をタイガーは調整し、加速限度をわざと半分ほどにしていた。わずかな真空中にそんざいする星間物質との衝突による反応も電磁放射を発するので、それらが発生しないぎ

りぎりの速度に加速させていたのである。

接近する小惑星をつぎからつぎへと破壊しながらタイガーはマロンのシリウス号を見つめていた。かれはこのレースでシリウス号を破壊し、マローンを殺すつもりだった。

がながんがんとつづけざまに力場スクリーンに隕石が衝突し、パックの宇宙船のスクリーンはおおきくゆがんだ。コンソールの計器をよんだへろへろは大声をあげた。

「だめだ、これ以上ぶつかるスクリーンがもたないよ！」

「くそ！」

「あきらめようよ、パック。もういいじゃないか、ここまでこれたんだ」

「なにをいいやる！ あきらめるだなんて、できねえよ」

「だって、これ以上どうすんのさ。リタイアしようよ！」

「ちくしょう……そうだ、へろへろ。そのスイッチをオフにしてくれ」

「え、どれのことだい？」

「そいつだよ。目の前にあるだろう」

いわれてへろへろは目の前のスイッチを見つめる。

「姿勢安定制御のスイッチしか見当らないけど……」

「それだ、そいつをオフにしてくれ」

「ええっ、なに考えてんだ。これを切ったら、この宇宙船どこへ飛んでいくか、わかりやしないぜ」

「それでいいんだよ！ はやく切れ！」

パックがへろへろのほうを向いてわめいた。へろへろはびくつとなつて、あわててスイッチを切った。

とたんに、ぐうんとパックの船は船首をふりでたらめな方向へすすみはじめた。パックは両手、両足をつかってハンドルをまわし、ペダルをふんで船を安定させようと奮闘しはじめた。

「わあ！ ぶつかる！」

ヘロヘロは前方にせまってくる小惑星をみあげて思わず両目をつぶった。

「ごごごご……、と小惑星が船のぎりぎりを通過していく音が聞こえる。効果音解析装置は、通過する小惑星にたいしひどい振動音をあたえていた。びりびりと可聴域ぎりぎりの低周波が船ぜんたいをふるわせる。

「へへ、うまくいったぜ」

ヘロヘロがおそろおそろ目をあけると、パックはにんまりとしている。

「どういうことなんだい？ うまくいった……って」

「姿勢安定制御はたしかにこいつをまっすぐ飛ばせるんだけど、そのかわり反応がにぶくなってしまっただ。こんなに小惑星が密集しているところじゃ、まっすぐ飛ぶことはなんの意味もない。それよりすばやく動けるほうが大事ってわけだ」

そう言いながらパックはハンドルを切った。また船体ぎりぎりの距離で小惑星をかわしていく。ヘロヘロは首をすくめた。

「それはわかったけど……わあっ！ いまのはあぶなかったなあ……、こつめちやくちな動きじゃ……ひいつ！ 舌かんだ……！」

宇宙船は上下左右にでたらめなコースをとっている。

この船をつくるさい、パックはとにかく推力をたかめるためありとあらゆるつてを利用してブースターを船体にとりつけている。とはいえ、ブースターの製造元はばらばらで、その推力はもとより出力特性も同一ではない。したがってそのまま推進すれば、出力特性のばらばらなまま噴射し、どこへ進むかわからないということになる。そのためすべてのブースターを制御するフィードバック回路が必要になるのだが、その制御がかえってすべてのブースターの反応をにぶくしていたのだった。

パックの船は小惑星のあいだをあっちへふらふら、こっちへよろよろという具合に飛行していく。あわや衝突というぎりぎりのところでパックは逆噴射をかけ、あるいは横方向への制動ジェットをつ

かつてかわしていく。そのさまはどう見てもどこか故障している  
しか思えない。

「なんだ、あのやろう。どこかこわれたんか？」

タイガーはスクリーンのなかのパックの宇宙船をにらんでつぶや  
いた。このろみにタイガーはパックの船の航路を表示してみた。そ  
れは酔っ払いの千鳥足ににて、まったく予測不可能なコースをとっ  
ていた。しかしふしぎとコースにばらまかれている障害物にはあた  
らないでぎりぎりのところであわしていた。

「どっちにしろ、おれには関係ねえ……そろそろふけるとするかい」  
タイガーはコースをはなれはじめた。

コックピットに警報音がひびく。

「コースから離れています。コース修正してください」

コンピュータの合成音声にタイガーはかつとなつて怒鳴った。

「うるせえ、てめえなんか黙ってるい！」

「コース修正……」

タイガーは腰からレーザーガンをだすとスピーカーにむけて引き  
金をしばった。スピーカーは白煙をあげて沈黙する。

コースを表示するホログラフィーのラインからタイガーのフライ  
ング・タイガー号はコースを逸脱してしまった。その結果、コース  
を監視するリーダー・システムからタイガーの機体は消失してしま  
い、存在しなくなってしまった。タイガーはこのレースから消えて  
しまったのだ。ミリイがタイガーを映話システムから排除した結果  
だった。タイガーはこれを見こしてわざと、ミリイに嫌がらせをし  
ていたのだった。

タイガーは機体をおおきくバンクさせた。コースをショート・カ  
ットして、上位グループのさきまわりをするつもりである。

レースの上位グループにはマローン少佐のシリウス号がいた。  
コースも終点にちかづき、障害物である小惑星もまばらになつて

くる。マローンはスピードをあげ、ほかをひきはなしにかかった。このために改造をくわえたブースターは全推力をだし、みるみる速度をあげていく。たくみなマローンの操船で、シリウス号は小惑星のすきまをぬけていきトップにたった。ほかの船はこのシリウス号のいきおいにおいてきぼりになっていった。

「すげえ、あつというまにマローン少佐のシリウス号がトップだぜ！」

レーダーでレースの推移を見ていたパックは感嘆の声を上げた。それほどマローン少佐のいきおいはすばらしいものだった。パックもまたじよじよに順位をあげていたが、上位にはほど遠いものだった。ミリーのユニコーン号も上位にいたが、それでもマローンの敵ではなかった。マローンのシリウス号は単独トップとなっていた。

コースの終点にちかづき、シリウス号はまっすぐゴールへつきすすんだ。

「きたきた……」

タイガーはレーダーを見つめ、にたりと邪悪な笑みをうかべていた。指先は引き金にかかっている。

タイガーのフライング・タイガー号は小惑星にぴったりとはりついていた。タイガーはこのためにコース上に存在する小惑星の軌道を調べ、レースの終盤ちかくにちょうどいい位置にくる小惑星の目星をつけていたのである。小惑星にひそんでいたため、タイガーはレーダーの監視の目からのがれていた。

マローンの乗るシリウス号はコースのまんなかを突き進んでくる。核融合のほのおが大きくひろがっている。すでに後続の宇宙船はおきくひきはなし、独走だった。

タイガーは照準にシリウス号をとらえていた。重力レールガンの局所重力発生装置の効果で、強大な重力勾配が発生する。

シリウス号の進路にはもうなにもない。

タイガーはゆっくり引き金をひきしぼった。



「まあ飲みたまえ。遠山くん、いけるんだろう？」

「いえ、あまり飲めませんので……そうですか、ではいっただけ……」

グラスのふちいっぱいまで注がれたビールを遠山はくちをむかえるようにして飲み干した。ぱちぱちと遠山のまわりに座った接待アンドロイドの女性たちが、嬌声をあげて拍手をする。テーブルのむこうにはシルバーがすわっている。あいかわらず葉巻をくわえにやにやわらいを唇のはしにうかべながら遠山を見つめていた。

ここは洛陽シティの歓楽街で、シルバーの個人的な要談のさい使われることのおおい秘密クラブである。種を割れば、この店はシルバーがスポンサーとなっている。したがってこの店にくるのもシルバーがこれとは目を付けた相手だけで、この店で籠絡するためにつれてくるのだった。店でだされる酒にはごく微量ながら麻薬が混入しており、これを飲まれた相手はシルバーの暗示にかかりやすい心理状態になる。そういう心理状態になったところあいを見計らってシルバーは要談をするので、相手はほとんどシルバーの言いなりとなってしまうのである。

ただこのシルバーの手にどうしてもものらない相手がいた。それがペガサス社のミリィであった。なにしろ未成年で、しかも女の子だ。そういう相手をこういう店につれてくることもできず、シルバーは迂遠ながら木村にスパイのまねごとをさせたり、古株の重役に手を回して代表質問権をかちとるための株のとりまとめなどという方法をとってきたのだった。その手駒のひとつとして、今夜シルバーは遠山という筆頭重役をつれてきた。この男がシルバーの味方となればペガサス社の乗取はほぼ半分成功したも同然だった。

シルバーの見るところ、遠山はペガサス社の事実上の宰領者といっただけ。この男がいなかったら、ペガサス社は即時ばらばらになっってしまうだろう。しかしどういうものかミリィはこの男にそれほど篤い待遇をもってむくいてはいないようだった。とうぜん、遠山

はミリイにたいし不満をもっているはずである。

グラスがからになり、シルバーは接客のアンドロイドに命じてつぎつぎとビールを注がせた。遠山の両隣には金髪と、赤毛の美人アンドロイドがべったりとへばりついてその胸を遠山の両肘におしつけるようにしている。注がれた酒をつぎからつぎへと飲み干した遠山の眼鏡のおくの視線はふらふらとさまよいはじめた。顔は真っ赤というより、いまは蒼白にちかい。かなり飲んでいるはずだ。シルバーはがくり、がくりと首をふっている遠山にささやきかけた。

「どうだ遠山くん、うちにこないか。きみはペガサス社ではそれほど待遇を得ていないはずだ。きみがうちにくれば、ペガサス社の二倍、いや三倍の年俸を約束しよう。それともちろん、役員待遇もな」

「役員待遇？」

「そうだ、クロノス社の役員だ！ 株式の譲渡も約束する」

「しゅ、しゅごい待遇でしゅね……しゅごい……」

それつの回らない口で、遠山はにたと痴呆のような笑みをうかべる。

「それでだ、きみにやつてもらいたいのはペガサス社の内情をしらせてほしいということなんだ。なに、たいしたことではない。きみほどの地位があれば、簡単なことだ」

「内情って、なんでしゅか……？」

「そうだなあ、たとえばペガサス社の代理店契約の中身とか、販売ルートの詳細な中身とかだ……、きみなら探り出せるんじゃないのか」

「ふむ……できますよ……シルバーさん。しかし、わたしはそんなことはしない」

ふいに遠山の口調がかわりシルバーはぎよつとなった。

見ると遠山の酔眼はいつのまにか冷静なそれにかわり、顔色も平常にかわっている。

「な、なに……きさま？」

まさに変貌といってよかった。さきほどまでのだらしない初老の男はそこにはなく、精悍といっていい表情の何ものかがそこにはいた。いまや酔いはかれの表情のどこにも存在はしていなかった。

「酒に精神を変化させる麻薬をしこんでいるという噂がありました。それは事実でしたな、シルバーさん。うちの重役があなたのために株式のとりまとめをしているのではないかという疑いがあったので調査していたのですが、この店で接待をうけてからどんな忠実な役員でもあなたの言いなりになるということはどういうことかと思っていたのです。そこでわたしみずから調査にまいったということです。シルバーさん、わたしに自社株の譲渡を申し出るなどという贈賄ばかりでなく、こういった違法の店を経営したことでもあなたにはじゅうぶん告発をつけることでしょう」

「だれだ、きさまは？ あ、遠山か」

「そう、わたしは遠山だ。ペガサス社の筆頭重役でもある」

ぼうぜんとしているシルバーはどやどやとふみこんでくる足音に顔をあげた。見ると数人の男女が手にレーザーガンをかまえふみこんでくるところだった。かれらの背後には巨大な警察ロボットが完全武装ですばやく店内に展開し店の客や従業員たちにたいし武器をかまえている。

「洛陽警察だ。シルバー、違法な取引とともに、麻薬をつかった強制的な意志操作のうたがいで逮捕する。おまえの発言はすべて記録されていたぞ」

刑事のひとりがじぶんの腕をまくりあげた。そこには特殊な光線でしかつかびあがらない帝国警察本部のホログラフィー刺青があった。この刺青は帝国警察でしか採用していないもので、偽造不可能とされている。帝国の記章と警察官の身分をあかす個人指標がそこには刺青されていた。

刑事がかれのために権利をよみあげているなかでシルバーはさげんでいた。

「なぜだ！ なぜ、そんなにあの小娘に忠実なんだ、おまえは？」

「それはわたしがそう設計されているからだ。わたしは製作された瞬間からペガサス社とミリイさまに忠実であるよう期待されている」

遠山のことばにシルバーは愕然となった。

「きさま……ロボットか……？」

「そうだ。わたしは特A級のアンドロイドだ。このような目立たない外見なのも、ミリイさまをお守りするのに都合がいいからでもある。もしわたしが筋骨たくましい強烈な印象の外見をもっていれば、おまえのようなペガサス社をねらう人間の警戒心を刺激して、このような囹捜査をしかけることはできないだろう」

「そうか、それでミリイは後事をおまえにたくしてレースなどという馬鹿げたことに専念できたんだな。ロボットが忠実なものあたりまえだしな……」

「いいや、ミリイさまはわたしがアンドロイドだということはなにも知ってはいない。わたしはあくまで人間としてミリイさまに付き従ってきたからね」

「くそ、なんてことだ……ロボット相手に、おれは踊っていたというわけか」

シルバーはがつくりと肩をおとした。

捜査員のひとりが顔をあげた。耳にイアフォンをはめている。

「遠山さん、レースのことですが……」

「え？」

遠山は不安げな表情になった。もしかやミリイになにかあったのか？

「マローン少佐のシリウス号が爆発したそうです」

「マローン少佐が？」

それを聞いたシルバーの顔色が変わった。タイガーだ！ シルバーは直感していた。タイガーがこれにはかならず関わっているはずだ。

## マローン（前書き）

タイガーの悪事はあばかれた！  
マローンの語る、タイガーの過去。

## マローン

7

タイタンは土星の衛星のひとつであるが、きわだった特徴のある衛星として知られている。それはタイタンが太陽系の惑星をめぐる衛星のうち唯一、大気をもつためである。メタンとアンモニアにみちた大気はタイタンを水素燃料の供給基地として発展させた。地球を盟主とする帝国の初期、太陽系を脱出して恒星間宇宙へ乗り出す植民宇宙船の前進基地としてタイタンは発展してきた。やがて超空間航法が確立してからは水素燃料の供給基地としての役目はおわったが、いまでもタイタンは冥王星や彗星のあつまるオールト雲にかぶ通信基地の後背地として機能している。超空間航法が確立してから数世紀、人類はずっと人類以外の知的生命体を探索してきたがいまだ見付けだせないでいた。太陽系辺境星域にうかが超長波通信基地は人類以外の知的生命体をもとめていまも銀河系のありとあらゆる空域を探查していた。

タイタンの地表には太陽系レースの出場宇宙船がせいぞろいしている。どんよりとした重い雲がひくくたれこめ、零下数十度の極寒のメタンのブリザードが吹き荒んでいた。タイタンの地表にわずかに突き出たドームのなかに出場者はあつまっていた。ドームのなかは暖房でむっとするくらい暑い。しかしラウンジに集まっているパイロットたちの顔はどれも暗くしずんでいた。

みなマローン少佐のシリウス号の爆発を見てショックをうけていた。

ミリイとパック、それにへろへろはひとつのテーブルに集まっていた。

「どうするんだよ、ミリイ」

パックが口を開いた。ミリイは「え？」という顔になった。

「どうする、って……？」

「レースだよ！ このままつづけるのか、どうなのかってことさ」

「わからないわ……、あたしどうしたらいいか……」

ミリイは頭をかかえ、首をふった。赤い髪の毛がはらりとほほにかかる。

「やめるんなら、地球の本社に連絡しなきゃならないぜ」

「ええ、そうね……」

ミリイはぼんやりとこたえる。

「なあ、マローン少佐が死んでショックなのはわかるけどさ、このレースの責任者はきみなんだぜ。ここでミリイがめそめそしてたら、みなこまるじゃないか」

「めそめそなんかしてないわよ」

ミリイはきつとなった。ほほに血の気がもどってくる。パックはにやつと笑った。

「そうじゃなくちゃな！ さっきまでのミリイはまるで死人だったぜ」

「馬鹿ねえ……。でもあたし、どうしてもマローン少佐が死んだなんて信じられないのよ。どっかで少佐は生きてるんじゃないかと思えてならないの」

ミリイの言葉にパックは胸をつかれた。

「うん、おれも少佐が死んだなんて思えないな」

パックの言葉にミリイは身を乗り出した。

「あんたもそう思う？ あの爆発で、少佐の死体は見つからなかったし……だからというわけじゃないけどなんだか少佐は生きている、そう思えてならないのよ」

「いいや、マローンは死んだ。そうにきまつてる！」

「！」

だしぬけに背後から大声がして、ミリイとパックは顔をあげた。タイガーだった。

「マローンは死んだ！ やつはアステロイドとぶつかって、死んだのさ！」

わははは……！ タイガーは高笑いをした。

その声に、ラウンジのパイロットの全員が注目した。みな、顔をあかくして高笑いをつづけているタイガーにつめたい視線をなげかけている。

「なんでえ、なんでえてめえら。辛気くせえ顔しやがってよ。たかが、おいぼれパイロットが事故って死んだくれえでよ。これでレースあきらめるつもりじゃねえだろうな」

「タイガー、もう一度言つてご覧！」

ミリイは怒鳴った。目がいかりに燃えている。

「マローンはおっ死んだって言つたのよ！ おい、ミリイちゃん。あんた、このレースをちゃらにする気じゃねえだろうな」

「どういう意味？」

「どうもこうもねえや。たかがサイボーグのおいぼれパイロットが死んだだけでこのレースをなしにするなんて考えているんじゃないだろうなってことよ。おれはこのレースに勝ってやるからなあ。こんなことでおしめえにしてもらいたくねえのよ」

「タイガー、あんたレースに出場できると思つてるの？ アステロイドのコースをじぶんから逸脱して、あの時点であんたの出場資格はなくなったのよ」

「おい、おい。どういうこと？ なんでおれがレースの出場資格を取り消しになるんだい」

「あんたがコースから出たからじゃない。とぼけないで」

「証明できるかい。おれがコースを出たってことを？」

「なにを……馬鹿なことを！ だって、あんたコースから出たじゃない。レーダーで見てたわよ」

「それがおれのフライング・タイガー号だってこと、どうしてわかる？ 言つとくがなあ、おれはあんたのおかげで映話システムから締め出されたんだぜ。あの時点でおれのフライング・タイガー号は



監視システムから切り離されたんだ。あれ以後からのおれの行動については、どんな証明も不可能だ」

ミリイはタイガーの言葉につまった。それは事実だからだ。ミリイがタイガーを映話システムから切り離した結果、タイガーの行動については証明はできない。

「いいかげんにしろよな、タイガー！」

パックはテーブルをどん、と叩いてたちあがった。タイガーはパックを見下ろして眉をあげた。

「なんでえ、小僧か。すっこんでな！」

「タイガー、おまえがマローン少佐を殺したんだな？」

タイガーはくびすじまで真っ赤になった。

「なに言いやがる、このガキが！」

「きつとそうだ！ あんたはマローン少佐になにかうらみがあつて、それで……」

パックは言葉につまった。

タイガーはにやりと笑った。

「それでどうした？ 言ってみな。おれがどうして少佐を殺そうとするんだ」

タイガーはぐると周囲をにらんだ。出場パイロットたちはみなタイガーを注視している。その視線に、タイガーはいらいらしはじめた。

「なんでえ、手前ら！ おれがなにしたっていうんだ！ おれがマローンを殺したなんてデマかせ信じるつもりじゃねえだろうな？」

「タイガー、あんたの船にちょっと疑問があるのよ」

ミリイの言葉にタイガーは目を見開いた。

「なんだとう？」

「あんたが提出したフライング・タイガー号の設計図の一部に、空白の箇所があるわね。あれはいつたいなに？ あたしはレースの主催者として、出場する宇宙船の設計図にはすべて目を通していいわ。どうやらあんたの船については、もっとよく知る必要があるようね」

タイガーはだまってしまった。目だけをぎよるぎよる動かして立ち尽くしている。ミリイは笑った。

「どうしたの、タイガー。黙っちゃったじゃない。いいわ、これからうちの技術部の人間とあんたの船を調べることにするわ。文句ないわね！」

「くそっ！」

タイガーは歯噛みをした。さつと身動きをすると、手品のようにその手にレーザー銃があらわれた。はっとラウンジの全員が緊張した。タイガーは銃口をゆつくりと左右にふってじりじりと後退りする。

「動くなよ……、こいつの引き金は軽くてな。へっ、お嬢さん。あんたの推理はただしかったさ。おれの船には重力加速砲が装備している。マローンのやつをばらすために、おれがとりつけたんだ。もともとレースに勝つことなんざ目的じゃねえ。マローンを殺すことにくらべりゃ、たいしたことじゃないし……。おれは船がほしかっただけだ。クロノスのシルバーの野郎からあの船を頂きたいまじや、あとくされはねえや！」

そう毒突くと、タイガーはさつと身を翻しエア・ロックへ駆け込んだ。エア・ロックの扉が閉まると、ラウンジの全員はわつとばかりにとりついた。

「あいつ、閉めきりやがった！」

扉を開こうとしてパックはどなった。エア・ロックの扉はびくともしない。内側から鍵をかけているのだ。

「あそこ！ タイガーが……」

だれかが叫び、ラウンジの窓に全員がとりついた。超高密ガラスの向こう側にタイタンの地表がのぞいている。くらい夜空に、氷結したメタンが吹雪いていた。こまかなメタンの吹雪のかなた、駈けていく人影があった。タイガーである。

「タイガーのやつは、宇宙服を着ているのか？」

「いいや、エア・ロックには宇宙服はついていないぞ」

「それじゃ、あのままの格好で外にでたのか？　まさか、死んでしまっぞ！」

「あつ、タイガーの船が……」

その声に全員が離着陸床を見た。

そのなかにタイガーの宇宙船、フライング・タイガー号が鋭角的なシルエットを見せている。そのフライング・タイガー号の斥力プレートが青白く光りはじめていた。

「逃げるつもりだ……。なんてやつだ。宇宙服もなしに外に出て、それでじぶんの宇宙船に乗り込むなんて……」

パックはつぶやいた。タイガーの船はじょじょに上昇しはじめていた。どおん、と空気がふるえ轟音が聞こえてくる。タイガーは船の斥力プレートだけでなく、ブースターも同時に働かせている。オレンジ色のほのおがあたりをあかるく照らした。

「あれ、なんだろう……」

パックのとなり窓に顔をおしあてているヘロヘロがさげんだ。上昇しているフライング・タイガー号の行く手の雲間から、もうひとつの光があらわれた。もう一隻の宇宙船が着陸しようとしているのだ。船体はちいさく、連絡艇ほどのおおきさである。

上昇するタイガーの船と、着陸してくる連絡艇はすれちがった。タイガーの船が噴射するブースターのあおりをうけ、連絡艇はふらついた。

「あつ、落ちる！」

連絡艇はおおきくあおられ、失速した。急角度で地面に船首をむけると、ぐんぐんと高度を落としてしまう。連絡艇の操縦者はそれでもなんとか機体をたてなおそうところみているようだった。しかしその努力もむなしく、連絡艇は地面と激突した。

もくもくと黒煙がたちのぼった。

「ひでえ……」

「だれだか知らないが、間が悪いときに着陸したもんだ。あれじゃ、生きてはいないだろうな……」

「おい、エア・ロックを開ける！ 助けにいかなきや……！」

「よし。だれか、工具をもってこい！」

全員が手分けしてタイガーが閉めきったエア・ロックの扉をこじあけるため工具をもちよってきた。

「まかせろ。こういうことには慣れてる」

パックはまわりの人々をおしのけると扉の開閉装置にとりついた。工具をつかつて開閉装置の回路をむきだしにする。電子回路をたちまち無効にしてしまい、扉は開いた。それを見ていたまわりのパイロットはおもわず歓声をあげた。

全員が宇宙服を着込み、いつせいにタイタンの地表へととびだす。墜落した連絡艇は地表に激突して跡形もない。地表のひろい範囲に連絡艇の破片がばらばらにちらばっていた。衝突の際の高熱で、大気中のメタンと化学反応をおこしたのか、金属片の表面が真っ黒になっていた。

「乗組員はどこだ？」

「わからん。あの衝突だ。骨ものこっちゃいないんじゃないか？」

宇宙服の無線でパイロットたちは会話をかわした。ヘルメットのライトを点灯し、地表をさがしまわっている。

「あつ、人がいるぞ！」

「なんだと？」

いつせいにヘルメットのライトが一点に集中した。そのひかりのなかにくつきりと地面に倒れた人影があった。

わらわらとパイロットが集まり、倒れている宇宙服の人間をかかえおこした。

「生きてるのか？」

「わからん。とにかく、ドームへ連れていこう」

宇宙服の人物は全員にたすけられ、ドームのなかへ入った。ドームのなかへはいると、氷点下数十度からいっきに通常の気圧と気温にさらされ、ヘルメットがまっしろに霜がおりてしまう。ヘルメッ

トをはずした全員は驚きの声をあげた。

「マローン少佐！」

まさしくそれは行方不明のマローン少佐そのひとだった。プラスチックの人口皮膚がその証拠である。

みなぼうぜんとなつて声もなく見つめている。ミリイは驚きのあまり両手をくちにあて身動きもできないでいた。

「まさか生きていたなんて……」

と、横たわっていたマローン少佐のまぶたがぱつちりと開き、そのしたのレンズがむきだしになった。ぽつ、とレンズのおくが光をとりもどす。

むつくりと少佐はおきあがった。

「やあ……、どうやら助けてもらったようだな」

少佐はそういうとにっこりと笑いかけた。

おおーっ、とパイロットたちは歓声をあげた。

「生きていたんですか、少佐！」

パックが声をかけるとマローンはうなずいた。

「パックくんか。生きていたさ。あいにくこのサイボーグ体は頑丈でね、なかなか死ぬことはできないよ。アステロイド・ベルトで船が爆発して、わたしは宇宙空間になげだされて気絶してしまった。

ひろい宇宙空間でわたしひとりを見付けだすのは不可能だったろうから行方不明になってしまったのだろう。ようやく意識を回復して救難信号を発信して救助してもらったというわけだ。みんなに心配かけるわけにはいかないから、連絡艇をかりてここまでやってきたのだが、着陸前にすれちがった船の噴射で操縦がくるって墜落してしまった。あれは見間違えじゃなければ、タイガーの船のようだったか……」

「そうです。タイガーは逃げ出しました」

ミリイはタイガーとのやりとりを説明した。マローンはうなずいた。

「そうか、やはりわたしの船を攻撃したのはタイガーだったか……」。

小惑星にかくれて接近してなにかを発射したのはわかったのだが、そんな武器を装備していたとは」

「少佐、どうしてタイガーはあんなにマローンさんを憎むんですか？」

パックが尋ねてマローンはちよつと黙った。

「うん、それは……まあわけがあるんだよ」

あきらかに言いたくないという雰囲気だった。パックのうしろからミリイが口をさしはさんだ。

「マローンさん。このさい、そのわけというのを教えてくれませんか」

「そうか……わけを知りたいというのか……みんな、そうかい？」

まわりに集まったパイロットたちはいっせいにこくんとうなづく。

「しかたないな……だれにも話したことはないんだが。みんな、この話は秘密にしていってくれ。ほんらいなら軍法会議の内容はもらしてはいけないんだからね」

そう前置きしてマローンは話しはじめた。

8

それは十数年前のことだった。

辺境星域にある惑星、「蒼海」にマローン以下数百名で構成される特殊部隊が大気圏降下を開始していた。全員、帝国宇宙軍の第四特殊装備をしていた。これは少数の精鋭による潜行計画を意味した。惑星「蒼海」は海陸比率が9：1となって、海の部分がほとんどをしめる。地球からの距離は二百光年と、銀河帝国の範囲外ぎりぎりに位置した辺境星系だった。植民されて一世紀以上と、植民惑星のなかでは歴史がふるい。人口は数百万をかぞえ、農産物が主要な産出物である。

マローン少佐以下、特殊部隊を乗せた着陸艇は惑星の明暗境界線あたりから大気圏突入を開始した。この角度からならば太陽の背光

にかくれ、大気圏突入の形跡を隠すことができるからである。

大気圏に突入して着陸艇が減速を開始すると、マローン少佐たちは防護カプセルにはいつて空中に放出された。地上一万メートルの高度でカプセルが開き、特殊装備で身を固められた隊員は斥力プレートでゆっくりと地上へ向けて降下しはじめた。

目的の地点は惑星総督府である。

総督府には宇宙軍の総督軍が駐屯していたが、情報によりこの惑星をおさめる辺境伯爵によって拘束されていた。

伯爵は宇宙軍を拘束して惑星に軍政を施き、みずから皇帝を僭称して戴冠式を強行したのである。伯爵はこの惑星を手中におさめ、独立を宣言するつもりである。

そのために伯爵は超空間航法をおこなうための空間配列を破壊する工作をおこなっていたのである。恒星と恒星をつなぐ超空間航法にはそのための空間配列が安定していることが前提である。その空間配列を破壊すれば、もはや地球から宇宙船が超空間を通過して到達することは不可能になる。そうなれば惑星「蒼海」は地球を盟主とする銀河帝国から孤立してしまう。伯爵はそれをねらったのだった。超空間航法の出入口の破壊には、シュバルツシルツ半径わずか数メートルほどのマイクロ・ブラックホールがつかわれる。重力制御装置を暴走させ、超空間航法出口にブラックホールを形成すれば空間に歪曲が生じ通路は閉じられる。ブラックホールはやがてホーキング放射によって蒸発してしまうが、閉じられた超空間の出口は二度と復活することはかなわないのである。

地上に降りた特殊部隊の一行はその場でこの惑星の住民の服装に着替えた。マローンは目立つため人里はなれた場所で部下たちの報告をうけることになる。

総督府のあたりは昔ながらの水田地帯で、農家がぼつぼつと点状にする牧歌的な風景がひろがっていた。季節は初秋をむかえ、畑にはとりいれをまつばかりに穂をたれたコシヒカリの稲穂が実っている。総督府そのものは巨大な石組みの宮殿で、小高い丘のうえにそびえ

たっている。部下たちは旅の商人といったいでたちで農村にむけ情報収集にでかけていった。

やがて部下たちの無線により拘束された宇宙軍兵士たちの居所が知れ、マローンは総督府への突入を決意した。

夜明けをまってマローンは部下をひきつれ、総督府へ強行突入作戦を開始した。

タイガーは別働隊として背後をつくという配置だった。

マローンは首尾よく総督府へ突入を成功させ、伯爵一家をおいつめた。

しかしそこで思わぬことがおきた。

タイガーが裏切ったのである。

別働隊として伯爵の背後をつかせる計画であったが、なんとひそかに密約を伯爵とむすび、伯爵の計画に手をかす見返りに支配者の一角として迎え入れることを約束させたのだった。タイガーはこの惑星を私物化するという夢にとりつかれてしまったのだ。

マローンの突入部隊は窮地に陥った。

武装解除されたマローンとその部下は伯爵の私兵によって処刑されることになった。

そこでマローンは奥の手をつかった。

あわや処刑という一瞬、マローンは加速状態にはいった。

反射機能を予備の電子頭脳にまかせ、人間の数百倍という速度で動く加速状態にはいったのである。サイボーグ体であるからできる離れ業だった。

見物している伯爵たちの機敷席へむけマローンは一瞬にして音速をこえた速度で殺到した。伯爵の鼻先でマローンは空中へ急角度に飛び上がった。その瞬間、マローンが作りだした高密度の空気の壁が伯爵のすわる機敷席を破壊した。すなわち衝撃波である。

特殊部隊はこのマローンの加速状態を計算にいれて編成されている。マローンがみずから加速状態にはいると、特殊部隊は敷域下催眠学習により自動的に動いた。



あつという間の出来事だった。伯爵はなにがおきたか理解しないうちに頸椎をおって死亡した。タイガーは命拾いをしたが、マローンの部下にとらえられた。

「ちくしょう、おれの計画をよくも……」

部下にとらえられたタイガーはマローンの前にひきすえられ毒突いた。マローンは脱力感と戦いながらタイガーの裏切り行為の記録をしていた。マローンの手には食用油のボトルがにぎられている。加速状態は一瞬にして数万キロカロリーのエネルギーを消費する。そのうしなわれたカロリーをとりもどすには、食用油をがぶのみするのをもっとも効果的だった。

マローンは部下の裏切りに慣れていなかった。さらにはタイガーを軍法会議にかけることをおもい憂鬱でもあった。しかしあきらかな軍令違反は見逃すことはできない。この惑星に駐在していた宇宙軍のなかにマローンより上席の階級の者はいなかったせいでマローンみずから軍法会議を開催するはめとなってしまった。

「軍令違反、および帝国への謀反はあきらかである。したがって当法廷はタイガー少尉にたいし、階級剥脱と宇宙軍からの永久追放を決定する。被告タイガーはこれ以後、どのような特例でも宇宙軍にかかわる仕事は禁じられる。なお禁錮十年を通達する」

マローンはタイガーにたいし精一杯の量刑の軽減をしたつもりだった。しかしタイガーはマローンを憎悪した。惑星の支配者になるという夢をつみとられた恨みは、かれにしこりをのこしたのである。

「反逆罪つてわけか！」

パックは怒りに顔をあかくさせた。

まわりのパイロット、そしてミリイもタイガーの帝国への反逆という重罪にシヨックをうけていた。

「そうだ。その判決を命じたのがわたしで、だからタイガーは恨んでいるのだろっ」

「とんでもないこった!」

パイロットのひとりがはきすてるように口を開いた。

マローンは知っている。かれらが生まれてすぐつける記憶RNAの処方に、銀河帝国皇帝への盲目的な服従心がふくまれていることを。この記憶RNA処置により、銀河帝国のどの星でも共通の言語知識が敷延することを可能にしたのだが、同時に帝国への服従心もうえつけられることになる。かれらの世代では帝国への反逆とは心理的に考えられないことでもあるのだ。マローンや、タイガーのようなふるい世代だけが植民惑星の独立などという夢にとりつかれることができるのである。

こういった強制的な服従心のすりこみは帝国に恒久的な平和をもたらすことになったのだが、反面人類から気概を失わせることになったのではないかとマローンはふと思ったりするのである。しかしこういった考え方はかれらにとってありえないものであるから、なにも言わないことにしている。

「マローンさん。どうしてタイガーに死刑を命じなかったの？ 反逆罪なら、当然でしょう」

ミリイの言葉に、マローンは苦笑したのみだった。

「まあいいだろう。タイガーは逃げた。もう、レースを邪魔することもないし、きみたちはこれから残りのレースをがんばってくれ。わたしの船はなくなってしまったから、これからきみらの応援をすることにするよ」

「そうだよ！ ミリイ。レースはどうするんだい」

パックの言葉にミリイはうなずいた。

「もちろん、続けるわ。みんなも、そうしたいわね？」

ラウンジのパイロットたちはおう、とミリイの言葉に首肯いた。みな、これからのレースを続けることに熱意をもっているのがある。ありとわかる。

## 大団円（前書き）

レースは最終の太陽面通過へ。

ミリィとパックはこのレースを制覇できるのだろうか？

## 大団円

10

レースは最終戦となった。

それは水星から出発し、地球へふたたびもどるコースである。それには太陽面ぎりぎりを通過するコースで、宇宙船にとっては苛酷な耐久レースでもあった。

水星にあるセレン採取基地がレースの出発地である。

地球の、月とほぼおなじくらいの直径の水星はかつては永遠に惑星の半面を太陽にむけたままだと思われていた。しかし実際には水星はゆつくりとではあるが自転していたのである。このレースがおこなわれる時間、基地は明暗境界線に位置し、地平線ぎりぎりに太陽が隠れていた。基地に勢揃いしている宇宙船は、その地平線のむこうにむけて出発することになる。

ミリイは映話システムをつかって出発をまつすべてのパイロットに話しかけた。

「わたしはこのレースの主催者のミリイ川村です。みなさん、このレースに参加してくださいありがとうございます」

映話システムの、スクリーンのむこうのミリイは晴れ晴れとした顔をしていた。遠山からの連絡で、クロノス社のシルバーが警察によって逮捕されたことを知らされ、後顧の憂いがなくなったからである。逮捕されたといっても、シルバーはその財力にものをいわせたすぐに特赦をうけるだろうが、いまミリイとシルバーのあいだでとりかわされた密約の効力は事実上なくなったと考えていい。いまミリイの頭のなかにあるのは、このレースになんとしても勝利することだけであった。

「いろいろあったけど、このレースを開催してよかったと思います。

みなさん、この最終戦正々堂々と戦いましょう！」

ぱちぱちぱち、とパイロットたちはおのおののコックピットでミリーの演説に拍手をした。その拍手にミリーはほほを赤くそめている。

「いやー、格好いいぜ。ミリー！」

パックは映話のプライベート回線でミリーに話しかけた。

「なによ、パック。ひやかさないでよ」

ミリーはパックの言葉にまた顔をあかくする。

「ミリー、きみはこのレースで優勝をねらってるのかい。もしかして？」

「あたりまえじゃない。そのためにこのレースを開催したんだから」

「それじゃ忠告するけど、太陽面通過のコースをとるとき、太陽からはなるべく離れたほうがいいぜ」

「どうしてよ」

「その……、きみが間違えておれの工場にユニコーン号をはこびこんだろ。それでちょっとおれ、きみの船を調べてみたんだ。だから言うんだけど、その船は熱の遮蔽にちょっと難点があると思うよ」

「うそ！ この船はペガサスの最高の技術陣によって設計されたのよ。欠陥なんか、あるわけじゃないじゃない」

「いや欠陥とかそういうんじゃないよ。きみの船の機関部は船殻のなかにおさめられている設計だろ。だから容積がおおきくとれるんだけど、熱はまともに船殻に浸透すると思うんだ。いまでもミリーの船はポイントでトップにたってるんだから、無理することないって！」

スクリーンのむこうでミリーはぶつ、とふくれた。

「なによ！ あんた偉そうに……。言っとくけど、この船はペガサスの最高傑作とっていいものよ。そういうあんたの船、レースを続けられるのかしら？」

「なんだとう……。ああそうかい！ おれの忠告が聞けないっていうんだな。勝手にしろ！」

パックはかつかとしてきて、そう捨て台詞を言つと接続をきつた。  
「パック。またミリイと喧嘩したのかい？」

副操縦席でへろへろが心配そうにパックを見上げた。パックは肩をすくめた。

「へっ、あんな女。おれがわざわざ忠告したつていうのに、聞く耳もたないらしいや。太陽のほのおでこんがり焼かれてから、おれの言つたことがほんとうのことだと後悔してもおそいぞ」

はらだちまぎれにパックはコンソールをばん、と叩いた。  
無性に腹がたっていた。

映話システムがレースがせまっていることを警告し、パックはコックピットに座りなおした。まわりの出場宇宙船は出発準備のため斥力プレートをじょじょに作動しはじめている。パックもまた船の機関をたちあげてそれにそなえる。もうミリイのことも脳裏からすっかり消えていた。こうなれば、レースでいい成績をとることだけがパックのすべてになっていた。

カウント・ダウンがはじまり、パックは緊張した。

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、ゼロ！」

出場宇宙船すべてのブースターがほのおを噴出させた。

つぎつぎと宇宙船は急角度に上昇していき、暗黒の宇宙空間に消えていく。もちろん、ミリイのユニコーン号が先頭である。

パックもまた船のブースターの出力をいっぱいに開いた。  
すこっ、すこん、すこん、ぷす……。

「！」

パックの顔色がまっさおになった。

動かない！

「パック？」

へろへろが声をかける。パックのこめかみからだだと汗がながれている。必死になってパックはキーをまわしている。

きゅるるるん、うけけけ、すこっ、すこっ！

たよりない音をたて、パックの宇宙船は身震いを続けるだけだっ

た。

「なんでだよ、こんなときに！」

パックは天をあおいで叫んだ。

「パック、あきらめようよ。やっぱりレースに出場するなんて、無理だったんだ」

ヘロヘロの言葉にパックはかつとなった。

「うるせえ！ あきらめるなんて、できっかい！」

パックはだっ！ とばかりに船尾の機関室へ走り込んだ。コックピットのヘロヘロへむけてさげぶ。

「ヘロヘロ！ おれが合図したら、キーをまわせ！」

「パック、なにか成算があるのか？」

「こんなもんはなあ……」

パックは身構えた。工具箱からおおきなスパナをとりだし、手に握り締める。

「叩けば動くんだよっ！」

エンジンのハウジング目掛けてスパナをふりおろした。

「動けっ、このっ！」

があん、と物凄い音が機関室にひびいた。  
くるるるるん……。

エンジンは身震いをした。

「！」

パックは目を見開いた。

どどどどどど……。

足元の床が震えている。

「動いた！」

パックは歓声をあげた。コックピットを振り向いてさげぶ。

「ヘロヘロ、始動キーをいれろっ！」

「わかった！」

ヘロヘロはコンソールのキーをひねった。

轟っ！

ブースターが白熱する。パックはコックピットへ走った。

操縦席にパックはとびこむように身体をおしこみ、ベルトをかける。足元のアクセル・ペダルを踏み込むと、宇宙船は蹴飛ばされるように空中に飛び上がった。背中が座席に押しつけられパックは歯を食いしばってたえた。

「わあ！」

へろへろは座席からころろと転げおちてしまった。

「馬鹿！ちゃんとベルトをしめてろ」

パックはわめいた。へろへろは座席にまたはいあがって安全ベルトをしめる。

宇宙船が水星の地表からぐんぐん高度をあげていくと、地平線のむこうから太陽が見えてくる。とたんに強烈な光輝が宇宙船の船窓をあぶった。一瞬にして偏光シャッターが働き、船窓は真っ黒になった。パックは環境解析装置のスイッチをいれた。環境解析装置は船外の太陽からの放射能や電離プラズマ流を風の音としてとらえていた。パックが船の針路を太陽へむけると、風の音はじょじょに高まっていった。

「だいぶおくれた。急ぐぞ！」

パックは三次元レーダーをにらんでさげんだ。スロットルをめいっぱい開き、船体の上限ぎりぎりまで加速する。加速は一瞬にして10Gをこえ、船内の重力を中和する制御装置はそれにおいつかずパックとへろへろのふたりは座席にうまりながらそれに耐えた。

「パック……なんだか、暑くなってきたんじゃないのか？」

へろへろは不安そうに口をひらいた。

パックは船外温度モニターを見た。太陽の光があたっている部分はすでに三〇〇度をこえている。

「心配するな。この船は、ちよつとやさつとの熱なんかじゃ、びくともしないようできてるんだ。外板はすべて超伝導物質でできているから、どんなに熱させられても宇宙空間に放射するようになって



んだから」

「そうかあ？ でも、ずいぶん暑くなっているようだけど……」

ヘロヘロは黄色い顔にふつふつと汗をかいている。パックもまた鼻のあたみに汗がういているのを感じていた。

「おつかしいなあ、こんなにはやく暑くなるはずないんだが」

パックはぐい、と額の汗をぬぐった。たしかに船内の温度は上昇している。

「あちっ！」

コンソールにふれたパックは驚いた。コンソールは熱したフライパンのように熱くなっていた。

「ちくしょう、計算ちがいだ！」

だらだらと顔に汗をふきださせたパックは上着を脱ぎ捨て、ランニング姿になった。

「パック、それでもレースを続けるつもりなのか？」

ヘロヘロは泣きだしそうな顔になっている。

「あたりまえだ。ここでひきさがっちゃ、男がすたらあ！」

パックはタオルを手にとると、くるくるとねじり鉢巻きにして頭にまいた。

「さあ、いくぜ。ヘロヘロ！」

ヘロヘロは肩をすくめた。

「これだもんなあ……命あつてのものだねだつてのに……」

ミリイはレースの先頭をきつて飛行していた。エンジンは快調で、太陽に接近していても船内温度はぴくりとも上昇していない。コックピットでミリイは全視界モードにして操縦をしている。こうするとミリイの操縦席だけがなにもない真空の空間にういているような状態になる。彼女の足元には、太陽の光球が巨大な姿を見せている。光球の表面からはプロミネンスが猛烈な勢いでふきあげていた。そのプロミネンスひとつはさしわたし地球はおろか、木星すらいくつものみこむほどのおおきさである。その光景はユニコーン号の船外

カメラやさまざまなセンサーの情報を船のコンピュータが再構成した映像で、もちろんライブそのままではない。

「環境解析効果音オン！」

ミリーの命令で、ユニコーン号の環境解析装置は船内に轟音をひびかせた。解析装置は太陽面からの熱や光の放射を、火山のマグマのような音としてとらえていた。ふつふつと煮えたぎるような灼熱の光球の音は、ユニコーン号のコックピットに響いている。

ミリーはちらりと三次元レーダーを見やった。ミリーのユニコーン号を先頭に、レースはやや団子状態でいる。しかしユニコーン号はそれらの集団を完全にひきはなし独走状態でいる。こうなったらほとんど勝利は確実だろう。

轟……っ、という音が船内にひびく。

センサーからの情報が効果音となって再現されているのだ。船外カメラが太陽面から噴出する火炎をとらえている。音速の数十倍の速度で、太陽黒点の磁場にとらわれたプロミネンスがほのおの竜のようにたちのぼってくるのだ。ミリーは慎重にそのプロミネンスを回避するためコースをとった。いまやユニコーン号は危険なくらい太陽面に接近している。

と、船外カメラの映像が微妙に歪みはじめた。高熱と強烈な太陽黒点からの磁場が正常な映像をむすぶことをさまたげているのだ。

突然、外部の映像がまっしろになった。

どどどどど……と轟音が船体をふるわせる。

「コンピュータにながったの？」

「プロミネンスに突入。高速のプラズマが通過中。ダメージは軽微です」

冷静なコンピュータの合成音声が報告する。轟音は高速プラズマが船体を通過する際の電磁効果を解析装置が轟音として解釈したのだった。ほどなく船外モニタの映像はもとにもどった。

ミリーは船外の温度モニタの数値を見て唇をかんだ。危険なほどの高温である。船体の放熱システムは蓄えられた熱を放出できず大

量の熱エネルギーが船内の蓄熱システムに保存したままになっている。すでにユニコーン号の船体温度は太陽の表面とおなじほどまでたかまっている。

轟っ……。

船内のスピーカーがせまってくる太陽フレアを感知して轟音をひびかせた。ミリイはあわててコースを変えた。これ以上船体にダメージをあたえるわけにはいかない。

そのときミリイは三次元レーダーを見落としていた。もし目やっていたら、未確認の宇宙船がじりじりと距離をつめていることに気付いたろう。

未確認の宇宙船はフライング・タイガー号だった。

タイガーはタイタンから逃げ出し、水星の内側の軌道に先回りしていた。太陽からの熱と光は、この時期太陽に最接近していたイカロス小惑星の影にかくれていたためダメージはなかった。

タイガーは先回りをして、ミリイの宇宙船を重力レールガンで狙っていた。もうレースのことはどうでもよかった。タイタンでフライング・タイガー号にしかけた武装をあばかれ、復讐心に燃えていた。

タイガーはミリイのユニコーン号を照準にとらえ引き金に指をかけていた。

にたり……、とタイガーは笑った。

「あぶない！ にげる！」

突然の通信にミリイはびくつとなった。映話システムを見ると、スクリーンにマローン少佐が映っている。

「少佐？」

「ミリイくん、タイガーがねらっているぞ！」

ミリイはその声に三次元レーダーに目をやった。

「タイガー？」

ミリイはレーダーの輝点を見てさげんだ。いつのまにか、タイガーの船が接近していることに気付く。フライング・タイガー号からエネルギーの放出がレーダーに反応して、そのエネルギーはまっすぐミリイのユニコーン号に接近していた。

ユニコーン号とフライング・タイガー号のあいだには百万キロほどの距離がある。光速でやく三光秒弱である。フライング・タイガー号からのエネルギー放射は亜光速でせまってくるためぎりぎりでは避けられる。

ざーっ、とミリイのコックピットの外部センサがノイズに視界不良となった。フライング・タイガー号からの高エネルギー放射がかすめたのだ。

びりびりとユニコーン号はタイガーからの攻撃でふるえた。光速にちかい速度で殺到する放射により、局所的な引力の傾斜が生じたのだ。

「マローン、生きてやがったか？」

映話からタイガーの怒鳴り声が聞こえてきた。

「こんなことがあるかもしれないと思って、金星基地にきていたんだ。タイガー、あきらめろ。おまえの船は包囲されているぞ」

「なにい！」

スクリーンのむこうでタイガーはあわてた。きよろきよろと左右を見回している。その視線がレーダーにいく。あっ、とタイガーの顔色が変わる。

ミリイもレーダーを見た。

タイガーの船をとりまくように無数の輝点が見える。警察の宇宙艇であることをしめすコール・サインを発信している。

「ちくしょうっ！」

映話スクリーンのなか、タイガーは歯噛みをした。レーダーのなかのタイガーの船をしめす輝点が急角度で動く。包囲網を脱出するつもりだ。警察の宇宙艇はそうはさせじとじりじりと距離をつめていく。彼我の距離は十万キロあまり。その距離がいつきにちぢまっ

ていく。警察の宇宙艇からタイガーの宇宙船にむけ、タイト・ビームが放射された。タイガーの宇宙船は警察の宇宙艇のタイト・ビームにとらえられがちりと空間で動けなくなってしまった。

「少佐、ありがとうございます！」

ミリイが礼を言くと、スクリーンのマローンはうなずいた。

「タイガーが逃げたと聞いて、予感がしたがよかったよ。それじゃきみはレースを続けたまえ。わたしはタイガーを地球へ護送することにする。なにしろ太陽にこれだけ近付いては、きみたちの船のよくな装備をしていないからもたない」

そう言くと、マローンは警察の宇宙船を指揮して遠ざかった。

ミリイはほつとしてまたレースにもどるべく、コースをとった。

すでに太陽面は半分をすぎ、あとは地球へ向けてまっしぐら。勝利は目前だ。

「暑いよーっ」

ヘロヘロは悲鳴をあげた。

パックの宇宙船の船内はサウナのようになっている。あらゆるものが高熱をはなち、パックとヘロヘロは操縦席でぐったりとなっていた。パックはというと、上半身はだかでパンツひとつになりタオルを頭にねじり鉢巻きにしてはたばたと団扇をせわしなく動かしていた。全身からたらたらと汗がふきだし、床には水溜まりをつくっていた。

「がまんしろよ、死ぬことはないんだから」

「こんなことならくるんじゃないかった……」

ヘロヘロはぼやいた。

パックはレーダーを見てつぶやいた。

「ありゃ、こんなところにミリイの船がいるぜ」

「へ？」

ヘロヘロとパックはレーダーの画面に顔をよせた。

レーダーの画面には無数の輝点がちらばっている。その距離は数

万キロにおよんでいるが、宇宙空間では指呼の距離といつていい。そのなかでミリイの宇宙船をしめす輝点がパックの宇宙船のすぐそばに浮かんでいる。

「どういうことだ。ミリイの船は先頭を飛行していたはずだぜ」

パックは首をひねった。へ口へ口は口をはさんだ。

「事故でもあったのかな？」

「わかんねえ。ちよつと声をかけてみつか」

パックはそう言うのと映話システムのスイッチを入れた。

「ミリイ、おい聞こえているかい？　こんなところでなにしてんだ」スクリーンがあかるくなつてミリイの顔がうかびあがつた。気のせいか、彼女の表情はぼうつ、となつてパックの言葉も聞こえていないようだった。うすく目を開けたミリイはパックの顔をみとめたのか、ちよつとほえんだ。が、かくんと首がかたむきスクリーンの視界から消えた。

「いけねえ！　気を失つてら」

パックはわめいた。

ユニコーン号の船内は高熱であぶられていた。

タイガーの攻撃はしのいだが、そのさいユニコーン号の排熱システムが故障したらしかった。ほんらいユニコーン号は船体にくわえられた熱を宇宙空間に排出するための放熱フィンが装備されている。このフィンは熱を直接マイクロ波に変換して宇宙空間に放出するためであつたが、その排熱システムがうまくはたらくなくなってしまったのだ。

ミリイは操縦席にぐったりと横たわっていた。船内温度は危険なほど上昇している。ずるりとミリイのからだは操縦席からずり落ち、床に頭をぶつけた。

その痛みでミリイは目を開いた。

このままでは熱で死んでしまう。なんとかしなくては……。

ミリイはふらりと立ち上がると、食料供給ユニットの操作盤に手

をついた。操作盤もまた熱くなっている。ミリイは氷水をプログラムした。せめて冷たい水だけでも飲みたかった。食料供給ユニットはちゃんと動いた。氷をうかべたグラスがユニットの出口にあらわれる。

そこまでミリイの意識はつきた。

グラスに手をのばしたとき視界がぐらりとゆれ、ミリイはふたたびずると床にすわりこんでしまった。

ふたたび意識をとりもどしたときだれかがわめいていた。だれだろう？

「おいミリイ！ しつかりしろ」

ああ、パックだ。

ミリイはぼんやりと映話ユニットのスクリーンを見た。パックがスクリーンのむこうから怒鳴っている。

そういえばじぶんはなにをしようとしていたのだっけ？

氷！

そうだ、氷をうかべたつめたい水を飲もうとしていたのだった。

冷たい水を飲めば、頭もしっかりするだろう。

ミリイは食料供給ユニットのほうを見た。

グラスがある。ミリイはそのグラスを手にとった。

なぜかグラスのなかの水はぐらぐらと煮え立っている。

ミリイは首をかしげた。

「ミリイ！ 聞こえるか？ なんかいえよ」

あいかわらずスクリーンのむこうではパックがわめいている。

うるさいなあ……。ミリイはぼんやりとスクリーンを見た。こんなに暑くては、ものも考えられない。

ミリイはまた気を失った。

ふたたび意識をとりもどしたとき、パックの顔がミリイの視界いっぱいにあった。パックの背後にはユニコーン号のコックピットの天井が見える。

つまりミリイは床にあおむけに倒れ、パックがうえからのぞいているのだ。

「パック？」

ミリイはつぶやいた。

「どうして、あんたここにいるの？」

「そういう挨拶はないだろう？ 助けにきてやったつてのに」  
そう言つてパックはにやつと笑った。

「助けにきた？」

ミリイは鸚鵡返しをした。ゆっくりと身を起こす。

ひやつ、と冷風がミリイのほほをなでた。涼しい風がふいている。船内のエアコンが正常に動いているのだ。

「さすがにユニコーン号の温度調節システムは優秀だなあ。あつというまに温度がさがったぜ」

「どうしたの？」

「おれの船を、きみの船のしたにもぐりこませたんだ。それでおれの船の影にきみの船がはいって、船内の熱を放熱できたつてわけだ。おれは船の船外エア・ロックをのばしてドッキングしたんだ」

「そうだったの……」

ミリイはコックピットの全景モニタを見回した。ユニコーン号の真下に、パックの宇宙船がもぐっている。パックの宇宙船はユニコーン号と比べ面積がおおきいため、ユニコーン号はその影に完全にはいつている。そのため太陽からの直射をさけることになり、船内に蓄えられた熱を排熱できたのだ。ごうごうとユニコーン号の排熱システムが、ここぞとばかりにたまつた熱を排出するため全力で作動している。

「あんたの忠告を聞いていればよかったわ……こんなことになるなんて」

「どうしたんだ、ずいぶんがつくりきてるみたいだな」

「もう、レースはおしまいね。こんなに差が開いていちゃ……」

ミリイは三次元リーダーを見て叫んだ。



「パック、もうレースだとかそういうことは言っていられないわ！」  
「どうしたんだよ」

「見てよ、これを……」

ミリイはふるえる指先でレーダーの画面を指し示す。それを見たパックもあつ、と口を開いたままこおりついた。

「なんてこった！ このままじゃ、太陽に墜落しちまう！」

パックとミリイの宇宙船をしめす輝点はじりじりと太陽面に近付きつつあった。コンピューターが予想針路をディスプレイすると、あと数時間で太陽に危険なほど接近する、とでた。危険なほどとは、太陽の重力にとらえられ脱出できないということである。

「ああ！ もうだめだわ……このまま太陽につつこんで、あたしたち燃えてしまうのよ！ パック、ごめん。あたしを助けにきてくれたのに、あんたまで一緒に死なせることになるなんて！」

ミリイは後悔に両手で顔をおおった。肩がふるえて鳴咽がもれた。

「なに言ってたんだ！ あきらめるなんて、ミリイらしくないぜ」

「でもしかたないでしょ。どう考えたって、脱出は不可能よ！ ユニコーン号の推力じゃ太陽の引力をふりきれないわ」

「いや、まて。なにか手があるはずだ……」

パックはがりがりと頭をかいだ。

「たしかにユニコーン号のエンジン出力じゃ、ここまで接近してたら脱出は無理だ。といっておれの船もおなじようなものだし……」

そこまでつぶやいてパックははつと目を見開いた。ミリイを振り返り叫ぶ。

「ミリイ！ この船の航法システムはどうなってたっけ？」

「どういうこと？」

「ひとつ思いついたことがある。うまくいくかわからないけど……」  
パックはミリイの耳にくちをよせ、じぶんの思い付きをはなしてみた。ミリイの両目がおおきく見開かれた。ぽかん、と口をあけパックの顔を見る。

「そんなこと……うまくいくと思ってるの？」

「うまくいくと思うんだがなあ」

パックはにつこりと笑った。

「ともかく、やってみようぜ！」

ミリイはこっくりとうなずいた。

「そうね、だめでもとどし……」

「よし、おれは船外にでる！ ミリイはここで航法システムを立ち上げてくれ」

そう言うパックはエア・ロックから宇宙服をひっさりいいそいで身につけ始めた。

宇宙服のなかにも環境解析装置は組み込まれている。

というより、もともとの環境解析装置は、宇宙服に取り付けられたものが最初で宇宙船にはあとから機能として組み込まれたものだ。

なぜなら真空の宇宙空間において聞こえる音は、せいぜい宇宙服を着用した人間自身の鼓動とか、息遣いのみである。その音のない真空の宇宙空間で作業するうえで、まわりの物音がまったくしないというのはきわめて危険な状態になることがまありうる。

たとえば宇宙空間で宇宙ステーションを組み立てている現場を想像してほしい。そのなかで金属製の梁などが放置され、作業している宇宙服の作業員に近付いたとする。物音がなにかしていれば気配などでふりむくこともありうるが無音のままではまったく気付くことはないだろう。この気配を再現するために環境解析効果音システムは考案された。

いまパックは宇宙服を着込み、どうどうと轟きわたる轟音にたえていた。轟音は宇宙船のまわりを飛びかう荷電粒子や、高速プラズマが荒れ狂っているさまを宇宙服に装備された環境解析装置が効果音としてヘルメットのスピーカーに流しているのである。太陽面にこれだけ近付いて船外作業をしているのだからあたりまえで、これが二十世紀の旧式な宇宙服だったらあつというまに宇宙線が宇宙服

をつらぬいてなかの人間を焼き殺していたところである。

「パック、だいじょうぶ？」

ヘルメットにミリイの心配そうな声がひびく。

「だいじょうぶだ。それよりそっちのシステムはどうだい？ うまくこっちの船と同調できるか」

「むずかしいわね。あなたの船の航法システムの主コンピューターのプログラム言語がふるすぎてこっちのコンピューターで翻訳するとこよ」

「ふるくて悪かったな……」

肩をすくめパックはじぶんの船の外側をそろそろと移動していた。船の天井は人工重力が発生しているため動くのには不自由がない。パックはじぶんの船とミリイのユニコーン号を接続するため作業していた。二隻の船がドッキングしたままメイン・ブースターを噴射すれば推力は二倍になる計算だ。へろへろにも手伝わせないところだが、あいにくへろへろは太陽からの荷電粒子などの電子的なダメージにはひとたまりもなく、船外活動が不可能である。パックひとりでやるしかないのだ。

なんとかかひとりでパックは二隻の宇宙船を接続する工作をおえ、エア・ロックを通ってユニコーン号へもどった。

エア・ロック内でパックは宇宙服を脱ぐと、ブーツに汗がたまっがぼがぼと音をたてている。

「ふうーっ、一生分の汗かいたみたいだ！」

コックピットにはいるとミリイとへろへろがコンソールに顔をよせあっていた。なにか深刻そうなようすである。

「どうしたんだ、ふたりとも」

パックが声をかけるとへろへろが顔をあげた。

「パック、だめだよ。パックの船のコンピューターと、ミリイの船のコンピューターとで共通のプログラム言語がなりたないんだ」「どういうことだ」

「パックの船の航法コンピューター、ふるすぎるってことさ。ユニ

コーン号のコンピューターがうけつけないんだ。このままじゃ、二隻をドッキングしたままブースターを噴射すると、同期がうまくいかなくてあさつての方向へ飛んでいってしまうよ」

「なんとかならないのか？」

ミリイは首をふった。

「ふたつの航法システムをつなぐコンピューターがなくてはだめね。もうひとつ上の階層をつくって、二隻をオーバードライブできれば……。でもそんなコンピューターはここにはないし……」

「あるさ！」

え？ とミリイとヘロヘロはパックを見た。

「それならうつてつけのシステムがある！」

にやりとパックは笑った。その視線がヘロヘロにむかっている。

「な、なんだい？」

ヘロヘロはなぜだかいやな予感がして問い返した。パックはじつ、とヘロヘロの顔を見つめている。

「え？ ぼく？」

「そうさ、ヘロヘロ。おまえのちからを借りたいんだ」

たじたとヘロヘロは後退さった。パックの目は不気味なひかりをおびている。

「な、なんだよう。おい、その目はやめろって！」

「ヘロヘロ、おまえの足を制御する回路、そのまま船のブースターの制御につかえるんだよ。なあ、ちょっとでいいからおまえのちからを貸してくれよ」

「ええっ？」

ヘロヘロはパックの手によって両足はばらばらにされてしまった。まんまるの顔だけがユニコーン号の操縦席におかれている。ヘロヘロの両足があった穴からは無数のコードがのびて、コンソールにつながっていた。ヘロヘロの手足を制御する回路が、パックの船とユニコーン号のブースターを同時に制御する。

「なーんでぼくがこんなめにあわなきゃならないんだい！」

へろへろはふくれた。

「まあそういうなよ。どうだ、足の感覚はあるか？　ちょっと動かしてみ」

「ちよつとまって」

へろへろはうん、とちからをいれた。

轟つ……、と二隻のブースターが同時に点火する。

「わあっ！」

「きゃっ！」

だしぬけの加速でパックとミリイは床にころがった。

「いてて……おい、もうすこしやんわりできないのか」

「無理いうない！　こんなからだにして。だいたいパックはいつもいつも勝手なんだから……このレースだってぼくはいやだいやだと言ってきたのに……」

ぶつくさ文句を言うへろへろの頭をぽん、とたたくとパックは操縦席に座った。

「さあ行くぜ！　ミリイ」

「なによ、この船はあたしの船なのに……」

そう言つてミリイはパックのとなりに席をとった。

「ブースターの半分はおれの船だぜ」

パックはそう言つとへろへろに声をかけた。

「へろへろ、全速力だ！　おもいきり、いけ！」

「よしきた！」

へろへろに接続された航法システムにより二隻の宇宙船はドッキングしたまま、最大推力でもって発進した。強烈な加速が、パックとミリイのふたりを座席におしつける。二隻の船は太陽の引力をふりほどいて脱出に成功したのである。

レーダーを見つめていたミリイは歡喜の表情になった。

「パック、うまくいったわ！　あたしたち、脱出できたのよ！」

「わ、わかつてる……」

座席におしつけられたパックは強烈な加速度に身じろぎもできない。それでもなんとかミリーの言葉にうなずいて見せた。

「あとは地球へ帰るだけだな……」  
ミリーもうなずいた。

11

洛陽宇宙港にもうけられたレース会場には人々が群れていた。

それはレースの勝者をまちうける報道陣、それに見物客である。歴史上はじめての宇宙船によるレースという大舞台であるため、人々の興味をいっばいにひきつけていたからでもある。いくつもの3Dカメラはレンズのターレットをぐるぐる旋回させ、あらわれてくる宇宙船を最初にとらえようと天空を睨んでいる。記者席では、さまざまな報道機関の記者、解説者がこのレースの意義について語り合っていた。

この日、洛陽シティの上空はすっきりと晴れ渡り、一点の雲もなかった。宇宙港のはるかかなたにはシティの全容がそびえたち、会場上空は幾隻もの飛行船がゆったりと回遊してレースの最終ゴールをしめすホログラフィを空中に描いている。

と、宇宙港の管制官のひとりがふいに立ち上がった。

ひとびとのざわめきがぴたりと止んだ。

管制官はヘッドフォンを耳におしあて、すばやくマイクにむかって何事か囁いた。なんだか相手の言葉にうなずいている。

管制官のすぐちかくにはあの遠山がいた。

かれは顔いっばいに心配そうな表情をうかべている。

管制官はその遠山に気付いたようだった。ヘッドフォンをはなし、ふたこと、みこと口を開いた。

「あつ、と遠山の愁眉が開いた。

いならぶ人々にむかって口を開く。

「みなさん、レースの勝利者がもうじきやってきます！」

そう言うつと遠山は天空の一点をあおいだ。

人々もかれにならない、上空をいつせいに見上げる。

セルリアン・ブルーの蒼穹に、ひとつぼつんと煌めきが出現した。それは空中に飛行機雲をたなびかせ、ぐんぐんと宇宙港へ接近してくる。

轟々と大気が震えはじめた。ようやくその接近してくる宇宙船から衝撃波が地上へたつしたのだ。カメラの砲列はいつせいにその宇宙船にむけてレンズをむける。

会場にもつけられた巨大なモニターにその接近してくる宇宙船が映像としてとらえられた。

おーっ、という歓声が会場をつつんだ。

やってきたのはミリイのユニコーン号だった。

「なんだ、あれは……」

遠山は不審の表情になった。

それというのもユニコーン号のしたにはもう一隻の宇宙船が、まるでぶらさがっているように繋がっていたからである。

二隻の宇宙船はひとつになったまま地上へと接近してくる。

したにぶらさがった宇宙船の斥力プレートが輝き、そのままの姿勢で着陸態勢にはいつていく。

二隻はそのまま飛行船が空中に描いたゴールのホログラフィをくぐりぬけた。

わあわあという歓声が宇宙港をつつんだ。

ついに二隻は地上へ着陸した。

「お嬢様！」

遠山は小走りにユニコーン号へ駆け寄り、見上げた。

二隻の宇宙船はドッキングしたまま地上に身を横たえている。宇宙港の管制塔からは着陸した宇宙船のブースターをひやすため、冷却液を満載した車両がわらわらと集まってきていた。いつせいに車両からは冷却液が宇宙船の放熱フィンに放水される。もうもうとしろい蒸気があたりをつつんだ。

ぱくり、とユニコーン号のエア・ロックが開いた。

まぶしさに目を細め、ミリイが姿をあらわした。あたりを見回している。

「ミリイお嬢様！」

遠山は叫んだ。

ミリイは地上を見下ろし遠山をみとめた。

「遠山！」

満面の笑みをうかべ、ミリイはぱつと空中に身を踊らせた。わつ、と遠山は驚き反射的に両手をひろげた。その腕のなかにミリイは飛び込む。遠山はミリイをかかえてあおむけに倒れてしまった。

「お嬢様！ あ、あぶないじゃないですか……？」

遠山はぼかんと口を開けた。ミリイは晴れ晴れとした笑顔でいる。こんなミリイを見るのははじめてのことだ。

「お……嬢様……？」

えへへ……、とミリイは笑い声をあげた。そのとき、ミリイは十  
八才の少女そのものだった。

「ただいま、遠山。あたし、帰ってきたよ」

その声を聞いて、遠山は胸がいっぱいになった。

「お帰りなさいませ。ミリイさま」

うん、とミリイはうなずいた。

立ち上がり、ユニコーン号を見上げる。

真っ青な空に、ユニコーン号は白銀の船殻を輝かせている。エア・  
ロックからはパックが顔をのぞかせていた。ミリイは手をふって叫  
んだ。

「パック、ありがとうっ！」

パックは手をふりうなずいた。

そのころようやく報道陣が殺到してきた。記者がミリイをとりま  
き、口々にレースの勝利の感想をもとめる。ミリイはあつというま  
に人混みにのみこまれてしまった。

「やれやれ、なんとかおわったな……」



パックは満足そうだった。

「おい。パック」

船内からへろへろの声がした。ふりむくとへろへろは操縦席でからだじゅうにコードを繋がれっぱなしでふくれている。

「いったいいつになったらもとにもどしてくれるんだ？」

「わるい。忘れてた！」

パックは頭をかいた。へろへろはへっ、とうすく笑った。

ともかくレースはおわったのである。

表彰式がはじまった。

洛陽宇宙港にしつらえた表彰会場では参加したパイロット、関係者、報道陣らが勢揃いしていた。表彰台にはミリイがいた。そしてその両隣にパックとへろへろがいた。

「おれ、ほんとにここにいていいのか？」

パックはすっかりあがっていた。ミリイはそんなパックを見てにっこりと笑った。

「だいじょうぶよ。もっと背をのばして堂々としてなさい」

「うーむ……」

ミリイの提案で表彰台にはパックとへろへろも一緒に登ることになったのである。へろへろの足は元どおりになっていた。表彰にはマローン少佐が授与をおこなっていた。

「おめでとう、ミリイくん。それにパックくん。へろへろくんも」

マローンにそう言われパックは顔を赤くした。

わあっという喚声があがり、どつとばかりに拍手がわく。カメラマンたちはジャイロシステムを内蔵した手持ちカメラをもって表彰台に登っている三人を撮影する。パックはかちんかちにしゃっちこばっていた。

ミリイはそんなパックの肩をつつきじぶんにふりむかせる。

「え？」

ぼかんとした顔つきのパックのほほにミリイはすばやくキスをし

た。

それを見たヘロヘロはうへっ、となった。

「おーやおや……これでどうやらめでたし、めでたしってことか…

…」

ふとそれでも不安そうな顔つきになる。

「でも、ほんとうにこれでおわりなんだろうな？」

そうではなかったのである。報道記者のひとりがこんな質問をした。

「ミリイさん、これでレースは終了ですか？」

「いいえ」

ミリイはかぶりをふる。

「来年、またやります！」

おーっ、と声援がわいた。パックはミリイを見つめた。足元のヘロヘロを見る。ヘロヘロはそんなパックを見て「え？」といった顔になった。

なんとパックはまた目をきらきらとさせている。

「おい、パック……まさか？」

うん、とパックはうなずいた。

「ヘロヘロ、おれはやるぜ！」

あーあ、とヘロヘロはため息をついた。あんな目にあって、パックはまったく懲りていないのだ。ともかく今回のレースは有終の美をかざった。

おわりよければすべてよし。なべてこの世はこともなし、であった。

終わり

## 大団円（後書き）

いかがでしたか？

ちよつと懐かしめのSFの味を出してみたかったのですが、楽しんでいただけたでしょうか？

ぜひ感想など、お願いします！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6260c/>

---

宇宙狂時代

2010年10月8日14時43分発行